ファカルティリンケージ・プログラム
Faculty-Linkage Program

社会的ニーズに直結した、多彩な「学びの場」

活動報告書

2022年度

中央大学全学連携教育機構

2022年度　FLP活動報告書の発刊に寄せて

2022年度ファカルティリンケージ・プログラム「Faculty-Linkage Program」（通称FLP）の活動報告書が、ここに完成しました。2020年度から続く新型コロナ禍で、2022年度においてもなお学生の学外活動は自由にはならず、特に国外における実態調査には制約や懸念の残る状況でした。

フィールドワークというアクティブな学びを中心とするFLPであるからこそ新型コロナ感染症の影響は小さくなかったはずです。しかしこのような難局にあっても自発的に可能な活動を積極的に追求した学生諸君とそれを支えた担当教員のみなさまに心より感謝申し上げます。

FLP は、総合大学として確固たる実績と伝統ある中央大学だからこそ構築できる全学横断的な学修システムです。現在開講の5プログラム（環境・社会・ガバナンス、ジャーナリズム、国際協力、スポーツ・健康科学、地域・公共マネジメント）の担当教員は、中央大学に置かれるすべての学部並びにFLPの運営組織である全学連携教育機構から、それぞれの専門分野に応じてプログラム教育の担い手として構成されています。

学生諸君が所属する学部では学びきれない視点や活動をFLPは実践することを目指し、併せて、その結果をもって、さらに所属学部での勉学を向上させるという、FLP は、まさに教育活動の相乗効果をも期待した教育プログラムといえます。そのため、学生諸君が担当教員と最も近しい距離で学ぶ「ゼミナール方式」を中心に教育活動が展開されています。

FLPの3年間では、所属学部で修得した内容の向上、FLPでのゼミナール方式による教育の実践と担当教員からの直接指導、ゼミ生同士のふれあいと切磋琢磨といったことを通じて、研究テーマの深化のみならず、全人格的な涵養も修めることができると申し上げられます。

「FLP活動報告書」は、学生と担当教員のこうした教育実践の記録です。

ここに表現されている内容は、ごく一断面でしかありません。この内容以上の教育的成果と学生諸君の達成感がこの冊子には無限に詰まっています。

ご高覧いただく皆様におかれましては、表現し切れない担当教員や学生諸君の思いに幾ばくかの思いをはせていただければ幸甚です。

改めまして、FLPに対し、なお一層のご理解とご支援を賜りたくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、この活動報告書をまとめるに際し多大なご尽力いただきました関係各位への御礼をこの場をお借りして申し上げます。

2023年吉日

中央大学全学連携教育機構
機構長　　武石　智香子

目次

Ⅰ．環境・社会・ガバナンスプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的 1

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数 2

３．プログラムスケジュール 2

４．プログラムの活動 2

５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績 3

６．演習教育活動 4

（１）中村　彰宏（経済学部・教授） 4

（２）薮田　雅弘（経済学部・教授） 6

（３）谷下　雅義（理工学部・教授） 7

（４）檀　一平太（理工学部・教授） 9

（５）西田　治文（理工学部・教授） 10

（６）ホーテス　シュテファン（理工学部・教授） 12

Ⅱ．ジャーナリズムプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的 17

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数 18

３．プログラムスケジュール 18

４．プログラムの活動 18

５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績 18

６．演習教育活動 20

（１）鈴木　俊幸（文学部・教授） 20

（２）松野　良一（国際情報学部・教授） 21

（３）石山　智恵（国際情報学部・兼任講師） 28

（４）荻野　博司（全学連携教育機構・客員教授） 31

（５）山崎　恆成（全学連携教育機構・客員教授） 33

Ⅲ．国際協力プログラム

１．設置の趣旨と教育の目的 39

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数 40
３．プログラムスケジュール..... 40
４．プログラムの活動..... 41
５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績..... 41
６．演習教育活動..... 42
（１）中川　康弘（経済学部・准教授）..... 42
（２）林　光洋（経済学部・教授）..... 46
（３）清水　武則（商学部・特任教授）..... 63
（４）平澤　敦（商学部・教授）..... 66
（５）新原　道信（文学部・教授）..... 70
（６）中迫　俊逸（国際経営学部・教授）..... 72
（７）山田　恭稔（国際経営学部・教授）..... 73
（８）伊藤　晋（全学連携教育機構・兼任講師）..... 78
（９）小澤　勝彦（全学連携教育機構・客員教授）..... 81
(10) 花谷　厚（全学連携教育機構・客員教授）..... 87

Ⅳ．スポーツ・健康科学プログラム

１．設置の趣旨と教育の目的..... 92
２．2022 年度演習科目担当者および履修者数 93
３．プログラムスケジュール..... 93
４．プログラムの活動..... 93
５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績..... 93
６．演習教育活動..... 95
（１）宮崎　伸一（法学部・教授）..... 95
（２）村井　剛（法学部・准教授）..... 99
（３）青木　清隆（経済学部・准教授）..... 102
（４）中谷　康司（経済学部・准教授）..... 104
（５）市場　俊之（商学部・教授）..... 105
（６）潮　清孝（商学部・教授）..... 106
（７）阿部　太輔（理工学部・助教）..... 108

（８）小峯　力（理工学部・教授）..... 110
（９）小林　勉（総合政策学部・教授）..... 112

Ⅴ．地域・公共マネジメントプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的..... 120
２．2022 年度演習科目担当者および履修者数..... 121
３．プログラムスケジュール..... 121
４．プログラムの活動..... 121
５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績..... 122
６．演習教育活動..... 124
（１）工藤　裕子（法学部・教授）..... 124
（２）鳴子　博子（経済学部・教授）..... 129
（３）山﨑　朗（経済学部・教授）..... 131
（４）根本　忠宣（商学部・教授）..... 133
（５）天田　城介（文学部・教授）..... 135
（６）新原　道信（文学部・教授）..... 143
（７）川崎　一泰（総合政策学部・教授）..... 145
（８）小林　勉（総合政策学部・教授）..... 147
（９）堤　和通（総合政策学部・教授）..... 154

Ⅰ．環境・社会・ガバナンスプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

「環境・社会・ガバナンス」プログラムは、「環境」を中心に、社会の諸問題について広く取り組むことができるプログラムです。現代社会では、人間がよりよい生活を営むための経済や社会の諸活動により、行き過ぎた資源の利用が行われ、自然の浄化能力を超える環境汚染が拡大しています。

これらの環境汚染や資源問題は、社会経済システムのグローバル化により、一層深刻な事態になりつつあります。

世界的な問題となっている地球温暖化を例に挙げると、今までの地球温暖化は、先進国の工業化により発生した二酸化炭素の排出が原因とされています。しかし、今では中国やインド、東南アジア諸国でも経済発展と共に二酸化炭素の排出量が増大し温暖化を加速させています。今後は、経済発展が見込まれるアフリカの国々でも同様の事態が予測されています。このように、世界経済が発展すると先進国だけの問題であったものが世界規模へ拡大し、発展途上国を含むより複雑で、深刻な事態へと変容しています。また、地球温暖化による気候変動は人間ばかりではなく、地球上に生息する生物すべてに広範囲に影響を与えており、確実に生態系を壊しています。自然科学による調査データがその事実を裏付けています。人間の生活基盤は、自然が機能的に働いてこそ得られる資源、いわゆる「生態系サービス」とそれを支える生態系の維持のもとに成り立っていることを忘れてはいけません。我々の子孫が地球で存続できるかどうかは、我々の今後の行動にかかっています。

地球環境を維持し、自然とその資源を持続可能な範囲で利用し、経済活動とのバランスをとっていく事が重要と考えられます。

地球温暖化の例を挙げましたが、我々が直面する環境問題はこのような世界的規模の環境問題ばかりではありません。身近な産業廃棄物や外来種などの多様な問題もまた地域における重要な環境問題です。環境汚染の防止と資源や生態系の維持への配慮が重要である点は、身近な問題であっても変わりません。こうした問題を解決するために、われわれの社会はどのような取り組みを必要としているのでしょうか。

現在の社会経済システムにおける主要なプレーヤーの一つは企業です。従って、その活動と環境との関わりは、企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）といった企業統治の問題として捉える必要があります。また、住民は環境の単なる受益者ではありません。地域の環境問題を住民参加の視点から考えることも必要でしょう。

本プログラムは、こうした現実に生じている環境問題に対して、正しく問題をとらえ、アプローチすることができる人材の育成を目指しています。環境問題は、人間活動の総体がもたらす問題ですので、自然科学・社会科学・人文科学にまたがる学際的なアプローチが必要です。

本プログラムでは、様々な分野の専門家が多様な角度から問題に取り組んでいます。担当教員は、履修者の興味に即した研究ができるように工夫し、理論的な研究、フィールドワークなどを含めて多彩な指導を行っています。「環境・社会・ガバナンス」プログラムは広い視野を持って、持続可能な経済社会の実現に取り組もうという意欲をもった学生の参加を期待しております。

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A	FLP演習B	FLP演習C	総計	実施形態
1	中村　彰宏	経済	2	3	1	6	合併(A・B・C)
2	薮田　雅弘	経済	－	1	2	3	合併(B・C)
3	谷下　雅義	理工	－	－	5	5	単独(C)
4	檀　一平太	理工	1	－	－	1	単独(A)
5	西田　治文	理工	－	－	5	5	単独(C)
6	ホーテス・シュテファン	理工	1	3	－	4	合併(A・B)
合　計			4	7	13	24	

３．プログラムスケジュール

5 月　　第 1 回部門授業担当者委員会
　　学内活動（スプリングスクール・多摩キャンパス）

7 月　　第 2 回部門授業担当者委員会

8 月　　学外活動（サマースクール・鳥取県鳥取市他）

11 月　　2023 年度募集に伴う選考試験

12 月　　第 3 回部門授業担当者委員会
　　学内活動（期末成果報告会）

3 月　　FLP 修了発表
　　FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

スプリングスクール

実 施 日：　2022 年 5 月 28 日(土)13:00～17:00
実施場所：　中央大学　多摩キャンパス
実施内容：　フィールドワーク
テ ー マ：　多摩キャンパスの自然を探検！キャンパスウォーク 2022

サマースクール（公立鳥取環境大学との連携授業）

実 施 日：　2022 年 8 月 22 日(月)～8 月 24 日(水)
実施都市：　鳥取県鳥取市・八頭郡智頭町
実施場所：　鳥取砂丘・他

実施内容：　フィールドワーク
テ ー マ：　鳥取砂丘をさかのぼろう
～豊かな流域環境をどのように維持するか～

期末成果報告会
実 施 日：　2022 年 12 月 10 日(土) 13:00～
実施場所：　中央大学　多摩キャンパス 6103 教室
実施内容：　各ゼミによる年度活動報告、公立鳥取環境大学・中央大学とのサマースクールについての報告

５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績

東北電力、トヨタ自動車、三井住友銀行、三菱東京 UFJ 銀行、きらぼし銀行、住友信託銀行、三菱 UFJ 信託銀行、第一生命保険、共栄火災海上保険、日本放送協会（NHK）、河北新報社、博報堂プロダクツ、リクルート、旭化成、INAX、小松製作所、シャープ、東芝、住商スチール、住友重機械エンバイロメント、日立ビルシステム、コシダテック、富士ゼロックス、富士通、住友林業、日本電設工業、関電工、正栄食品工業、日鉄鉱業、千代田化工建設、日本工営、日本土地建物、オルガノ、住友化学、三井化学、豊田合成、日立製作所、凸版印刷、バンダイ、資生堂、イトーヨーカ堂、クオール、JTB 法人東京、エイチ・アイ・エス、小田急箱根ホールディングス、ヤマト運輸、東日本旅客鉄道、首都高速道路、新日本有限責任監査法人、中小企業基盤整備機構、日本自動車連盟（JAF）、全国共済農業協同組合連合会、北九州農業、国家・地方公務員（環境省、厚生労働省、国土交通省、財務省、農林水産省、公正取引委員会、会計検査院、北海道庁、福島県庁、東京都庁、埼玉県庁、岐阜県庁、板橋区役所、中野区役所、稲城市役所、さいたま市役所、日野市役所、習志野市役所、横浜市役所など）、東京大学大学院（工学系研究科社会基盤学専攻、新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻）、北海道大学大学院環境科学院生物圏科学専攻、上智大学大学院地球環境学研究科、筑波大学大学院生命環境科学研究科、慶應義塾大学法科大学院、中央大学法科大学院、中央大学大学院（経済学研究科、理工学研究科、公共政策研究科）など

６．演習教育活動

(1) 中村　彰宏（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

社会問題に対する経済学的アプローチ

＜授業の概要＞

環境問題が社会の注目を集めていますが、それは環境問題には解決が難しい要素がいろいろと含まれていて、これがベストという解決策が簡単には見つからないことも理由の一つです。経済学の視点から環境問題を見た場合、他の社会問題と比較して著しく特別というわけではありません。環境政策も、交通事故対策も、政府の自然災害への対応も、それぞれに解決が難しい要素が含まれていますが、経済学ではまず同種の手法でその問題を分析し、一つ一つの課題をクリアにして、現状と可能な解決策を検討していきます。

本演習では、最初に社会問題に対する経済学的分析手法を基本書を読むことで学び、学生が研究対象となる社会問題を研究テーマとして決め、学習した手法を用いて、対応策を策定していく演習を実施します。必ずしも環境問題にこだわらず、ゼミ生が自ら研究テーマとなる社会問題を決めてもらいます。

経済学的アプローチを用いて問題解決に挑みますが、経済学部生でない方も理解ができるよう、適宜説明を行いながらゼミを進める形となります。

活動についてはゼミ生と相談をしながら、進めていきます。これまでに当ゼミでは、レジ袋有料化政策に対する消費者の環境意識の変化に関する分析、電気自動車の普及促進策と日本のエネルギー市場の状況を踏まえた電気自動車導入の効果に関する分析、地熱発電導入とその課題に関する分析、電気自動車を中心とした自動運転車両の導入が人々の自動車所有の形態を変化させることによる自動車のライフサイクル環境負荷を低減させる効果に関する分析、洋上風力発電導入とその課題に関する分析などをグループワークとして、研究してきました。

＜活動内容＞

FLP 中村彰宏ゼミでは、本年度はコロナ禍でフィールドワーク等の実施は困難であったが見学調査を一件実施した。見学調査のほか、さまざまな制約はある中で、学習及び、調査研究を進めることができた。前期の前半には、環境問題に対して経済学的にアプローチするために、環境経済学の入門的な教科書を履修者全員で輪読し、ディスカッション主体で環境問題を経済学的に扱うための基礎的なツールを学習した。

身につけたツールを活用しつつ、昨年度からのテーマを継続しつつ発展させて調査研究プロジェクトを実施した。本年度、具体的に実施したのは、電気自動車を中心とした自動運転車両の導入が人々の自動車所有の形態を変化させることによる自動車のライフサイクル環境負荷を低減させる効果に関する分析プロジェクト、洋上風力発電導入とその課題に関する分析プロジェクトの２つの調査研究をグループワークとして実施しました。

本年度の学生たちは、昨年度に引き続き、コロナ禍の影響がある中、多くの労力をつぎ込んで、一定の成果を達成したと考えます。これらの調査研究は次年度も継続してより深い考察を加えたいとの学生の希望を尊重し、年度の成果とりまとめは口頭報告のみとします。

なお、本年度は、経済学部ゼミナール連合主催の報告会でも FLP での調査研究の成果を報告した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実 施 日：2023 年 1 月 31 日(火)

実施都市：東京都港区

実施場所：本田技研工業株式会社本社

実施内容：本田技研工業株式会社経営企画統括部環境企画部環境企画部環境エネルギー戦略企画課のチーフエンジニアの川田様、同課主査三橋様と、自動車会社が環境に対してどのような考えなのか、自動運転になって所有からシェアになると、世の中で必要とされる自動車の台数が減るのではないか、というような問題意識で、ディスカッションを行った。その後、同ビル内にある本田技研工業株式会社の安全への取り組みの展示を見学させていただき、同社がリリースしている電気自動車である Honda　e の広報車を見学し、機能等の説明を同社の Honda e 担当の本社広報部のスタッフの方より、いただいた。

成　　果：自動車会社が環境に対してどのような考えなのか、実際の生の声を伺うことで、学生がより広い視野で考えられるようになったと考えています。現実に、現場で実際に環境について考えて、企業の立場を踏まえて活動されている方々と、具体的な問題を話し合うことは、学生が調べ学習で得られた知識と現実をつなげるのに大変有益であり、先方とは事前に、オンラインでの打ち合わせ等をこのような意図を伝え、見学調査の趣旨を共有していました。実際の商品（電気自動車など）を間近で見せてもらって説明を受けることにより、同社が環境や安全に対する取り組みをどのように消費者に訴求しようとしているかについても広く学ぶことができました。

（２）薮田　雅弘（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

【B 生】環境問題とその解決について、経済学的な観点から検討、分析した。とくに、履修者の関心の高いテーマについて、C 生も参加して合同の形で演習を行い、問題の所在、分析の目的、課題、環境政策の実際について検討を行った。
今年度は、「基地の環境問題」について環境経済学的な視点、法学的な視点での検討を行った。基地における騒音他を対象に、基本的な考え方である、環境被害（限界損失）と他方で、公共財としての限界便益の関係をベースに、実際に法的な問題としてどのような事例があるか、その解決過程をどのように考えるかについて議論を進めた。

【C 生】リサーチペーパーをまとめ上げた。個人の関心に沿って、環境問題あるいは付随する問題について議論を進めた。

＜授業の概要＞

環境問題は、主に、公害問題などの外部費用の問題、自然環境などのコモンプール資源の管理問題、ならびに、景観問題などのアメニティ問題があるが、これらの問題について、経済学的にアプローチした。

まず、全体としては、演習の形式で演習 B、C 全員が参加し、討論を行う中で議論を深めた。3 年時の演習 B では、まず、テキストなどに沿って、環境経済学の基礎を学び、2021 年度は、世界遺産の保全に関して、経済問題として把握するための方法論（非排除性、非競合性をもつ公共財）を考えた。履修者の関心もあり、今年度は、「基地」サービスの供給を公共財の供給として把握し、その負担をどのように考えるかについて議論を進めた。特に法律の立場から、訴訟と裁判・判例の蓄積について報告を行うと同時に、とくに沖縄県における訴訟問題を例に議論を行った。

また 4 年時の演習 C では、各履修者の関心に応じて、(1) 自然災害と住民行動（太田川を対象とした水防災への取り組み，管理システムの考察；R3 年 8 月豪雨をめぐって）についての研究報告を行いながら、とくに行政の地域防災計画と地域住民の行動パターンの関連について議論を重ねた。また (2) 東京都の環境行政、環境政策の展開と課題（とくに太陽光についての展開）をテーマに、東京都の太陽光発電推進政策について国際的な視点から議論を行った。

これら二つのテーマについて演習 B、C の参加のもとで議論を重ね、履修者のリサーチペーパーを完成させていった。

＜活動内容＞

2022 年度は、以上のゼミの活動として、履修者の個人研究のリサーチペーパーの形で纏め、1 冊の書籍（論文集）の形で上梓した。成果の概要は、以下の内容が含まれている。

(1) 太田川を対象とした水防災の取り組み、管理システムの考察－R3 年 8 月豪雨をめぐって　キーワード　太田川水系、河川整備計画、流域治水、住民の避難行動、降雨特性
(2) 東京都の環境問題と行政、環境政策の展開と課題について－太陽光を中心に
　キーワード　東京都の環境政策、都市の環境政策、環境政策の国際比較、太陽光パネル
(3) 沖縄における基地騒音問題－差止請求は認められるか
　キーワード　基地の騒音問題、基地訴訟、騒音被害、厚木、差止請求

(3)谷下　雅義（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

＜授業の概要＞

これまでのエコツーリズムに係る知識と農山漁村の暮らしについての智慧等そして農山漁村の再生に資する関連分野の知識に基づき、最終的にゼミ論文という形式でまとめる。

＜活動内容＞

2011 年度以降、ゼミでは「エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える」というテーマを掲げ、地域に学ぶ「地域学」のスタンスで活動を行ってきた。持続可能な地域社会について考える際には都市と農山漁村をセットで議論する必要がある。都市で十分生産できない資源である食やエネルギーを提供してきたのが農山漁村である。多くの農山漁村では過疎化が進み、地方財政の悪化とともに「撤退」や「たたむ」という議論が行われている一方で、地域にある資源（森川里海）の連環を強化して、新しい暮らし方がはじまっている場所も少なくない。農山漁村で十分でないのは「仕事」であるが、その一つとして「観光、ツーリズム」があげられる。谷下ゼミでは、環境・経済・社会の持続性を基本にガイドがインタープリターとして地域で暮らす人々とつなぐエコツーリズムそして地元に学ぶ地元学の視点から農山漁村の未来を考える活動を行ってきた。

2022 年は、前期に宮城県南三陸町および石巻市雄勝町からゲストをお招きし、意見交換を行うとともに、9 月に宮城県南三陸町、11 月に石川県能登町を訪問した。全員 4 年生であるゼミ生は、自分の所属する学部、卒業後の進路そして２年間の FLP ゼミ活動の経験から、各自個別のテーマを設定し、調査研究を行ってきた。

最終的に、ジビエ（食）、エネルギー（再生可能エネルギー）そして学び（ゲーム）について報告書としてまとめた。

本ゼミは今年度で一旦ゼミを閉じることとした。11 年間で、ゼミに 2 年以上在籍した学生は 41 名。ゼミ生の学部と進路をまとめたものが図 1、2 である。近年できた国際経営・国際情報学部を除く全文系学部の学生たちに参加してもらい、私自身の「幅」が広がった。また進路については、観光業界で働いているのは 1 名であるが、みな環境・経済・社会の持続性、豊かさとは何か？　を意識しながら働いてくれているものと信じている。

週 1 回という限定的なつきあいであったが、ゼミ合宿を含め学生たちとの楽しい時間は私にとっての「財産」となりました。本当にありがとう。またいろいろな形で再会できることを楽しみにしています。

高峰様、現地の方々そして同プログラムの先生方そして教務総合事務室の方々にも大変お世話になりました。記して謝意を表します。

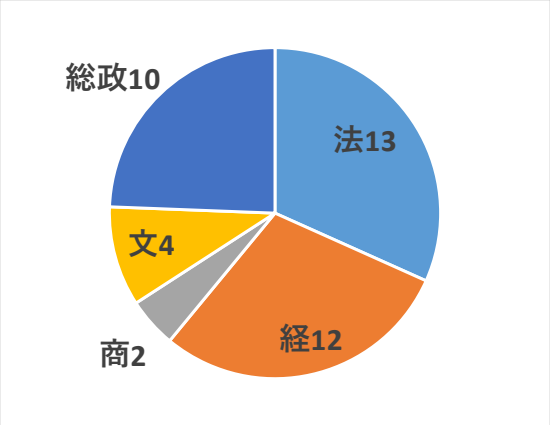


図１　学部

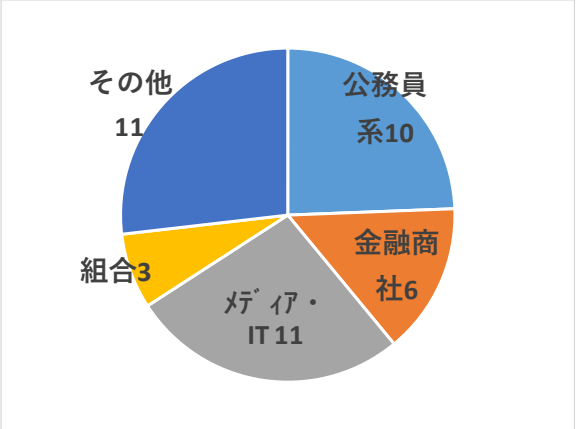


図２　進路

＜実態調査・見学調査・講演会＞
対象演習：C
実 施 日：2022 年 9 月 2 日(金)～9 月 4 日(日)
実施都市：宮城県南三陸町
実施場所：でんでんむしカンパニー・他
実施内容：初　日：かなっぺ（歌津）で自然農法と自然のリズムの中での暮らしについてお話を伺う。でんでん虫カンパニー（藍の 2 番刈前の雑草とりのお手伝い）
二日目：上の山しおかぜ学校：八幡宮～祈念公園～松原海岸：地元のみなさんと一緒に清掃活動 14 人、午後は、入谷の農家：阿部さんらのお手伝い。
最終日：海の見える命の森（後藤一磨さん・山内松吾さん） にて　いのちめぐるという意味、進められている森の整備についてお話を伺う。
成　　果：以下の URL に活動報告書をおいてあります。
https://1drv.ms/w/s!Arv-PdbDVhz7gbdiWk2hKNUP21R3kg?e=2DDj0L

(4)檀　一平太（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

環境・社会・政策脳科学

＜授業の概要＞

脳機能計測とは、人間の脳の働きやそれらを反映した反応を計測する技術である。近年、その発展は著しく、消費者心理学との融合からニューロマーケティングが、人間工学との融合からニューロエルゴノミクスが生まれるなど、分野融合的な展開が盛んである。これまで応用認知脳科学研究室では、発達障碍の薬物治療効果評価、化粧品のニューロマーケティング評価、言語習得による脳機能変化の可視化など分野融合的な研究を展開してきた。これらの経験を活用して、さらなる分野融合を目指していく。

主なツールとしては、fNIRS、脳波計測、生体反応計測、視線解析などを用いる。これらの計測法の基礎的な仕組みを理解し、その背景となる論文の購読、必要技術の習得を通して、脳機能計測のリテラシーを涵養する。統計学、人工知能などの周辺知識も併せて学んでいく。

＜活動内容＞

檀ゼミは、本年度、法学部所属学生１名の参加からのスタートであったが、理工学部所属学生とのインタラクションを通じ、想像以上の進展があった。まず、脳機能解析の応用法について、概略を学び、その中で、活用可能なテーマを模索した。ゼミ生が選択したのは環境科学と脳科学の応用であり、生活環境の景観の維持を脳活動から評価できるか否かを検証するという実験計画を立案した。未発表のため、詳細の開示はできないが、実験刺激に用いる写真映像の取得が終わり、それらを実験用プログラムで提示するための準備を進めているところである。

一方で、法学部の２年生ということで数理解析、統計解析、情報処理へのリテラシー欠如が心配されたが、独自の準備を重ねていただき、大学レベルの統計リテラシーを証明する資格である統計検定２級の取得を達成した。これにより、２年目からの研究面での飛躍が期待できるだろう。

本ゼミは一見敷居が高いように見え、実際、受講者には高レベルのハードワークが期待されているが、やる気があれば、受講者の努力をサポートする支援体制は十分に整えている。ハードワークを以って順調にゼミ活動を進めていく一期生の活躍を参考にして、関心のある学生には、ぜひFLPならではの貴重な体験に挑戦していただきたい。

(5)西田　治文（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

生物多様性と地球環境

＜授業の概要＞

受講者の設定した課題について個別指導を行うこともあれば、課題の設定がまだ充分にできない者に対しては例えば、様々な生物の観察を通して生物多様性を実感してもらうこともある。学外活動以外は、理工学部の研究室で演習を行うことが多い。

＜活動内容＞

今期は久しぶりに対面授業と野外活動が復活。国連 IYBSSD2022 にも協賛登録した。

前期

・4/23　池の水の生き物観察(光学顕微鏡)：原生生物、線虫、ミジンコ等を観察
・5/8　つくしの観察(光学顕微鏡)：胞子嚢穂と“歩く”胞子の観察
・5/28　スプリングスクール：多摩キャンパス内の自然観察
・6/11　ピール標本作り：北海道産白亜紀植物化石の顕微鏡標本作成と観察
・6/25　調べ学習の発表
・7/2　西田がスウェーデンで開催された欧州花粉学・古植物学会に参加した際の報告
・8/29～31 野外実態調査（福島県只見町で 2 泊 3 日）：1100 万年前の化石採集、ユネスコ生物多様性保全地域に認定されているブナ林と自然の観察、自然と共生する地域の民俗学的資料や展示の見学

後期

・10/29 大学周辺及び小石川後楽園の自然観察と都市の自然環境を考察
・11/12 個人研究発表　糸賀
・11/13 明星大学キャンパス歩き：中大キャンパスと連続した多摩の自然を観察（ホーテスゼミと共同）
・11/19 日本学術会議 IYBSSD2022 立上げ講演会協力と参加
・11/26 個人研究発表　早稲田、辻
・12/10 期末成果報告会
・12/17 個人研究発表　大野
・2/15　西田パタゴニア出張報告

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C
実 施 日：2022 年 7 月 29 日(金)
実施都市：東京都港区
実施場所：日本学術会議
実施内容：国連が提案し、国内では日本学術会議が主導している「持続可能な発展のための国際基礎科学年 IYBSSD2022」のキックオフフォーラムに参加し、一部運営に協力した。
成　　果：主要な講演も聴講しつつ、学術会議の活動についても理解を深めた。

対象演習：C
実 施 日：2022 年 8 月 29 日(月)～2022 年 8 月 31 日(水)
実施都市：福島県南会津郡
実施場所：只見町

実施内容：福島県只見町において、特徴的な地勢やブナに代表される植生、生物相を現地で観察すると同時に、温暖期の植物化石を採集・観察した。また、只見の自然と文化について多くの著書や活動がある新国勇氏による只見での生物多様性保全活動についての講義も聴講した。

成　　果：1100 万年前の植物化石の採集を現地で行い、現在のブナを主体とした自然林とは異なる温暖期の植生からの移り変わりを実体験した。また、民俗資料などを博物館で見学し、地域の自然利用と文化について現地で学ぶことができた。

野外実習の様子（福島県只見町 2022.8.29-31）

薪炭採取されたあがりこのブナ林

只見町ブナセンター　野々沢の化石

只見モノとくらしのミュージアム

モノとくらしのミュージアムの民具

野々沢での中期中新世化石採集

同左

ブナ原生林で新国勇氏による解説

ブナ林内のスッポンタケ

(6)ホーテス　シュテファン（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

【A 生】

授業のテーマとして持続可能性科学を取り上げる。つまり、社会生態系の安定性や動態、回復力（レジリエンス）などといった現象を幅広く探る。

【B 生】

授業のテーマは、持続可能性を推定・評価するための方法と持続可能性指標の政策や計画における応用です。

＜授業の概要＞

【A 生】

環境や社会、経済を科学の観点から包括的に捉え、これらの複雑な仕組みをどのように維持できるか、理論と実践の両面から探る。社会経済系と生態系との相互作用を分析し、その動態を理解するための基礎知識を身につける。そして、科学的知見を政策や計画、事業の実施などに応用するための体制づくりについて学ぶ。

持続可能性の概念の形成や近年の発展について把握し、食糧や素材、エネルギーの供給に関する議論から廃棄物の処理や生態系機能の低下を巡る課題まで具体例を取り上げ、勉強する。世界各地の動きに関する資料を使うため、英語の文献がしばしば出る。ドイツ語やその他の言語を活用できる場面もあるので、言語力を身につけるよい機会にもなる。

持続可能性に関する諸問題を定量的に分析するためのデータとその活用に必要な解析方法を最新の研究結果を用いて紹介する。生態系の容量や生物の個体群動態といった生態学の基礎に加えて、社会や経済の行方を左右する人口の変動や環境を変える能力を向上させる技術の発展を視野に入れる。政策や計画という社会生態系を制御するための道具に関する意思決定における重要な要因として、世界観や価値観、様々なメディアから手に入る情報について議論を行う。

アクティブ・ラーニングを重視し、自主プロジェクトやゼミにおける発表・質疑討論を実施する。持続可能な発展を巡る実社会における課題について把握するために、様々な現場で活躍している実践者の話を聞いたり、活動に参加したりする機会を設ける。

【B 生】

持続可能性科学ゼミの FLP 演習 B においては、持続可能な地域づくりに取り組んでいる行政機関や民間団体、企業などの担当者のヒアリング調査と環境科学の手法を用いたフィールド調査を実施する。これらのケーススタディーで得られるデータを解析し、持続可能評価法について勉強する。

＜活動内容＞

持続可能性科学ゼミでは、環境の様々な構成要素に関する情報を活用し、人と環境の相互作用の分析を行い、持続可能な地域づくりについて議論する。環境と社会、経済に関する知見を踏まえて、持続可能性を巡る課題に分野横断的に取り組む。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実 施 日：2022 年 4 月 18 日(月)～

実施場所：中央大学　多摩キャンパス

実施内容：多摩キャンパスにおける植生の変化

成　　果：多摩キャンパスにおいては、元雑木林、製炭林と思われる林が約 16 ヘクタール残存していて、大学職員、業者、地域住民による管理によって維持されている。過

去の土地利用において定期的に行われた伐採とその後起こる萌芽更新の循環的な管理が大学キャンパスにおいて行われていないが、近年進行しているナラ枯れの影響で、比較的に樹齢の高いナラの立ち枯れが進行している（図 1)。立ち枯れした樹木は、事故防止のための伐採が、2022 年の春から夏にかけて行われた（図 2～図 4)。伐採の影響で、比較的に開けた林ができて、希少種を含む生物相の今後の遷移が注目される。下草が少なくて明るい林床では、春においてコナラの発芽がよく見かけられたが（図 5)、実生の死亡率が非常に高かったようで、夏まで生き残る実生がほとんどなかった。

草刈りは場所によって年に数回行われるところ（道沿い、図 6）と 1～2 回だけ行われるところ（林の中、図 7）が確認された。適度の草刈りなど管理活動に依存する希少種もキャンパス内に生育しているため、管理活動の継続が大事であると思われる。

図 1　2022 年 7 月 18 日

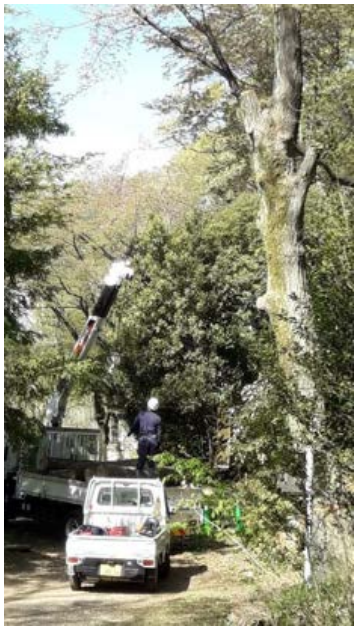


図 2　2022 年 4 月 11 日

図 3　2022 年 6 月 27 日

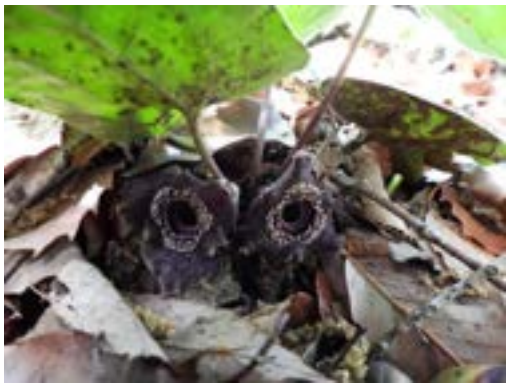
図 4　2022 年 7 月 18 日

コナラの種（どんぐり）が発芽し、
実生が成長を始める中央大学多摩
キャンパス南東部。

図 5　2022 年 4 月 11 日

図 6　2022 年 10 月 4 日

図 7　2022 年 5 月 16 日



定期的に下草が刈られるところに
生育するタマノカンアオイ。

図 8　2022 年 4 月 25 日

＜実態調査・見学調査・講演会＞
対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 9 月 2 日(金)
実施都市：東京都港区
実施場所：国立科学博物館附属自然教育園・他
実施内容：自然教育園見学・都心の緑地の生物群集の観察（図 9、図 10）
成　　果：自然教育園の植生は、過去において数回大きく変化していることが報告されている。縄文海進の約 7000 年前の頃は、自然教育園の所在地は海岸近くに位置していたが、現在の標高（海抜約 15m～30m）から推定すれば、海水の影響を直接的に受けておらず、照葉樹林が優占していたと思われる。武蔵野台地の低地においては、タブノキが多く、標高が相対的に高いところはスダジイが多かったとされている。江戸時代までは土地被覆や土地利用に関して具体的な資料はないが、江戸時代においては高松藩の大名屋敷になり、庭園が造られたと思われる。一部は入会地や水田、畑もあったようである。明治時代には海軍、陸軍が利用し、大正時代からは宮内庁が管理するようになった。植生など土地被覆に関する情報がほとんど残

っていないが、行政の管理下で都市開発から守られたと思われる。その結果、江戸時代の庭園やその後の遷移によって発達した森林植生が残ったところもある。樹齢の高いアカマツやスダジイがその象徴である。第二次世界大戦後、文部科学省が担当することになり、国立科学博物館が管理するようになった。それ以来、植生管理が最低限の程度で行われ、自然遷移が進むようになった。遷移の方向として、照葉樹の割合が増加することが多いが、帰化植物としてシュロが増加するようになったところもある。近年は、ナラ枯れの影響で枯れてしまうコナラ、クヌギなど、落葉のナラ類が高木相において減少することもある。上記の傾向は、多摩キャンパスにおいて起きているため、自然教育園で得られた知見を多摩キャンパスにおける生物多様性、生態系サービスの維持管理において参考にできる可能性がある。

図 9　2022 年 9 月 2 日

図 10　　2022 年 9 月 2 日

図 11　2022 年 11 月 13 日

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 11 月 13 日(日)
実施都市：東京都日野市
実施場所：明星大学　日野キャンパス
実施内容：キャンパス植生管理見学、自然観察（図 11）
成　　果：明星大学の取り組みについて学んだ。分野横断的な SATOYAMA プロジェクトで得られた知見は中央大学の取り組みにおいても参考できる可能性がある。

図 12　2023 年 1 月 17 日

図 13　2023 年 1 月 17 日

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 10 月～2023 年 3 月現在に至る
実施場所：中央大学　多摩キャンパス（図 12、図 13）
実施内容：多摩キャンパスにおいて自動撮影カメラを設置し、中型哺乳類調査
成　　果：3 カ月で中型哺乳類が 5 種以上撮影された。

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 3 月 4 日(土)
実施場所：中央大学　多摩キャンパスフォレストゲートウェイ F505 教室（図 14～19）
実施内容：デザインセッション多摩 2022「みどりのオープンキャンパス」
成　　果：明星大学その他 9 つの多摩丘陵にキャンパスを持つ大学が係わったイベントに参加。ドイツ・ハノーファー大学地理学部の学生 18 人、教員 2 人と八王子市の環境教育施設のスタッフ 1 人に向けて、ゼミ生が発表し、多摩キャンパスを案内した。

図 14　2023 年 3 月 4 日

図 15　2023 年 3 月 4 日

図 16　2023 年 3 月 4 日

図 17　2023 年 3 月 4 日

図 18　2023 年 3 月 4 日

図 19　2023 年 3 月 4 日

Ⅱ．ジャーナリズムプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

本プログラムは、長谷川如是閑や杉村楚人冠といった日本の歴史に残る著名なジャーナリストを輩出した中央大学の伝統を継承し、ジャーナリズム全体のさらなる発展をこの中央大学から巻き起こすことを目的としている。

所属する学部で学ぶ専門知識と本プログラムのフィールドワークを融合させることにより、広い視野を持ち物事の本質を深く考察・分析・報告できる人材を育てる。さらには、企画力、文章力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などの社会人基礎力を向上させ、ジャーナリズムの世界で活躍できる人材を育成する。

また、学生諸君が個々の目的と将来に向けてのキャリアデザインを描けるように、担当教員はマスメディア界を含めた広い社会の要請に十分応えられる指導と教育を行う。

長谷川如是閑

杉村楚人冠

山根真治郎

中央大学は、1909 年に新聞学科を設置。日本では、最も早くジャーナリスト養成に取り組んだ大学のうちの 1 つである。これまで、東大、早慶とともに、マスコミ業界に多数の人材を輩出してきた。また、戦前に、「新聞学院」という民間のジャーナリズムスクールがあったが、それを設立した山根真治郎も、中央大学出身であった。この「新聞学院」はのちに、日本新聞協会付属の機関となり、終戦まで続いた。

戦後も駿河台にキャンパスがあった時代には、朝毎読の新聞社の各部長、デスクに必ず 1 人は中大出身者がいたという時代もあるほど、ジャーナリストを輩出していた。しかし、1978 年の多摩全面移転以降、マスコミ志望者の減少、大学としての公的教育プログラムの消滅によって、ジャーナリストの道へ進む学生の数が激減した。権力を監視し弱者の声を代弁し社会に対し大きな影響力をもつジャーナリストを中央大学が育成することは、大学のみならず民主的な社会を構築する上で極めて重要である。

このため、2003 年に「FLP ジャーナリズムプログラム」を設置。戦前戦後に渡って、優秀なジャーナリストを輩出してきた中央大学の名誉と勢いを回復せんとするものである。実際、2003 年以降、この FLP の演習を受講した後、朝日・毎日・読売などの新聞業界、NHK や民放などの放送業界、電通などの広告業界、講談社などの出版業界などのマスコミへ就職した学生の数は、100 人以上に及んでおり、本プログラムは確実に実績を出している。

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属 学部	FLP演習A	FLP演習B	FLP演習C	総計	実施形態
1	鈴木　俊幸	文	－	－	1	1	単独(C)
2	松野　良一	国際情報	8	10	2	20	単独(A･B･C)
3	石山　智恵	国際情報	8	4	7	19	合併(A･B･C)
4	荻野　博司	全学連携 教育機構	1	5	5	11	単独(A)合併(B･C)
5	山崎　恒成	全学連携 教育機構	12	12	12	36	単独(A)合併(B･C)
合　計			29	31	27	87	

３．プログラムスケジュール

5 月　　第 1 回部門授業担当者委員会

7 月　　第 2 回部門授業担当者委員会

11 月　　2023 年度募集に伴う選考試験

12 月　　第 3 回部門授業担当者委員会
　　学内活動（期末成果報告会）

2 月　　第 4 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

3 月　　FLP 修了発表
　　FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

期末成果報告会

実 施 日：　2022 年 12 月 10 日（土）13:00～
実施場所：　ライブ型オンライン
実施内容：　各ゼミによる年度活動報告

５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績

日本放送協会（NHK)、テレビ朝日、TBS テレビ、秋田テレビ、福島中央テレビ、中部日本放送、東海テレビ放送、中京テレビ放送、日本テレビ音楽、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、日本経済新聞社、北海道新聞社、NHK 出版、時事通信社、中日新聞社、中国新聞社、岐阜新聞社、新潟日報社、共同通信社、NTT 東日本、NTT データ、NTT ドコモ、KDDI、沖縄ケーブルネットワーク、電通、博展、小学館、日本出版販売、ベネッセコーポレーション、文藝

春秋、光文社、白泉社、ダイヤモンド社、日本教育新聞社、有斐閣、WOWOW、東北新社、ジャンプコーポレーション、京王エージェンシー、読売広告社、IMAGICA、PRAP JAPAN、デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム、学情、リクルート、みずほフィナンシャルグループ、清水建設、横浜ゴム、日本銀行、三井住友銀行、三菱東京 UFJ 銀行、千葉銀行、京葉銀行、八十二銀行、北洋銀行、山梨中央銀行、第四銀行、川崎信用金庫、日本政策金融公庫、東京海上日動火災保険、損害保険ジャパン日本興亜、ソニー損害保険、大樹生命保険、明治安田生命保険相互会社、野村総合研究所、野村証券、富士通、リコー、都築電気、凸版印刷、野村不動産パートナーズ、三井住友トラスト不動産、タマホーム、ヤフー、Z ホールディングス、任天堂、ニフティ、GeeeN、全日本空輸、ANA エアポートサービス、日本旅客鉄道、JTB 首都圏、オリエンタルランド、ぴあ、日本アイ・ビー・エム、エム・シー・コミュニケーションズ、フロンティア・マネジメント、地方公務員（県庁・市役所など）、慶應義塾大学、早稲田大学大学院政治学研究科ジャーナリズムコース、中央大学大学院（文学研究科、総合政策研究科）など

６．演習教育活動

(1)鈴木　俊幸（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

メディア史研究

＜授業の概要＞

本年度は、昨年度までの成果を踏まえ新たな調査・研究を二件並行して展開した。第一に、新聞・雑誌の流通網の発達する過程を捉え、稗史小説類の出版・流通との相関を明らかにすることに注力した。第二に、広告メディアの多様性とその時代的変遷、地域発信の広告戦略の様相を捉えるための事例研究として、愛知県紙を中心に地方書店の広告を網羅的に調査・収集し、その史的展開をたどるべく検討を重ねた。

データ入力作業や各自担当の調査に基づく報告と討議を主軸に授業を進め、それに基づいて、共同執筆論文を仕上げ、本年度末発行予定の雑誌『中央大學國文』に投稿した。

＜活動内容＞

本年度鈴木ゼミは、昨年度から継続して、愛知県紙を主たる素材として、当該地方における新聞の発行・流通状況、書籍広告の様相について調査・検討を重ねてきた。夏の共同調査を経て現状入手可能な当該地方の新聞データを網羅することができたので、以後それに基づいて分析を重ね、「愛知県紙に見る書籍流通史の一こま」と題する共同論文を作成、『中央大學國文』第 66 号（2023 年 3 月発行）に投稿した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C

実 施 日：2022 年 7 月 2 日(土)（鈴木は前日より）

実施都市：愛知県名古屋市

実施内容：愛知県立図書館・名古屋市鶴舞中央図書館所蔵新聞（マイクロフィルム）の調査

成　　果：昨年度まで得られたデータに不足していた部分をこの調査で補完することができた。これを含めたデータの分析に基づき、共同論文の大枠と構成を確定することができ、後期から論文の担当部分の検討を重ねて論文を仕上げることができた。

(2)松野　良一（国際情報学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

ドキュメンタリー制作およびノンフィクション執筆の実践

＜授業の概要＞

①ドキュメンタリー制作

②国内外取材プロジェクトの遂行とアウトプット

③『中央評論』のグラビア、特集、などへの執筆、出版活動

＜活動内容＞

多様な能力開発およびジャーナリストマインドの育成のために、実践的な活動を行なった。

主として、①実際にネット配信およびケーブルテレビで放送するための番組制作、②各種活字メディアへの執筆活動、を 2 本柱とした。

①番組制作については、「多摩探検隊」および「にっぽん列島探検隊」用の 5 本を制作した。視聴世帯可能世帯数は、にっぽん列島探検隊はイッツコム系列の約 68 万世帯である。多摩探検隊は 2019 年度からケーブルテレビ放送ではなく、ネット配信としている。

②「特攻と中央大学―記憶を後世に―」プロジェクト

太平洋戦争において特攻戦死した中央大学学徒の物語を調査によって可能な限り掘り起こし、書籍と映像作品を刊行することで中央大学の後輩たちに記憶をつないでいくことを目的とした新たなプロジェクト。2021 年度に引き続き、2022 年度も継続した。

(1)特攻戦死した中央大学学徒について防衛研究所、国会図書館などに保存されている戦闘詳報等の記録を総合的に調査（陸海軍別の正確な戦死者数の割り出しや個人に関わる記録の保存等）。

(2)全国の記念館、資料館や史跡などを調査し、特攻戦死した中央大学関係者の遺影、遺書、遺品等がどこにあり、どのように保存・展示されているかを明らかにすること。

(3)上記の活動によって収集した公式記録、遺族の証言、保存文書などから、可能な限り学徒の物語を掘り起こし、活字、映像メディア媒体を通じて歴史を伝承すること。

③執筆活動については、学内のメディアである『中央評論』に定期的にルポルタージュ 4 本を投稿し掲載された。

1. 番組「多摩探検隊」制作
YouTube「多摩探検隊」サイトにて配信中

放送月	企画	D	番P	進行状況
22年3月	「戦車は動けない」 ―北ベトナムの日本人女性歌手―	菊地	伊藤・藤川	放送済み
22年6月	「新選組をあるく①」 第187回多摩探検隊	永橋	長谷・畠山	放送済み
6月	「新選組をあるく②－佐藤彦五郎編－」 第188回多摩探検隊	永橋	長谷・畠山	放送済み
22年8月	コロナ感染！―3学生の証言―	岩渕	伊藤・藤川	放送済み
8月	智恵ちゃん…お父さんは泣きました ―ある BC 級戦犯の手紙―	高見	伊藤・藤川	放送済み

2. 番組「にっぽん列島探検隊」制作
CATV「イッツコム」にて放送中

放送月	番組回	使用VTR	番P
21年3月	53回	『青い目の人形』と戦争 ―Doll Project and War― 「地方の時代」受賞作品特集 (「顔面紙芝居～芸の道、家族とともに～」)	高見
4月	54回	「地方の時代」映画祭受賞作品 (「後に続くを信ず」)	高見
5月	〃	〃	〃
6月	55回	「地方の時代」映画祭受賞作品 (『私は何者であるのか・・・』 ―ある台湾人学徒の証言―)	高見
7月	〃	〃	〃
8月	56回	「戦車は動けない」―北ベトナムの日本人女性歌手―	高見
9月	〃	〃	〃
10月	57回	コロナ感染！―３学年の証言―	高見
11月	〃	〃	〃
12月	58回	智恵ちゃん…お父さんは泣きました ―ある BC 級戦犯の手紙―前編	櫻井
22年1月	〃	〃	〃
2月	59回	智恵ちゃん…お父さんは泣きました ―ある BC 級戦犯の手紙―後編	櫻井
3月	〃	〃	

3. 歴史発掘・記録プロジェクト

活動日程	場所	内容	アウトプット
2021 年 5 月～	国立国会図書館 防衛省防衛研究所 戦史研究センター 鹿児島県知覧町 他	特攻戦死した中央大学学徒に関わる執筆、映像作品の制作	・特攻戦没者名簿の作成 ・遺品収集状況の作成 ・制作した作品を刊行予定

4. 執筆プロジェクト

『中央評論』グラビア

掲載時期	執筆者	内容
2022 年春号(319 号)	岩渕功	新型コロナウイルス感染症に罹患した学生たち ～3 人が語った感染体験～
2022 年夏号(320 号)	出井一彰	盲目の姉妹ピアニスト ～見えない世界で奏でる～
2022 年秋号(321 号)	永橋あずさ	新選組の故郷 ～多摩地域を旅して～
2022 年冬号(322 号)	鵜飼健司	五日市憲法 ～市民が作った憲法～

5. コンテスト受賞歴について

日時	コンテスト名	賞	作品	制作者	時間	内容
2022 年 9 月	「地方の時代」映像祭 市民・学生・自治体部門	① 優秀賞 ② 奨励賞	① 「戦車は動けない」 ② 「智恵ちゃん…お父さんは泣きました」	① 菊地雄己 ② 高見遥菜	① 26 分 ② 44 分	① ベトナム、ホーチミンにある戦争証跡博物館。その中に日本人女性の写真が飾られている。写真説明には、「1973 年 12 月 10 日、北ベトナムクアンビンの砲兵部隊の中で歌うヨイコクミコ」と書かれていた。この女性は一体誰なのか、そしてなぜ北ベトナムで歌っているのか。博物館に飾られた一枚の写真を手がかりに、その謎を追った。

						② 戦時中、日本軍はタイのノンプラドックからビルマのタンビュザヤをつなぐ泰緬鉄道を建設しました。その際、工事に駆り出された多くの連合軍捕虜が、劣悪な環境の下で犠牲になりました。日本敗戦の結果、泰緬鉄道建設に関わった多くの日本軍兵士がBC戦犯となり、処刑されていきました。軍医、信澤寿さんもその1人。戦前、彼は群馬県高崎市で医院を開業する医師でした。妻のつねさん、娘の智恵子さんとの幸せな暮らしは戦争によって一変しました。日本に戻ることなく、異国の地で処刑された寿さん。彼は最期に何を思ったのか。そして、残された家族は戦後、どんな思いで生きてきたのか。一人のBC級戦犯とその遺族の思いに迫りました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞
対象演習：B
実 施 日：2022 年 2 月 26 日(土)～2 月 28 日(月)
実施都市：北海道稚内市
実施場所：稚内市樺太記念館・他
実施内容：資料収集および記録
成　　果：映像作品「樺太残留邦人」を制作予定

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 4 月 1 日(金)
実施都市：埼玉県川口市
実施場所：芝崎康様宅
実施内容：特攻戦史した中央大学学徒、芝崎茂様のご遺族の方への取材
成　　果：「特攻と中央大学」プロジェクト関係の作品として制作予定

対象演習：B
実 施 日：2022 年 4 月 24 日(日)、4 月 30 日(土)、5 月 20 日(金)、6 月 26 日(日)、
　　7 月 17 日(日)、8 月 13 日(土)
実施都市：千葉県千葉市
実施場所：千葉県文化会館
実施内容：千葉県少年少女オーケストラの演奏会撮影・他
成　　果：映像作品「スプーン先生」を制作予定

対象演習：B
実 施 日：2022 年 5 月 15 日(日)
実施都市：鹿児島県南九州市
実施場所：知覧特攻平和会館
実施内容：資料収集および記録
成　　果：「特攻と中央大学」プロジェクトに関する調査および記録

対象演習：B
実 施 日：2022 年 5 月 20 日(金)～5 月 22 日(日)
実施都市：山口県岩国市
実施場所：岩国市民文化会館
実施内容：ほびっと 50 周年の集い、岩国基地前でのデモへの参加
成　　果：映像作品「反戦喫茶ほびっと」を制作予定

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 6 月 25 日(土)

実施都市：茨城県笹間市
実施場所：筑波海軍航空隊記念館
実施内容：筑波海軍航空隊慰霊の集いへの参加
成　　果：「特攻と中央大学」プロジェクト関係の作品として制作予定

対象演習：B
実 施 日：2022 年 6 月 26 日(日)～6 月 27 日(月)
実施都市：兵庫県加西市
実施場所：sora さかい
実施内容：資料収集および記録
成　　果：「特攻と中央大学」プロジェクトに関する調査および記録

対象演習：B
実 施 日：2022 年 8 月 2 日(火)
実施都市：富山県富山市
実施場所：富山護国神社
実施内容：富山大空襲に関する取材
成　　果：執筆作品「富山大空襲」を制作予定

対象演習：B
実 施 日：2022 年 8 月 23 日(火)～8 月 24 日(水)
実施都市：山口県周南市
実施場所：回天記念館・他
実施内容：中央大学出身の回天特別攻撃隊員難波少尉と館脇少尉に関する調査
成　　果：「特攻と中央大学」プロジェクト関係の作品を制作予定

対象演習：A
実 施 日：2022 年 8 月 27 日(土)
実施都市：福島県二本松市
実施場所：勤労者研修会館
実施内容：合唱団の撮影および取材
成　　果：映像作品「響きわたれ　ぼくたちの歌」を制作予定

対象演習：B
実 施 日：2022 年 9 月 2 日(金)
実施都市：愛知県安城市
実施場所：細井新弥様宅
実施内容：特攻戦死した中央大学学徒、細井亨様のご遺族の方への取材
成　　果：「特攻と中央大学」プロジェクト関係の作品を制作予定

対象演習：A
実 施 日：2022 年 9 月 18 日(日)～9 月 20 日(火)
実施都市：青森県青森市、弘前市
実施場所：田中博男様宅、弘前市運動公園
実施内容：マスターズ陸上 M90 世界記録保持者である田中博男様のトレーニング風景、大会を撮影、取材
成　　果：映像制作「世界最速シニアランナー」を制作予定

対象演習：B
実 施 日：2022 年 12 月 18 日(日)
実施都市：広島県呉市
実施場所：大和ミュージアムー呉市海事歴史科学館
実施内容：戦艦大和に関する取材
成　　果：「特攻と中央大学」プロジェクトに関する調査および記録

(3)石山　智恵（国際情報学部・兼任講師）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

”伝え手”に必要な「表現法」と「視点」を身につける

＜授業の概要＞

メディアにおける”伝え手”は、「正しく、美しい日本語」の使い手であることが求められるが、時代の変化の中で、読み方や意味を間違えて覚えている言葉は少なくない。本演習では、アナウンサーでさえ悩む、「誤読・誤用の多い言葉の読み方や使い方」を紹介し、正しい文法や知識について学ぶ。また、腹式呼吸を使った発声法や母音の無声化・鼻濁音などを学び、パブリックスピーキングに必要な、アナウンス力、スピーチ力の習得を目指す。実際に放送で用いられるニュース原稿などを使った「読みの演習」のほか、制限時間を定めた自己PR、「最近気になったこと」などのテーマについての発表を行い、「伝わる・響く」プレゼンテーションの力を養う。

また本演習では、”伝え手”に不可欠な、社会や物ごとを多角的に捉え、本質を見極める目、「視点」を養うことを目指す。実際にテーマを決めて、現場で取材し、テレビニュースリポートにまとめる演習も行う。事前リサーチ、構成台本の作成、現場取材、編集、ナレーション、スタジオ収録など、テレビ番組制作の一連の作業を経験することで、「不特定多数の人に、わかりやすく伝える」力を身につけることを目指す。

また、ゲストスピーカーの招聘などを通して、視野を広げ、社会的課題などについて自ら考える力を養うことを目指す。

＜活動内容＞

石山ゼミでは、主に放送で用いられる「パブリックスピーキング」のスキルを、実践的な演習の中で身につけ、学生にとっての即戦力とするプログラムに取り組んだ。

履修生は、2年生8名、3年生4名、4年生7名の計19名。

前期は、発声や発音、アクセント、口調などのアナウンスの基礎を、テキストを使用し座学で学習した他、実際のニュース原稿を用いて、実践的なアナウンス技術の習得を行った。

その他、「誤読や誤用が多い日本語」について、クイズ形式で回答、解説するなどした。

自己表現力と、「わかりやすく伝える」技術を習得する実践では、前期は、300字程度の自己PRと、900字程度のフリートークの執筆と発表に取り組んだ。300字の原稿は、話して伝えると1分程度、900字は3分程度になるが、このサイズの文章やプレゼンテーションは、就職活動のエントリーシートや面接でも求められることが多い。

ポイントを明確に、道筋の通った文章を書くこと、聴き手を惹きつけながらプレゼンテーションするコツを伝え、学生たちは、それぞれに試行錯誤しながらスキルを磨いた。

6月11日には、外部講師を招き、特別講義を行なった。

内容は、下記の通り。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2022年6月11日(土)

講 演 者：堀江　愛利 氏（Women’s Startup Lab）

演　　題：起業家精神とイノベーションを起こす力

実施施設：中央大学　市ヶ谷田町キャンパス301教室

実施内容：米国シリコンバレーを拠点に女性起業家の育成に取り組む堀江愛利氏は、17歳で渡米し、カリフォルニアの大学を卒業後、IBMを経て、自ら起業した経験の持ち主。CNNの「10 Visionary women」にも選ばれている。

「起業家精神とはどういうものか」また、「イノベーションを起こすことができ

る人材になるためには何が必要か」といった視点で、レクチャー頂いた。講義中、堀江氏からの問いかけに、学生同士活発な議論も行われた。
学生たちは、講義を受けて、900 字程度の記事を執筆。
石山ゼミのブログに投稿して、公開した。

成　　果：「自分はどんな人間か」「強みは？」など、自己への理解を深め、持てる力を最大化するためのヒントをそれぞれに学んだ。
同時に、示唆に富んだ外部講師・堀江氏の話から、大切なメッセージを抽出し、不特定多数の読者にわかりやすく伝える実践を積むことができた。

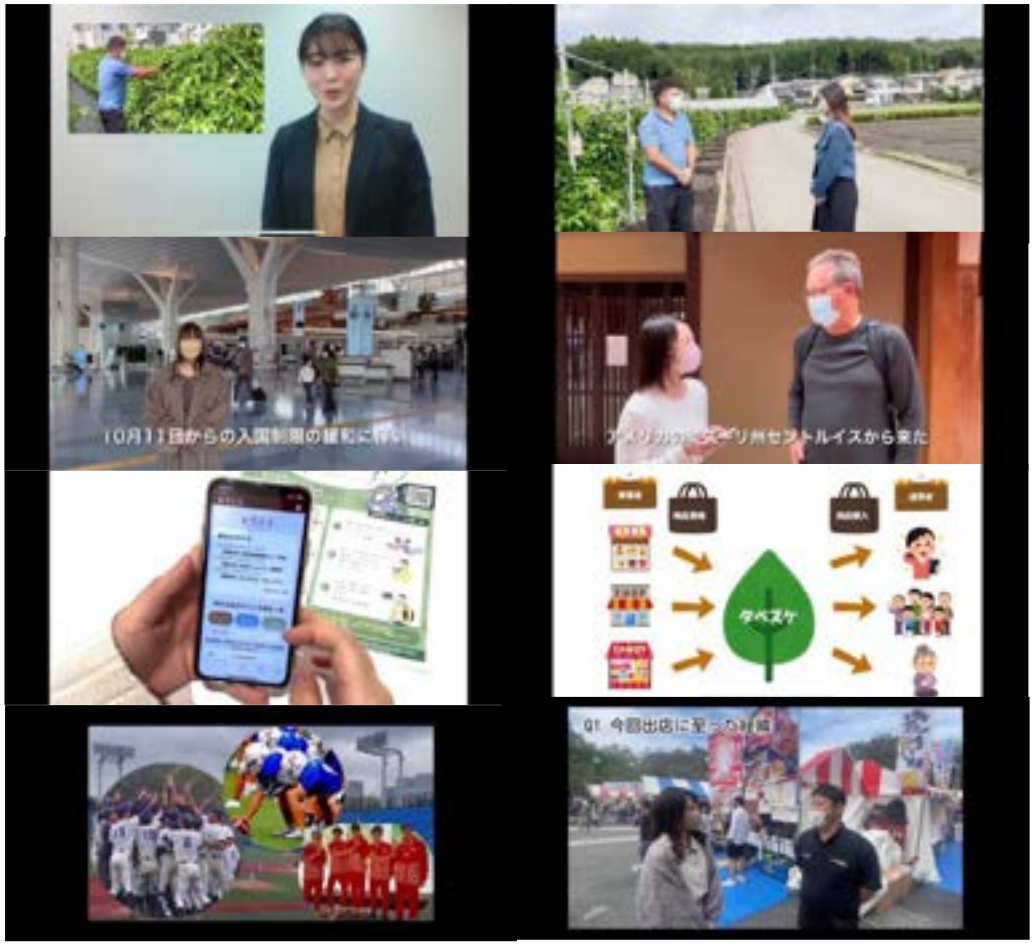
後期は、5 階ワークステーションおよびスタジオ設備を活用し、テレビニュース番組・リポート制作の演習に取り組んだ。映像編集では、松野先生、IT サポートデスクの小山さんからもご指導いただいた。

3 分程度のリポート制作に、学生たちは初めて挑んだ。3～5 人のグループに分かれ、それぞれの興味関心で選んだ社会的テーマについて取材。構成台本を作成し、映像取材し、編集し、ナレーションを吹き込み、テロップを入れる、というテレビリポート制作の一連の作業を経験した。

全て初めてのことで、学生たちは苦心した様子だったが、チームで力を合わせ、修正を加えながら、形にすることができた。

各班が取り組んだテーマは、次の通り。

① 「“パッションフルーツ”を八王子の新たな特産品に～若手農家の取り組み」
② 「新型コロナ“水際対策緩和”で空港は？」
③ 「広がる“フードロス”削減の取り組み」
④ 「九州物産フェア～熊本地震からの復興をめざして」
⑤ 「コロナ禍で苦境が続く“応援団”の挑戦」



また、今年度最後の課題として、ミニニュース番組制作に取り組んだ。
リポート制作で作った企画リポートと、ストレートニュース数本を組み合わせ 10 分程度のニュース番組を構成、スタジオ収録した。

前期で学んだアナウンス技術と、後期に取り組んだニュースリポート企画を 1 つの作品にまとめることができ、学生たちは、それぞれに、気づきや達成感を得た様子だった。

(4)荻野　博司（全学連携教育機構・客員教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

メディア状況を学び、論理的な文章構成力を身に付ける

＜授業の概要＞

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③新聞記者の直面する問題の検討、の 3 本立てです。①の作文は毎週、宿題とし 800 字を書いてもらいます。新聞社、通信社、NHK の過去の入社試験の課題を中心としますが、最新の時事用語をテーマとし、全学年を対象にした統一論題を提示することもします。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることです。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げるとともに、ニュース評価が分かれているメディア状況を考えることにもなります。③では、取材の現場に立ったときに求められる判断力、価値観などを参考文献や資料を基にケーススタディの形で討議し、考えを深めます。

＜活動内容＞

本ゼミは、憲法 21 条で保障された国民の知る権利に奉仕するジャーナリズム活動を多面的に考える演習を実施してきた。

ジャーナリズムに関する文献講読を通年で行ったほか、将来ジャーナリストを目指す学生が過半を占めることから、毎週、設定された課題について 800 字の作文の提出を求めた。各自の論考を担当教員が添削したうえで、ゼミのなかで互いに講評することで、論点がさらに絞られ、表現力も向上している。

日々の報道については、個別の記事などを取り上げて、critical thinking（批判的思考）の姿勢で評価するほか、自らが報ずる立場になったときに直面するであろう問題についても考えてきた。

このほか、主要メディアの記者を招き、それぞれの日々の仕事、属する会社の特徴、記者に求められる資質などについて、幅広く討議する機会を設けた。

健全な民主社会を支えるジャーナリストを一人でも多く育てることを目指している。

＜フィールドワーク＞

残念ながら、本年度もコロナ感染への懸念から、本格的なフィールドワークを実施することは断念した。各ゼミ生が作文の素材を求めて現地に赴くことを奨励し、その結果をゼミで報告し、意見を交換することを心がけた。

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

メディア状況を学び、論理的な文章構成を身に付ける

＜授業の概要＞

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③新聞記者の直面する問題の検討、の 3 本立てである。①の作文は毎週、宿題として 800 字を書いて提出する。最新の時事用語や社会の動きをテーマとし、全学年を対象にした統一論題を提示することもある。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることであり、もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることだ。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げるとともに、ニュース評価が分かれているメディア状況を考えることにもなる。③では、取材の現場に立ったときに求められる判断力、価値観などを参考文献や資料を基にケーススタディの形で討議し、考えを深めている。

ゼミは B、C 共通で運営している。3 年生の発表に対して、4 年生は指導や助言役を務めることに力点を置いた活動を行った。

＜活動内容＞

本ゼミは、憲法 21 条で保障された国民の知る権利に奉仕するジャーナリズム活動を多面的に考える演習を実施してきた。

ジャーナリズムに関する文献講読を通年で行ったほか、将来ジャーナリストを目指す学生が過半を占めることから、毎週、設定された課題について 800 字の作文の提出を求めた。各自の論考を担当教員が添削したうえで、ゼミのなかで互いに講評することで、論点がさらに絞られ、表現力も向上している。すでにメディアへの進路が内定している 4 年生の参加もあり、上級生による実体験を踏まえての指導も見られた。

日々の報道については、個別の記事などを取り上げて、critical thinking（批判的思考）の姿勢で評価するほか、自らが報ずる立場になったときに直面するであろう問題についても考えてきた。

このほか、主要メディアの記者を招き、それぞれの日々の仕事、属する会社の特徴、記者に求められる資質などについて、幅広く討議する機会を設けた。

健全な民主社会を支えるジャーナリストを一人でも多く育てることを目指している。

＜フィールドワーク＞

残念ながら、本年度もコロナ感染への懸念から、本格的なフィールドワークを実施することは断念した。各ゼミ生が作文の素材を求めて現地に赴くことを奨励し、その結果をゼミで報告し、意見を交換することを心がけた。

(5)山崎　恆成（全学連携教育機構・客員教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

①映像リテラシー

②ジャーナリスティックな感覚と時代性

③テレビの力と SNS との共生

＜授業の概要＞

①映像表現を個々に説明するやり方もあるが、このゼミでは、1 つの作品（ストーリー）の中でどんな映像表現がどのように使われているかを分析することで、映像表現を身に着けます。

英語の学習に「英文法」「英作文」「英文読解」とあるとすれば、「英文読解」にあたると考えてください。

そして、脚本作成と実際の映像制作にも取り組みますが、これは、「英作文」に相当します。

②優れた映像作品は、ジャーナリスティックな感覚と時代性に富んでいます。ジャーナリズムを題材にした映像作品を分析して、「今の時代」をどうつかむかの感覚を磨きたいと思います。

③テレビの果たしてきた役割といまだに持ち続けている力、SNS との関係を考察します。

＜活動内容＞

小津安二郎監督「東京物語」の映像表現の分析を行う。溝口健二監督作品（「雨月物語」「西鶴一代女」「近松物語」）では映像表現の分析とジェンダー的な考察を行う。

映画「スキャンダル」から＃MeToo 運動およびアメリカのメディアの構造と歴史を考察。

映画「クライマーズハイ」から新聞ジャーナリズムと報道倫理を、ドラマ「エピウス」から冤罪報道を考察。

前期の終わりには、学んだ映像表現を実践すべく、自分たちで短編ドラマの作成に臨んだ。「もし悲しみの気持ちが人から消えたら、世界はどうなるのか？」という SF 風の学園ドラマ。悲しみの気持ちの尊さを映像表現に工夫しながら作品化した。

テレビと SNS は今や共生している。テレビ番組を見ながら SNS で感想を共有している視聴者の動向、また、SNS での視聴者反応を分析し、テレビ制作に活用しているテレビ局の試みを紹介し、考察した。

FLP 特別講演会で、東京ドラマアウォードでグランプリを受賞した「最愛」で演出を担当し、個人賞としても演出賞を受賞した塚原あゆ子氏を講演者に招いた。映像制作の最前線にいて今日本で最も注目されている女性監督の話を直接聞くことができ、大きな知的刺激を受けたはずである。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A
実 施 日：2022 年 9 月 12 日(月)
実施都市：東京都墨田区
実施場所：東京都立墨田川高等学校
実施内容：短編ドラマ「悲しみの回収」の撮影
成　　果：座学で学んだ映像表現を実践に移し、映像化する作業を経験できた。

対象演習：A
実 施 日：2022 年 9 月 13 日(火)
実施都市：東京都墨田区
実施場所：東京都立墨田川高等学校
実施内容：短編ドラマ「悲しみの回収」の撮影
成　　果：座学で学んだ映像表現を実践に移し、映像化する作業を経験できた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 11 月 9 日(水)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：緑山スタジオ
実施内容：テレビドラマの撮影にエキストラとして参加。
成　　果：本格的なプロの撮影の流れを学ぶことができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022年11月14日(月)
実施都市：神奈川県横浜市・東京都新宿区
実施場所：日産スタジアム・曙橋駅周辺
実施内容：テレビドラマのロケーション撮影にエキストラとして参加。また撮影後、
　　スタッフからテレビ業界のさまざまな話のレクチャーを受けた。
成　　果:プロの撮影の流れを学んだ。就職についてのアドバイスも受けることができた。

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

①ジャーナリスティックな感覚と時代性

②映像リテラシー

③テレビの力と役割

＜授業の概要＞

①ジャーナリズムを題材にした映像作品を分析して、ジャーナリズムを考え、企画の立て方と、「今の時代」のつかみ方の感覚も磨きたい。

②映像表現を理解する。そして、自分の気持ちやメッセージを短編ドラマで表現すること。

③テレビの果たしてきた役割といまだに持ち続けている力を考察する。それとともに今後SNS とどう棲み分けていくかも考える。

＜活動内容＞

コロナ禍により２年間できなかったドラマの撮影をすることができたことが今年度最大の活動成果であった。ドラマ制作はまずは脚本づくりから始めた。主人公が「自分の母親が泣いているところを見たらどう思うか」をテーマにストーリーを考えさせた。ほとんどのゼミ生が母親の涙を悲しみの涙ととらえていたが、ひとりだけ「うれし涙」として考えたのがいて、とても面白く感じた。そのゼミ生のストーリーをもとに全員で脚本にした。よい話になったので、作品化したいと考えた。しかし、作品化するためには、俳優の雇用、専門の機材の借用、ロケ地の確保など資金が必要となる。資金を獲得するため、ドラマの設定に近い郵船クルーズ株式会社に協力の依頼を行ったが、コロナ禍で経営が悪化しており、資金援助は難しいと断られた。企画の説明だけでもさせてほしいと改めて依頼し、ゼミ生とともに郵船クルーズ株式会社本社を訪問した。ゼミ生から役員に企画の説明をする機会が与えられ、ゼミ生ひとりひとりが真摯に説明を行った。その場の熱意が役員の心を動かしたのか、制作協力を快諾していただけた。

その後は、あたかも怒涛のように話が進んでいった。俳優のオーディションを行い、リハーサルをし、ロケハンをした後、撮影を行った。他の授業もある中で、ゼミ生たちは、役割分担をし、みんなで協力し合いながら取り組んだ。

https://www.youtube.com/watch?v=AEiq83hz2SM&t=435s

完成した作品は、素朴だが、感動をよぶものに仕上がり、期末成果報告会での上映、『飛鳥』船内での上映や BS 朝日の番組『飛鳥物語』でも、「卒業制作の舞台」として撮影風景が放映された。

また、第 24 回ハンブルグ日本映画祭賞にノミネートされることになった。

子役が料理するシーンの指導

横浜大桟橋でのロケ

食卓のシーンの撮影の打ち合わせ

カメラリハーサル

子役の演技指導

FLP 特別講演会で、東京ドラマアウォードでグランプリを受賞した「最愛」で演出を担当し、個人賞としても演出賞を受賞した塚原あゆ子氏を講演者に招いた。映像制作の最前線にいて今日本で最も注目されている女性監督の話を直接聞くことができ、大きな知的刺激を受けたはずである。

通常の授業では、映像作品（「東京物語」など）を通して、映像表現を学んでいるが、今年度は、ドラマや映画を通して特にジャーナリズムを考えた。「エルピス」を通じて冤罪報道を、「スキャンダル」を通してアメリカの＃MeToo 運動とアメリカのメディアの構造を、「市民ケーン」を通じてアメリカのジャーナリズムの歴史を、「クライマーズハイ」を通して新聞ジャーナリズムを考察した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 7 月 13 日(水)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：郵船クルーズ株式会社
実施内容：郵船クルーズに対してドラマの企画のプレゼンテーション
成　　果：企業への本格的な企画プレゼンを経験できた。ゼミ生たちの思いが通じ、郵船クルーズが制作協力をしてくれることになった。

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 8 月 23 日(火)
実施場所：中央大学後楽園キャンパス
実施内容：ドラマ制作のための俳優のオーディション
成　　果：役柄に合った俳優を選ぶことができ、ゼミ生たちは本格的なオーディションを経験できた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 8 月 24 日(水)
実施場所：中央大学後楽園キャンパス
実施内容：ドラマ制作のための俳優のオーディション
成　　果：役柄に合った俳優を選ぶことができ、ゼミ生たちは本格的なオーディションを経験できた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年8月24日(水)
実施都市：東京都中野区
実施場所：中野コネクトハウス
実施内容：ドラマの撮影のための下見
成　　果：撮影のプランの立て方を現地で学習することができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年9月3日(土)
実施場所：リハーサル会場
実施内容：出演する俳優を全員集めてのリハーサル
成　　果：撮影がスムーズになるための本読みとリハーサルができ、ゼミ生たちも撮影のイメージを持つことができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年9月17日(土)
実施都市：神奈川県横浜市・東京都中野区
実施場所：横浜大桟橋ホール・中野コネクトハウス
実施内容：屋外のロケーション撮影と屋内の撮影
成　　果：本格的な撮影を経験することができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年9月18日(日)
実施都市：東京都中野区
実施場所：中野コネクトハウス
実施内容：屋内の撮影
成　　果：俳優の演技を観察し、本格的な撮影を経験することができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022年11月9日(水)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：緑山スタジオ
実施内容：テレビドラマのスタジオ撮影のエキストラとして参加
成　　果：スタッフとして参加する中で、プロの俳優の演技とプロの撮影の流れを学ぶことができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022年11月14日(月)
実施都市：神奈川県横浜市・東京都新宿区
実施場所：日産スタジアム・曙橋駅周辺
実施内容：ドラマのロケーションにエキストラとして参加
成　　果：ロケーション撮影の流れを学ぶことができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年12月12日(月)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：郵船クルーズ株式会社
実施内容：制作協力をした郵船クルーズにドラマ完成の報告とお礼
成　　果：ビジネス慣習と企業への儀礼を学んだ。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2023年2月20日(月)
講 演 者：塚原　あゆ子（TBSスパークル）
演　　題：現代の映像について
実施施設：中央大学　後楽園キャンパス5333教室
実施内容：映画「わたしの幸せな結婚」やドラマ「最愛」などの演出で今日本の映像界の第一線で活躍するクリエーターの創造の悩みと喜びを質疑応答も交えながら、語ってもらった
成　　果：映像のクリエーターが今、何を目指しているか、日本の映像界が世界の潮流の中でどう変化しているのか、社会学や法学的な見地からもビビットに刺激を受けたはずである。

Ⅲ．国際協力プログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

SDGs（持続可能な開発目標）に掲げられた目標からもわかるように、現在、人類の抱えるもっとも深刻な問題の１つは、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国等の途上諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として貧困に喘ぎ、教育、保健・衛生・医療、食料・栄養、環境、雇用、平和、人権といった様々な面で､基本的なニーズを満たすことができない状態にあります。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な発展の軌道に乗るためには、そこに住んでいる人々自身による開発努力が不可欠です。競争市場の中で民間部門の産業や企業が発展し、付加価値や雇用を創出していくとともに、経済や社会の様々な領域で政府が適切な役割を果たしていくことが求められています。市場と政府それぞれの利点をうまく活用する一方、双方の不完全な部分を制度や組織で補完・代替し、途上国は長い時間をかけて、継続的に、自らの力で開発に取り組んでいく必要があります。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国と緊密に協力しながら、資金面、人材面、貿易面、情報面等の幅広い分野で、積極的に開発問題に関与していかなければ、貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。先進国政府による国際協力、国連等国際機関による国際協力、NGOs など市民社会による国際協力、さらに、民間企業による資金や技術の移転、貧困層向けビジネス、ソーシャルビジネスを通じての国際協力などが、途上国の経済社会の発展に非常に大きな貢献をしています。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関連する様々な分野で優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、途上国の経済・社会を分析することのできる高度な専門的知識・技術、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、高度な語学力による国際コミュニケーション能力などが、国際協力に携わる人材にとって必要不可欠な個人的資質・能力であるといえます。複雑な経済・社会の構造を的確に分析し、様々な困難な環境の中で、途上国が進むべき方向を見極め、それに合った開発政策や開発戦略を考えることのできる、逞しい精神力と高度な専門能力をもった人材こそが、貧困という人類的な課題を解決するために求められているのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、人類的課題に挑戦する人材を養成する場として設定されました。複数の学部に配置されている、国際協力、途上国開発に関連した様々な専門科目の学修を中心に、国際的なコミュニケーション能力の強化も進めていきます。

さらに､本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて､様々な学部の担当教員と、そして様々な学部の学生と緊密に協力しながら、学部横断的な、学際的な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力を育成していくことを目標にしています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジア途上諸国などでの現地調査（｢Project-Based Field Work｣）を実施し、その結果に基づいて調査報告書を執筆するという実践的な教育を重視しています。

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A	FLP演習B	FLP演習C	総計	実施形態
1	中川　康弘	経済	3	6	2	11	合併(A･B･C)
2	林　光洋	経済	6	3	9	18	単独(A･B･C)
3	清水　武則	商	－	－	4	4	単独(C)
4	平澤　敦	商	8	9	6	23	単独(A･B･C)
5	新原　道信	文	4	6	7	17	合併(A･B･C)
6	中迫　俊逸	国際経営	－	－	1	1	単独(C)
7	山田　恭稔	国際経営	3	5	－	8	合併(A･B)
8	伊藤　晋	全学連携教育機構	－	8	9	17	単独(B･C)
9	小澤　勝彦	全学連携教育機構	6	3	4	13	単独(A･B･C)
10	花谷　厚	全学連携教育機構	11	5	5	21	単独(A)合併(B･C)
合　計			41	45	47	133	

３．プログラムスケジュール

5 月　　第 1 回部門授業担当者委員会

7 月　　第 2 回部門授業担当者委員会

9 月　　第 3 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
　　第 4 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

10 月　　第 5 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

11 月　　2023 年度募集に伴う選考試験

12 月　　第 6 回部門授業担当者委員会
　　学内活動（期末成果報告会）

1 月　　第 7 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

3 月　　FLP 修了発表
　　FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

期末成果報告会

(1)　実 施 日：　2022 年 12 月 10 日(土) 10:00～
　　実施場所：　中央大学　多摩キャンパス 3453 教室、3454 教室、3455 教室
　　実施内容：　各ゼミによる年度活動報告

(2)　実 施 日：　2022 年 12 月 10 日(土) 16:10～
　　実施内容：　特別講演
　　テ ー マ：　国際協力という選択
　　―ODA の役割、JICA の業務、JICA 職員の仕事―
　　講 演 者：　戸川　正人 氏（独立行政法人国際協力機構(JICA)）
　　高岡　健二 氏（独立行政法人国際協力機構(JICA)）

５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績

国際協力機構（JICA)、日本国際協力センター（JICE)、海外産業人材育成協会（HIDA)、国立青少年教育振興機構、日本貿易保険、伊藤忠商事、日本郵船、全日本空輸、日本航空インターナショナル、ANA テレマート、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、山九、JTB、エイチ・アイ・エス、三菱東京 UFJ 銀行、三菱 UFJ 信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、りそなホールディングス、横浜銀行、千葉銀行、信金中央金庫、東邦銀行、多摩信用金庫、大和証券、岡三証券、第一三共、石川島播磨重工業、カカクコム、キャノン、日産自動車、NEC、日本 IBM、日本電気、太平電業、日立製作所、デンソー、ブリヂストン、清水建設、本田技研工業、三井物産、大王製紙、中外製薬、船井総合研究所、アビームコンサルティング、楽天、日食、国分グループ本社、セブン‐イレブン・ジャパン、マザーハウス、LIXIL、システナ、ユニリーバ・ジャパン、東邦瓦斯、日本放送協会（NHK)、日本経済新聞社、北海道新聞社、テレビ信州、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、エヌ・ティ・ティ・データ、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、上組、国家・地方公務員（会計検査院、経済産業省、厚生労働省、国土交通省、財務省、内閣官房、都庁、県庁、市役所など)、東京大学（大学院農学生命科学研究科、新領域創成科学研究科学科)、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、神戸大学国際協力研究科、エジンバラ大学大学院、中央大学大学院（経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科）など

６．演習教育活動

(1)中川　康弘（経済学部・准教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

【A 生】国際協力から多文化共生・日本語教育を考える

【B 生】国際協力としての日本語教育学から社会、そして自己の立ち位置を考える

【C 生】新しい時代の国際協力、言語文化教育のあり方を考える

＜授業の概要＞

【A 生】

2018 年度の国際交流基金調べで海外の学習者数は 142 の国・地域で約 385 万人となり、国内でも留学生、技能実習生、移動する子供たちと多様化しています。これまで「外国人に日本語を教えること」と漠然と見られてきた日本語教育は、母語/非母語話者の関係性、障害やジェンダー学、アイデンティティの承認や権力といった政治性も射程に入れた領域に広がりをみせています。そこで本授業では国際協力を広義にとらえ、外交や国益、経済成長、環境保護とは別の側面、具体的には、ことばの教育を軸に、人と人の水平的な関係、交流といった側面に着目します。一般に語学は習得→スキルアップというイメージをもたれる場合が多いですが、決してそれだけではありません。日本語教育が国際協力としてあるのは、異質な言語と教育実践に触れ、そこに関わる具体的な他者との出会いの原体験が、国際理解の契機となり地球規模の諸問題の解決につながるからだと考えます。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力の観点から教育支援という営みへの理解を深めます。また学外の現場での見学調査等で、ことばと教育、ことばと社会に係る問題について考え、4 年次に至るまでの各自の知的興味を掘り起こしていきます。予定としては、国内外で日本語教育にかかわっている人との意見交換や、中学校夜間学級の見学調査などを通じて､多文化共生に対する自らの考えを深めることを検討しています。JICA や文化庁なども訪問する予定です。後期は実態調査と口頭発表、論文作成に向けての方法論の基礎について学びつつ、各自が研究課題を設定します。そしてアジアの大学等で日本語を学ぶ現地学生や青年海外協力隊の活動現場を訪れたり、日本の援助機関を訪れたりして各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力、日本語教育の役割を考えていきます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。授業は履修者が用意したレジュメや調査結果についてディスカッションしながら進める双方向型で行います。

【B 生】

日本語教育学の観点から国際協力の意味を学んできた演習 A を経て、演習 B では、当該分野の文献購読とフィールドワークを行い、国際協力と多文化共生について多角的に捉えていきます。本授業では引き続き国際協力を広義にとらえ、ことばの教育、日本語教育が国際協力としてあるのは、異質な言語と教育実践に触れ、そこに関わる具体的な他者との出会いの原体験が、国際理解の契機となって地球規模の諸問題の解決につながるからだという確信にもとづき、個人と個人の水平的な関係、交流といった側面に着目していきます。

前期は、指定文献を中心に輪読を行い、国際協力、日本語教育への理解を深めます。また学外の現場や関係者とも積極的につながり、見学調査等を通じて、ことばと社会、ことばと権力に係る問題について考え､4 年次に至るまでの各自の知的興味を掘り起こしていきます。予定としては、国内外で日本語教育にかかわっている人との意見交換や、中学校夜間学級の見学調査等を行い、多文化共生に対する自らの考えを深めます。後期は、方法論の基礎について学びつつ、各自が研究課題を設定します。そしてアジアの大学等で日本語を学ぶ現地学生や青年海外協力隊の活動現場を訪れたり、日本の援助機関を訪れたりして各自が設定したテーマの調査を軸に研究を進めます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。授業は、履修者が用意したレジュメや調査結果についてディスカッションしながら進める双方向型で行います。

【C 生】

異質な言語と教育実践に触れ、そこに関わる具体的な他者との出会いの原体験が、国際理解の契機となって地球規模の諸問題の解決につながるという確信にもとづき、国際協力と日本語教育、多文化共生の意味を学んできた演習 A、B を経て、いよいよ演習 C の本授業において各自のテーマを理論化の俎上にまで高めます。

前期は、指定文献を中心に輪読を行い、国際協力を念頭に置きながら日本語教育、異文化コミュニケーションへの理解を深めます。また引き続き学外の現場や関係者とも積極的につながり、見学調査等で、各自の着眼点を深めていきます。そして年度末の成果報告を経て、ゼミでの双方向な意見交換を活発に行い、各自が持つテーマについて理論を構築していくことに向かいます。

＜活動内容＞

ABC 合同でゼミを行った。前期は、指定文献『ヒューマニティーズ外国語学』岩波書店を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力の観点から言語教育という営みへの理解を深めました。また、前期は中学校夜間学級の見学調査、ゲストスピーカーとしての劇団トランス☆プロジェクトの方々との意見交換などを通じて、多文化共生に対する自らの考えを深めることをめざしました。夏休みには長野・野尻湖セミナーハウスに赴き、親睦を兼ねて文献輪読(Pauline Bunce 『Why English』)も行った。JICA 長野を訪問しました。

後期は実態調査と口頭発表、論文作成に向けての方法論の基礎について学びつつ、各自が研究課題を設定しました。そしてマレーシアのマラヤ大学言語学部を訪れ、日本語を学ぶ現地学生と共同調査を行いました。それをもとに年度末に成果報告を経て、学問的課題に応えるゼミ論文をまとめました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 6 月 10 日(金)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：八王子市立第五中学校 夜間学級
実施内容：授業見学と校長・副校長との意見交換
成　　果：在籍者の多くが外国人を占めている夜間学級の取り組みに触れ、国内の多文化状況について深く理解できた。

中央大学 Web 上の記事

中川ゼミでは、2022年6月10日(金)、演習A-Cの10名で八王子市立第五中学校夜間学級の見学調査を行いました。参加ゼミ生一同、夜間学級の状況、クラス運営の取り組みについて主体的に学ぶ貴重な体験を得ました。
はじめに、校長先生と副校長先生から、学校の概要や教育目標、夜間学級が担っている使命、そして学校生活についてお話をうかがいました。次に、各自が取り組んだ事前課題の講評もいただきました。そこで現場から考えることの大切さと、「生徒たちには学びたいことが大前提にある」という校長先生の言葉に重みを感じました。その後、日本語の補習と社会、数学の授業を見学しました。先生と対話形式で行う場面では、生徒の母国の有名な観光地を題材にして日常会話を学んだり、生徒同士でわからないところを助け合ったりする姿が印象的でした。またクラスの掲示物から、先生の温かいメッセージや生徒たちの熱い学ぶ意欲、そして意志を感じました。
教育現場から日本の多文化多言語状況に触れた私たちは、引き続き、言語文化・教育を通じた国際協力を探求していこうと思います。

執筆：新村綾菜（文学部心理学専攻2年）

竹内校長(中央向かって右)・八重嶋副校長と

https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2022/06/61125/2023.3.1 アクセス

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 7 月 1 日(金)
講 演 者：月嶋　紫乃 氏（劇団トランス☆プロジェクト）
演　　題：トランスジェンダーへの理解とアライになるために
実施場所：中央大学　多摩キャンパス 7601 教室
実施内容：劇団主催と劇団員 2 名から、その生い立ちについて伺うとともに、劇団員としての使命について話を聞いた。
成　　果：LGBT の内実や、当事者との意見交換から、多文化共生についての理解を深めるとともに、SDGs や多様なセクシュアリティをめぐる社会の状況を知った。

中央大学 Web 上の記事

トランス☆プロジェクトの方々をゲストに迎えて－中川ゼミの報告－

SDGsでは、前文に「だれひとり取り残さない」ことが掲げられています。国を超えた相互理解の実現には多様な性への理解も欠かせません。中川ゼミでは、2022年7月1日(金)、トランス☆プロジェクトの月嶋紫乃さん、冴瑪悠さん、鈴末さんの3名をゲストに招き、同劇団の活動やトランスジェンダーについての理解を深めました。トランス☆プロジェクトは、GIDをモチーフにした劇を、当事者と一緒に制作、上演している団体です。設立者で代表の月嶋さんは、「やめるためにトランスプロジェクトを続ける」と語り、皆が生きやすい環境になるまで続けなければいけないという覚悟を持っていました。今後も演劇という言語表現を通じて、トランスジェンダーについての理解を広め、法制度の改正などを実現したいそうです。講義を通して、私たちは多くの意見や感想を持ちました。例えば、トランスジェンダーといっても人によってさまざまであり、「言語」が独り歩きする傾向があること。相手を一方的に理解しようとするのではなく、お互いの歩み寄りが相互理解に繋がるということ。LGBTなどのカテゴリーに関係なく、個人として関わることの大切さを学びました。授業で学んだ、社会の現状、社会に対するアプローチなどを、今後も活かしていきたいです。

こ列目向かって左から、トランス☆プロジェクトの冴瑪悠さん、鈴末さん、月嶋さん

執筆：伊藤桜子（法学部政治学科３年）

https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2022/07/61318/2023.3.1 アクセス

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 10 月 7 日(金)
実施都市：東京都新宿区
実施場所：JICA 地球ひろば
実施内容：施設見学と JICA 海外協力隊マレーシア隊員（障害児・者）経験者に話を聞いた
成　　果：マレーシア経験者の話を聞き、海外実態調査の期待が高まった。また障害児・者教育の日本とマレーシアの相違点についても整理できた。

JICA 地球ひろば Web 上の記事

JICA地球ひろば　展示（団体訪問プログラム）

中央大学 中川康弘ゼミの皆さんがJICA地球ひろばを訪問

訪問者コメント

https://www.jica.go.jp/hiroba/about/experience/visitor/2022/221007_04.html2023.3.1 アクセス

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 11 月 2 日(水)～11 月 6 日(日)
実施都市：クアラルンプール（マレーシア）
実施場所：マラヤ大学言語学部・他
実施内容：マレーシアの多文化・多民族状況に触れつつ、現地大学で日本語を学ぶ学生と共同調査を行う。
成　　果：各ゼミ生が設定したテーマについて、現地学生とグループ調査を行い、その成果を発表した。インターアクション経験と同国の状況を知る機会を得ることができ、日本の多文化共生について振り返ることができた。

2022 年 11 月 4 日(金)実施の共同調査発表より（於：マラヤ大学）

言語学部長 Dr.Wong 先生

(2)林　光洋（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

＜授業の概要＞

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

(1)開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
(2)格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
(3)産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
(4)社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
(5)環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
(6)アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
(7)国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

＜活動内容＞

2022 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けたものの、前年度、前々年度に比べて、ゼミ活動への制約や制限が緩和された 1 年間でした。ゼミの授業も講義形式の授業もほぼすべて対面で実施することが可能になりました。

2022 年度は、開発経済学（2 冊）、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計 4 冊使用して学習しました。過去 2 年にならい、2 年次のグループ論文の準備を、それまでよりも前倒しにして前期末から始め、夏休みには研究の枠組み作りに本格的に取り組みました。3 つの班に分かれて、「アフリカでの蚊帳を用いたマラリア対策におけるモニタリング調査の重要性」、「アジアにおける ICT を用いた教育と教育機会の拡大―フィリピンとバングラデシュの事例から―」、「アフリカ地域の中等教育課程における理数科教育を促進させる方法―アフリカ地域の事例分析―」という 3 編のグループ論文を執筆しました。対面およびオンラインで準備を重ね、12 月開催の FLP 国際協力プログラム期末成果報告会では、2 年生論文の骨格にあたる部分を報告することができました。その論文も最終的には 2 月に完成し、刊行することができました。

さらに、下記の通り、4 年生（演習 C）の訪問授業を手伝ったり、ユニセフ・プロジェクトに参加したりしました。前述の通り、コロナ関連の制約も徐々に小さくなり、一昨年度はまったく実施できなかったフェアトレードの活動を、生協フェアを除き実施することができました。その他、3 年生（演習 B）や 4 年生（演習 C）が中心になって企画・準備し、実施した特別授業、セミナー、講演会等にも積極的に参加しました。

活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。

＜訪問授業/模擬授業＞

・ 訪問授業/模擬授業（自主的に実施）

対 象 演 習 ：A・B・C

実 施 期 間 ：2022 年 8 月から 11 月（下記「対象リスト」を参照）

実 施 場 所 ：高校 6 校および中学校 2 校（下記「対象リスト」を参照）

実施内容/成果：4 年生（演習 C）が前年度に実施した研究プロジェクト（フィリピン）の結果を主な材料として使用しながら、途上国の開発や国際協力というテーマで高校生と中学生に対して参加型の授業/ワークショップを実施しました。本年度は附属 4 校とそれ以外 4 校の合計 8 校に対して、それらの高校生/中学生に対して、途上国の開発、国際協力の啓蒙・啓発を進め、関連する情報を提供することができました。同時に、ゼミ学生は、自身の知識を整理したり、情報の伝えかたを学習したりすることができました。2 年生（演習 A）は、4 年生（演習 C）が中心の訪問授業/模擬授業プロジェクトのサポート役を務め、2 年後の準備をしました。山梨県の丹波山村立丹波中学校の生徒向けのオンライン訪問授業については、2 年生が中心になり、FLP 国際協力プログラムの学生団体である FACT（中央大学フェアトレード委員会）として、フェアトレードと途上国の児童労働問題についての内容で授業を行ないました。

対象リスト

訪問先	日時	対象学年	参加生徒数	授業方法
浦和学院高校	6月18日（土） 120分	高校2－3年生	21人	対面 （中央大学で実施）
名古屋高校	8月22日（月） 60分	高校2年生	180人	オンライン
神奈川県立 相模原高校	9月20日（火） 120分	高校2年生	21人	対面 （中央大学で実施）
中央大学 附属高校	10月12日（水） 50分	高校2年生	15人	対面
中央大学高校	10月24日（月） 110分	高校1年生	162人	対面
中央大学附属 横浜中学校	11月7日（月）12日（土） 50分	中学2年生	200人	対面
中央大学 杉並高校	11月18日（金） 90分	高校1－3年生	17人	対面
山梨県 丹波中学校	12月15日（木） 100分	中学3年生	4人	オンライン （FACTが実施）

＜実態調査・見学調査・講演会＞

1）カーボンニュートラルに向けた国際協力について学ぶ

対 象 演 習 ：A・B・C

実 施 期 間 ：2022 年 6 月 14 日(火)1 時限目＋4－5 時限目

講 演 者 ：髙木　快郎 氏（社団法人日本鉄鋼連盟）

演 題 ：カーボンニュートラルに向けた国際協力―日本鉄鋼業の事例―

実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室

実施内容/成果：日本鉄鋼連盟が日本の鉄鋼業界、日本政府と協力しながら、ASEAN、中国、インド等の鉄鋼関連企業や政府に対して、地球温暖化対策として CO_2 排出削減のための技術移転を実施していることについて学習しました。

2) 何が国際協力に影響を与えているのかについて学ぶ
対象演習：A・B・C
実施期間：2022年6月28日(火)1時限目＋4－5時限目
講演者：下田　透 氏（JICA/公益財団法人 廃棄物・3R研究財団）
演題：誰が国際協力の世界を動かしているのか
実施場所：中央大学　多摩キャンパス7202教室および7508教室
実施内容/成果：IMF・世界銀行、宗教、イスラム産油国、華僑・印僑・レバノン系移民等の影響力、サブサハラ・アフリカの豊かさと貧しさ等の事例の説明を通じて、長年JICAに勤務している講演者から国際協力を動かしている力や途上国の実態について学習することができました。

3) フィリピン研究する際に注目すべきことについて学ぶ
対象演習：A・B・C
実施期間：2022年8月9日(火)14:00－17:00
講演者：前川　司 氏（元アジア開発銀行）
演題：今フィリピンの開発問題で何が注目されているのか
実施場所：中央大学　多摩キャンパス7508教室
実施内容/成果：2020 年以降、世界的にそうであるものの、フィリピンでは新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、特に低所得者層にとっては雇用や収入源の喪失、教育や医療へのアクセスの問題が生じていることを学習しました。

4) フィリピンの廃棄物処分場で働くウエィストピッカーについて学ぶ
対象演習：A・B・C
実施期間：2022年9月6日(火)14:00－16:00
講演者：四ノ宮　浩 氏（映画監督）
演題：マニラのウエィストピッカーたちの生活
実施場所：中央大学　多摩キャンパス7508教室
実施内容/成果：マニラのウエィストピッカーたちがどのような生活を送っているのか、どのようなリスクに直面しているのか、彼女たちの生計を向上させるためには何が必要なのか等について学習しました。

5) ウエィストピッカーを組織化したフィリピンNGOについて学ぶ
対象演習：A・B・C
実施期間：2022年9月15日(木)14:00－16:00
講演者：小林　幸恵 氏（特定非営利活動法人LOOB JAPAN）
演題：フィリピンの開発実態とNGOの国際協力：その成果と限界
実施場所：オンライン
実施内容/成果：フィリピンのイロイロ市で活動している日本のNGO、LOOBが協働していたフィリピンのローカルNGOで、ウエィストピッカーを組織化していたUCLAの組織運営や活動内容について学習しました。

6) フェアトレードの現状と認証について学ぶ
対象演習：A・B・C
実施期間：2022年10月4日(火)3時限目
講演者：潮崎　真惟子 氏（認定NPO法人フェアトレード・ラベル・ジャパン）

演　　題 ：世界の企業とサステナビリティの潮流と国際フェアトレード認証の役割
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7101 教室（講演はオンライン）
実施内容/成果：途上国の生産者の厳しい現状、児童労働の現実、フェアトレード認証の必要性と仕組み等について学習することができました。

7）フィリピンのストリートチルドレンについて学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 10 月 11 日(火)3 時限目＋4－5 時限目
講　演　者 ：辻本　紀子 氏（(認定)特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21（ACC 21））
演　　題 ：フィリピンの貧困とストリートチルドレン
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7101 教室および 7508 教室
実施内容/成果：ACC 21 の設立経緯・活動内容、フィリピンのストリートチルドレンの実態と問題点、ストリートチルドレンをゼロにするために必要なこと等について学習することができました。

8）ユニセフとの共同講演会を通じてフィリピンにおける子どもの栄養状況とその改善支援活動について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 11 月 22 日(火)3 時限目
2022 年 11 月から 12 月末（募金、対面&オンライン）
講　演　者 ：高円宮　承子 さま、村山　晴香 氏（日本ユニセフ協会学校事業部）
林ゼミ 4 年生（演習 C）
演　　題 ：途上国の栄養不良問題とユニセフの子どもの栄養改善活動について
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7101 教室。募金活動は対面/オンラインで実施
実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、途上国の子どもの栄養不良/栄養改善をテーマにした講演会を 3 年ぶりに対面で開催しました。フィリピンで栄養改善に関連した活動をユニセフはどのように行なっているのかについて、高円宮承子さまおよび村山晴香氏(日本ユニセフ協会)から説明してもらい、理解することができました。一方、林ゼミ 4 年生（演習 C）が、2021 年度に実施したフィリピンの子どもたちの栄養不良の現状や改善策に関する研究結果について報告しました。募金についても 3 年ぶりに多摩センター駅前広場と初めて立川駅前で行ないました。並行して、本年度もユニセフのオンライン募金システム（フレンドネーション）を活用しました。その結果、約 32 万円を集めることができ、これを途上国の子どもたちの栄養改善のための活動に寄付することができました。

9）JICA 事業について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 12 月 10 日(土)16:15－18:00
講　演　者 ：戸川　正人 氏、高田　健二 氏（JICA）
演　　題 ：国際協力という仕事
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 3551 教室
実施内容/成果：ODA の役割、JICA の業務、JICA 職員の仕事、JICA に入るために必要なこと等について学習することができました。

10）青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）の活動について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 12 月 10 日(土)16:15－18:00

講　演　者：大竹　幸乃 氏、小平　直人 氏（社団法人青年海外協力協会）
演　　題：JICA ボランティアセミナー 2022
実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス GG504 教室
実施内容/成果：青少年活動分野で青年海外協力隊員（JICA 海外協力隊員）として 2 年間マラウイに滞在した大竹氏の活動内容や経験、青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）になるために求められていること等について学習することができました。

＜参考 URL＞
1）特別授業（カーボンニュートラルに向けた国際協力）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/06/61104/
2）訪問/模擬授業（浦和学院高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/06/61191/
3）特別授業（何が国際協力に影響を与えているのか）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/07/61296/
4）訪問/模擬授業（神奈川県立相模原高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/09/62614/
5）特別授業（フェアトレードの現状と認証）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/62739/
6）特別授業（フィリピンのストリートチルドレン）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/62808/
7）訪問/模擬授業（中央大学高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/63010/
8）特別授業（ユニセフとの共同講演会を通じてのフィリピンにおける子どもの栄養およびユニセフ募金）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/11/63523/
https://friendonation.jp/projects/detail?project_id=24396
9）FLP 国際協力プログラム期末成果報告会/特別講演会（JICA 事業）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/01/64108/
10）特別講演会（JICA ボランティアセミナー（青年海外協力隊（JICA 海外協力隊)））
https://www.chuo-u.ac.jp/international/news/2022/12/63820/
11）訪問授業（FACT による山梨県丹波中学校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/01/64139/

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

＜授業の概要＞

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

(1)開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
(2)格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
(3)産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
(4)社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
(5)環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
(6)アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
(7)国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

＜活動内容＞

2022 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けたものの、前年度、前々年度に比べて、ゼミ活動への制約や制限が緩和された 1 年間でした。ゼミの授業も講義形式の授業もほぼすべて対面で実施することが可能になりました。

前期も後期も、3 コマ連続する本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を、教室で行なうことができました。日本語のテキストとして『フィリピン―急成長する若き「大国」―』（井出穣治、2017 年)、『貧困と闘う知―教育、医療、金融、ガバナンス―』(エステル・デュフロ、2017 年)、『なぜ貧しい国はなくならないのか―正しい開発戦略を考える―(第 2 版)』（大塚啓二郎、2020 年）を、英語のテキストとして *Philippines Economic Update, December 2021: Regaining Lost Ground, Revitalizing the Filipino Workforce* (World Bank、 2021 年)、*Philippines Digital Economy Report 2020: A Better Normal under COVID-19, Digitalizing the Philippine Economy Now* (World Bank、 2020 年）を輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。

林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう 3 年次 1 年間を使った研究プロジェクトも実施しました。2022 年 2 月、キックオフの合宿を行なうことはかなわず、その代わりに大学のキャンパス内で 3 日間の集中討議を行ない、そこで研究対象国をフィリピンに、テーマをウェイストピッカー、農村ツーリズム、マイクロインシュランスに決めて、研究プロジェクトをスタートさせました。奨学金は失敗もありましたが、最終的にはなんとか獲得することができ、研究計画書やその他の準備も進めることができました。残念でしたが、研究対象国のフィリピンは、6 月末の時点で、外務省の感染症危険レベルが大学設定の許可水準を満たしていなかったため、現地調査を断念せざるをえませんでした。

過去 2 つの代の先輩たちを見習い、フィリピン側とオンラインでつながり、インタビュー

調査や質問票調査を実施したり、日本国内の関係するところを訪ね歩き、対面で調査を行なったりしていました。そのような中、夏休み中盤のある日、突然、フィリピンの感染症危険レベルが許可水準へと変更されたため、3 年ぶりに現地調査を実施できることになりました。調査対象へのアポイント、ロジスティクスの手配等を考慮して、夏休み中の実施はあきらめ、白門祭期間を利用して現地調査を実施することにしました。いつもより短い 10 月 29 日から 11 月 6 日までの 8 泊 9 日、フィリピンで 3 つの班が現地調査を行ないました。

夏休み中の実施に比べて、特にスケジュール面で非常に難しかったものの、3 年生の熱意と努力、そして周囲のサポートがあって何とか乗り切ることができました。現地調査から帰国した週の土曜日に開催された経済学部のプレゼンテーション大会では、3 つの班が出場し、2 つの班が優勝しました。期末成果報告会でも、3 つの班が研究成果を堂々と報告しました。最終的に、英語版および日本語版の論文（合計約 420 ページ）を刊行することができました。学部 3 年生の論文としては、質の高いものに仕上がりました。

活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。

＜訪問授業/模擬授業＞

・訪問授業/模擬授業（自主的に実施）

対　象　演　習：A・B・C

実　施　期　間：2022 年 8 月から 11 月（下記「対象リスト」を参照）

実　施　場　所：高校 6 校および中学校 2 校（下記「対象リスト」を参照）

実施内容/成果　：4 年生（演習 C）が前年度に実施した研究プロジェクト（フィリピン）の結果を主な材料として使用しながら、途上国の開発や国際協力というテーマで高校生と中学生に対して参加型の授業/ワークショップを実施しました。本年度は附属 4 校とそれ以外 4 校の合計 8 校に対して、それらの高校生/中学生に対して、途上国の開発、国際協力の啓蒙・啓発を進め、関連する情報を提供することができました。同時に、ゼミ学生は、自身の知識を整理したり、情報の伝えかたを学習したりすることができました。主に、4 年生（演習 C）が中心になって訪問授業/模擬授業プロジェクトを準備・実行しましたが、浦和学院高校向けについては 3 年生（演習 C）が中心になって実施しました。山梨県の丹波山村立丹波中学校の生徒向けのオンライン訪問授業については、2 年生（演習 A）が中心になり、FLP 国際協力プログラムの学生団体である FACT（中央大学フェアトレード委員会）として、フェアトレードと途上国の児童労働問題についての内容で授業を行ないました。

対象リスト

訪問先	日時	対象学年	参加生徒数	授業方法
浦和学院高校	6月18日（土） 120分	高校2－3年生	21人	対面 （中央大学で実施）
名古屋高校	8月22日（月） 60分	高校2年生	180人	オンライン
神奈川県立 相模原高校	9月20日（火） 120分	高校2年生	21人	対面 （中央大学で実施）
中央大学 附属高校	10月12日（水） 50分	高校2年生	15人	対面
中央大学高校	10月24日（月） 110分	高校1年生	162人	対面
中央大学附属 横浜中学校	11月7日（月）12日（土） 50分	中学2年生	200人	対面
中央大学 杉並高校	11月18日（金） 90分	高校1－3年生	17人	対面
山梨県 丹波中学校	12月15日（木） 100分	中学3年生	4人	オンライン （FACTが実施）

＜実態調査・見学調査・講演会＞

1）カーボンニュートラルに向けた国際協力について学ぶ

対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 6 月 14 日(火)1 時限目＋4－5 時限目
講　演　者 ：髙木　快郎 氏（社団法人日本鉄鋼連盟）
演　　題 ：カーボンニュートラルに向けた国際協力―日本鉄鋼業の事例―
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室
実施内容/成果：日本鉄鋼連盟が日本の鉄鋼業界、日本政府と協力しながら、ASEAN、中国、インド等の鉄鋼関連企業や政府に対して、地球温暖化対策として CO_2 排出削減のための技術移転を実施していることについて学習しました。

2）何が国際協力に影響を与えているのかについて学ぶ

対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 6 月 28 日(火)1 時限目＋4－5 時限目
講　演　者 ：下田　透 氏（JICA/公益財団法人 廃棄物・3R 研究財団）
演　　題 ：誰が国際協力の世界を動かしているのか
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室
実施内容/成果：IMF・世界銀行、宗教、イスラム産油国、華僑・印僑・レバノン系移民等の影響力、サブサハラ・アフリカの豊かさと貧しさ等の事例の説明を通じて、長年 JICA に勤務している講演者から国際協力を動かしている力や途上国の実態について学習することができました。

3）フィリピン研究する際に注目すべきことについて学ぶ

対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 8 月 9 日(火)14:00－17:00
講　演　者 ：前川　司 氏（元アジア開発銀行）
演　　題 ：今フィリピンの開発問題で何が注目されているのか

実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7508 教室
実施内容/成果：2020 年以降、世界的にそうであるものの、フィリピンでは新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、特に低所得者層にとっては雇用や収入源の喪失、教育や医療へのアクセスの問題が生じていることを学習しました。

4) フィリピンの廃棄物処分場で働くウエィストピッカーについて学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 9 月 6 日(火)14:00－16:00
講　演　者 ：四ノ宮　浩 氏（映画監督）
演　　題 ：マニラのウエィストピッカーたちの生活
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7508 教室
実施内容/成果：マニラのウエィストピッカーたちがどのような生活を送っているのか、どのようなリスクに直面しているのか、彼女たちの生計を向上させるためには何が必要なのか等について学習しました。

5) 日本の農村ツーリズムについて学ぶ
対 象 演 習 ：B
実 施 期 間 ：2022 年 9 月 12 日(月)終日
講　演　者 ：秩父地域おもてなし観光公社および井上　正幸 氏（秩父地域おもてなし観光公社）
演　　題 ：秩父地域の農泊と地域おこし
実 施 場 所 ：秩父地域おもてなし観光公社
実施内容/成果：日本の農村ツーリズムである農泊について、秩父地域がどのような政策を策定し、どのように農泊を推進しているのか、行政の役割、農家、民家の活動、両者の関係等について学習しました。

6) ウエィストピッカーを組織化したフィリピン NGO について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 9 月 15 日(木)14:00－16:00
講　演　者 ：小林　幸恵 氏（特定非営利活動法人 LOOB JAPAN）
演　　題 ：フィリピンの開発実態と NGO の国際協力：その成果と限界
実 施 場 所 ：オンライン
実施内容/成果：フィリピンのイロイロ市で活動している日本の NGO、LOOB が協働していたフィリピンのローカル NGO で、ウエィストピッカーを組織化していた UCLA の組織運営や活動内容について学習しました。

7) 秩父地域の農泊実施者の経験について学ぶ
対 象 演 習 ：B
実 施 期 間 ：2022 年 9 月 15 日(木)終日
講　演　者 ：寺澤防子様、若林想一郎様（秩父地域の農泊実施者）
演　　題 ：秩父地域の農泊実施者の経験
実 施 場 所 ：現場（埼玉県秩父郡横瀬町）
実施内容/成果：秩父地域の農泊の実施者から、農泊をどのように実施しているのか、どのような効果があるのか、どのような課題があるのか、行政とどのような関係があるのか等を説明してもらい、日本の農泊の実態について学習しました。

8) フィリピン観光省の農村ツーリズム政策について学ぶ
対 象 演 習 ：B

実 施 期 間 ：2022 年 9 月 22 日(木)終日
実 施 都 市 ：東京都江東区
実 施 場 所 ：東京ビックサイト
実施内容/成果：ツーリズム EXPO ジャパン 2022 で来日中のフィリピン観光省幹部から、同国の農村ツーリズムの政策、農村ツーリズムの効果、農村ツーリズムの観光セクターにおける役割等について学習しました。

9) フェアトレードの現状と認証について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 10 月 4 日(火)3 時限目
講　演　者 ：潮崎　真惟子 氏（認定 NPO 法人フェアトレード・ラベル・ジャパン）
演　　題 ：世界の企業とサステナビリティの潮流と国際フェアトレード認証の役割
実 施 場 所 ：中央大学多摩キャンパス 7101 教室（講演はオンライン）
実施内容/成果：途上国の生産者の厳しい現状、児童労働の現実、フェアトレード認証の必要性と仕組み等について学習することができました。

10) フィリピンのストリートチルドレンについて学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 10 月 11 日(火)3 時限目＋4－5 時限目
講　演　者 ：辻本　紀子 氏（(認定)特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21(ACC 21)）
演　　題 ：フィリピンの貧困とストリートチルドレン
実 施 場 所 ：中央大学多摩キャンパス 7101 教室および 7508 教室
実施内容/成果：ACC 21 の設立経緯・活動内容、フィリピンのストリートチルドレンの実態と問題点、ストリートチルドレンをゼロにするために必要なこと等について学習することができました。

11) フィリピンの生計向上について学ぶ
対 象 演 習 ：B
実 施 期 間 ：2022 年 10 月 29 日(土)～2022 年 11 月 6 日(日)
実 施 都 市 ：フィリピン マニラおよびその周辺地域
実 施 場 所 ：Rimansi Organization of the Philippines Inc.、その他
実施内容/成果：フィリピンにおいて、3 つの個別テーマ、a) ウェイストピッカーの組織化と組織の役割、b) 農村ツーリズムの地域経済への効果、c) マイクロインシュランスの実態と役割、それぞれを現地調査し、フィリピンの生計向上について学習することができました。

12) ユニセフとの共同講演会を通じてフィリピンにおける子どもの栄養状況とその改善支援活動について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 11 月 22 日(火)3 時限目
2022 年 11 月から 12 月末（募金、対面&オンライン）
講　演　者 ：高円宮　承子 さま、村山　晴香 氏（日本ユニセフ協会学校事業部）
林ゼミ 4 年生（演習 C）
演　　題 ：途上国の栄養不良問題とユニセフの子どもの栄養改善活動について
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7101 教室。募金活動は対面/オンラインで実施
実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、途上国の子どもの栄養不良/栄養改善をテーマにした講演会を 3 年ぶりに対面で開催した。フィリピンで栄養改善に関連した活動をユニセフはどのように行なっているのかについて、高円宮

承子さまおよび村山晴香氏（日本ユニセフ協会）から説明してもらい、理解することができました。一方、林ゼミ 4 年生（演習 C）が、2021 年度に実施したフィリピンの子どもたちの栄養不良の現状や改善策に関する研究結果について報告しました。募金についても 3 年ぶりに多摩センター駅前広場と初めて立川駅前で行ないました。並行して、本年度もユニセフのオンライン募金システム（フレンドネーション）を活用しました。その結果、約 32 万円を集めることができ、これを途上国の子どもたちの栄養改善のための活動に寄付することができました。

13）JICA 事業について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 12 月 10 日(土)16:15－18:00
講　演　者 ：戸川　正人 氏、高田　健二 氏（JICA）
演　　題 ：国際協力という仕事
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 3551 教室
実施内容/成果：ODA の役割、JICA の業務、JICA 職員の仕事、JICA に入るために必要なこと等について学習することができました。

14）青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）の活動について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 12 月 10 日(土)16:15－18:00
講　演　者 ：大竹　幸乃 氏、小平　直人 氏（社団法人青年海外協力協会）
演　　題 ：JICA ボランティアセミナー 2022
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス GG504 教室
実施内容/成果：青少年活動分野で青年海外協力隊員（JICA 海外協力隊員）として 2 年間マラウイに滞在した大竹氏の活動内容や経験、青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）になるために求められていること等について学習することができました。

＜参考 URL＞
1）特別授業（カーボンニュートラルに向けた国際協力）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/06/61104/
2）訪問/模擬授業（浦和学院高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/06/61191/
3）特別授業（何が国際協力に影響を与えているのか）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/07/61296/
4）訪問/模擬授業（神奈川県立相模原高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/09/62614/
5）特別授業（フェアトレードの現状と認証）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/62739/
6）特別授業（フィリピンのストリートチルドレン）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/62808/
7）訪問/模擬授業（中央大学高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/63010/
8）特別授業（ユニセフとの共同講演会を通じてのフィリピンにおける子どもの栄養およびユニセフ募金）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/11/63523/
https://friendonation.jp/projects/detail?project_id=24396
9）FLP 国際協力プログラム期末成果報告会/特別講演会（JICA 事業）

https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/01/64108/

10）特別講演会（JICA ボランティアセミナー（青年海外協力隊（JICA 海外協力隊)))

https://www.chuo-u.ac.jp/international/news/2022/12/63820/

11）訪問授業（FACT による山梨県丹波中学校向け）

https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/01/64139/

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

＜授業の概要＞

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

(1)開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
(2)格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
(3)産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
(4)社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
(5)環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
(6)アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
(7)国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

＜活動内容＞

2022 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けたものの、前年度、前々年度に比べて、ゼミ活動への制約や制限が緩和された 1 年間でした。ゼミの授業も講義形式の授業もほぼすべて対面で実施することが可能になりました。

前期も後期も、連続コマの本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を、教室で行なうことができました。4 年生（演習 C）のメイン・タスクである卒業論文については、しっかりとした研究計画書の作成と幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。最終的に、メンバー全員が卒業（修了）論文を書きあげることができました。

卒業論文の執筆に加えて、先輩たちから受け継がれ、伝統になっている高校・中学校向けの訪問授業プロジェクトとユニセフとのジョイント・プロジェクトを、コロナ禍の中にありながら、実施することができました。

下記の通り、2022 年 6－12 月に、高校 6 校、中学校 2 校を対象にして、対面とオンラインによる訪問授業/模擬授業を自主的に実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした途上国の開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えるとともに、学生自身の知識の整理を行ないました。また、日本ユニセフ協会と連携して、11 月から 12 月にかけて、共同講演会および募金活動を実施しました。

前年度までの活動で得た知識・経験や本年度の活動の結果を、訪問授業、ユニセフとの共同講演会、FLP 国際協力プログラム期末成果報告会等の中で発表しました。

活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。

＜訪問授業/模擬授業＞
・訪問授業/模擬授業（自主的に実施）
対　象　演　習：A・B・C
実　施　期　間：2022 年 8 月から 11 月（下記「対象リスト」を参照）
実　施　場　所：高校 6 校および中学校 2 校（下記「対象リスト」を参照）
実施内容/成果　：4 年生（演習 C）が前年度に実施した研究プロジェクト（フィリピン）の結果を主な材料として使用しながら、途上国の開発や国際協力というテーマで高校生と中学生に対して参加型の授業/ワークショップを実施しました。本年度は附属 4 校とそれ以外 4 校の合計 8 校に対して、それらの高校生/中学生に対して、途上国の開発、国際協力の啓蒙・啓発を進め、関連する情報を提供することができました。同時に、ゼミ学生は、自身の知識を整理したり、情報の伝えかたを学習したりすることができました。

対象リスト

訪問先	日時	対象学年	参加生徒数	授業方法
浦和学院高校	6月18日（土） 120分	高校2－3年生	21人	対面 （中央大学で実施）
名古屋高校	8月22日（月） 60分	高校2年生	180人	オンライン
神奈川県立 相模原高校	9月20日（火） 120分	高校2年生	21人	対面 （中央大学で実施）
中央大学 附属高校	10月12日（水） 50分	高校2年生	15人	対面
中央大学高校	10月24日（月） 110分	高校1年生	162人	対面
中央大学附属 横浜中学校	11月7日（月）12日（土） 50分	中学2年生	200人	対面
中央大学 杉並高校	11月18日（金） 90分	高校1－3年生	17人	対面
山梨県 丹波中学校	12月15日（木） 100分	中学3年生	4人	オンライン （FACTが実施）

＜実態調査・見学調査・講演会＞
1）ユニセフとの共同講演会プロジェクトの打ち合わせ
対 象 演 習　：C
実 施 期 間　：2022 年 6 月 14 日（火）午後
実 施 都 市　：東京都港区
実 施 場 所　：ユニセフハウス
実施内容/成果：後述するユニセフとの共同講演会プロジェクトの打ち合わせを行ない、本年の共同講演会の実施時期やテーマについて話し合いました。

2）カーボンニュートラルに向けた国際協力について学ぶ
対 象 演 習　：A・B・C
実 施 期 間　：2022 年 6 月 14 日（火）1 時限目＋4－5 時限目

講　演　者：髙木　快郎 氏（社団法人日本鉄鋼連盟）
演　　題：カーボンニュートラルに向けた国際協力―日本鉄鋼業の事例―
実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室
実施内容/成果：日本鉄鋼連盟が日本の鉄鋼業界、日本政府と協力しながら、ASEAN、中国、インド等の鉄鋼関連企業や政府に対して、地球温暖化対策として CO_2 排出削減のための技術移転を実施していることについて学習しました。

3）何が国際協力に影響を与えているのかについて学ぶ
対 象 演 習：A・B・C
実 施 期 間：2022 年 6 月 28 日（火）1 時限目＋4－5 時限目
講　演　者：下田　透 氏（JICA/公益財団法人 廃棄物・3R 研究財団）
演　　題：誰が国際協力の世界を動かしているのか
実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室
実施内容/成果：IMF・世界銀行、宗教、イスラム産油国、華僑・印僑・レバノン系移民等の影響力、サブサハラ・アフリカの豊かさと貧しさ等の事例の説明を通じて、長年 JICA に勤務している講演者から国際協力を動かしている力や途上国の実態について学習することができました。

4）電子機器廃棄物（E-waste）の実態と制度について学ぶ
対 象 演 習：C
実 施 期 間：2022 年 6 月 28 日(火）午後
実 施 都 市：神奈川県藤沢市
実 施 場 所：慶應義塾大学　湘南藤沢キャンパス
実施内容/成果：慶應義塾大学環境情報学部の塚原沙智子氏を訪ね、日本および途上国の電子機器廃棄物（E-waste）の実態と制度についてレクチャーを受け、今後 E-waste をどのように処理したらいいかを学びました。

5）フィリピン研究する際に注目すべきことについて学ぶ
対 象 演 習：A・B・C
実 施 期 間：2022 年 8 月 9 日（火）14:00－17:00
講　演　者：前川　司 氏（元アジア開発銀行）
演　　題：今フィリピンの開発問題で何が注目されているのか
実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス 7508 教室
実施内容/成果：2020 年以降、世界的にそうであるものの、フィリピンでは新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、特に低所得者層にとっては雇用や収入源の喪失、教育や医療へのアクセスの問題が生じていることを学習しました。

6）フィリピンの廃棄物処分場で働くウエィストピッカーについて学ぶ
対 象 演 習：A・B・C
実 施 期 間：2022 年 9 月 6 日（火）14:00－16:00
講　演　者：四ノ宮　浩 氏（映画監督）
演　　題：マニラのウエィストピッカーたちの生活
実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス 7508 教室
実施内容/成果：マニラのウエィストピッカーたちがどのような生活を送っているのか、どのようなリスクに直面しているのか、彼女たちの生計を向上させるためには何が必要なのか等について学習しました。

7）ウエィストピッカーを組織化したフィリピン NGO について学ぶ
対 象 演 習：A・B・C

実 施 期 間 ：2022 年 9 月 15 日（木）14:00－16:00
講　演　者 ：小林　幸恵 氏（特定非営利活動法人 LOOB JAPAN）
演　　題 ：フィリピンの開発実態と NGO の国際協力：その成果と限界
実 施 場 所 ：オンライン
実施内容/成果：フィリピンのイロイロ市で活動している日本の NGO、LOOB が協働していたフィリピンのローカル NGO で、ウエィストピッカーを組織化していた UCLA の組織運営や活動内容について学習しました。

8）フェアトレードの現状と認証について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 10 月 4 日（火）3 時限目
講　演　者 ：潮崎　真惟子 氏（認定 NPO 法人フェアトレード・ラベル・ジャパン）
演　　題 ：世界の企業とサステナビリティの潮流と国際フェアトレード認証の役割
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7101 教室（講演はオンライン）
実施内容/成果：途上国の生産者の厳しい現状、児童労働の現実、フェアトレード認証の必要性と仕組み等について学習することができました。

9）フィリピンのストリートチルドレンについて学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 10 月 11 日（火）3 時限目＋4－5 時限目
講　演　者 ：辻本　紀子 氏（(認定)特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21（ACC 21））
演　　題 ：フィリピンの貧困とストリートチルドレン
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7101 教室および 7508 教室
実施内容/成果：ACC 21 の設立経緯・活動内容、フィリピンのストリートチルドレンの実態と問題点、ストリートチルドレンをゼロにするために必要なこと等について学習することができました。

10）ユニセフとの共同講演会を通じてフィリピンにおける子どもの栄養状況とその改善支援活動について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 11 月 22 日（火）3 時限目
2022 年 11 月から 12 月末（募金、対面&オンライン）
講　演　者 ：高円宮　承子 さま、村山　晴香 氏（日本ユニセフ協会学校事業部）
林ゼミ 4 年生（演習 C）
演　　題 ：途上国の栄養不良問題とユニセフの子どもの栄養改善活動について
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 7101 教室。募金活動は対面/オンラインで実施
実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、途上国の子どもの栄養不良/栄養改善をテーマにした講演会を 3 年ぶりに対面で開催した。フィリピンで栄養改善に関連した活動をユニセフはどのように行なっているのかについて、高円宮承子さまおよび村山晴香氏（日本ユニセフ協会）から説明してもらい、理解することができました。一方、林ゼミ 4 年生（演習 C）が、2021 年度に実施したフィリピンの子どもたちの栄養不良の現状や改善策に関する研究結果について報告しました。募金についても 3 年ぶりに多摩センター駅前広場と初めて立川駅前で行ないました。並行して、本年度もユニセフのオンライン募金システム（フレンドネーション）を活用しました。その結果、約 32 万円を集めることができ、これを途上国の子どもたちの栄養改善のための活動に寄付することができました。

11）JICA 事業について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 12 月 10 日（土）16:15－18:00
講　演　者 ：戸川　正人 氏、高田　健二 氏（JICA）
演　　題 ：国際協力という仕事
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス 3551 教室
実施内容/成果：ODA の役割、JICA の業務、JICA 職員の仕事、JICA に入るために必要なこと等について学習することができました。

12）青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）の活動について学ぶ
対 象 演 習 ：A・B・C
実 施 期 間 ：2022 年 12 月 10 日（土）16:15－18:00
講　演　者 ：大竹　幸乃 氏、小平　直人 氏（社団法人青年海外協力協会）
演　　題 ：JICA ボランティアセミナー 2022
実 施 場 所 ：中央大学　多摩キャンパス GG504 教室
実施内容/成果：青少年活動分野で青年海外協力隊員（JICA 海外協力隊員）として 2 年間マラウイに滞在した大竹氏の活動内容や経験、青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）になるために求められていること等について学習することができました。

＜参考 URL＞
1）特別授業（カーボンニュートラルに向けた国際協力）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/06/61104/
2）訪問/模擬授業（浦和学院高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/06/61191/
3）特別授業（何が国際協力に影響を与えているのか）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/07/61296/
4）訪問/模擬授業（神奈川県立相模原高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/09/62614/
5）特別授業（フェアトレードの現状と認証）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/62739/
6）特別授業（フィリピンのストリートチルドレン）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/62808/
7）訪問/模擬授業（中央大学高校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/10/63010/
8）特別授業（ユニセフとの共同講演会を通じてのフィリピンにおける子どもの栄養およびユニセフ募金）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2022/11/63523/
https://friendonation.jp/projects/detail?project_id=24396
9）FLP 国際協力プログラム期末成果報告会/特別講演会（JICA 事業）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/01/64108/
10）特別講演会（JICA ボランティアセミナー（青年海外協力隊（JICA 海外協力隊））
https://www.chuo-u.ac.jp/international/news/2022/12/63820/
11）訪問授業（FACT による山梨県丹波中学校向け）
https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/01/64139/

(3)清水　武則（商学部・特任教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

モンゴルにおける観光産業発展の可能性（現地貢献型ゼミ）

＜授業の概要＞

2022 年度の本ゼミは最終年であり、ゼミ生は 4 名で、法学部 2 名、経済学部、国際経営学部各 1 名で男女の構成は女性 3 名、男性 1 名であった。最終年のゼミ 3 年目にして、ようやく本格的な対面授業が実施でき、モンゴルの現地研修も実施することができた。すでに現地に対する十分な知識は習得していたため、修了論文の作成以外の活動は、通常の大学のゼミでは体験できない実践的なものに重点をおいた 1 年となった。

＜活動内容＞

ゼミ生は各人が研究するテーマを通年リサーチして修了論文をまとめたが、通常の活動の重点は、①ゼミのホームページへのインタビュー記事投稿（2022 年度においては元横綱白鵬、JICA 日本センター勤務者、文化財の写真を撮り続けたカメラマン、中央大学卒業の第 1 回城山三郎賞受賞者、日本在住のモンゴル人絵本作家など）の他、②本ゼミの主要テーマであるモンゴル観光開発において日本人観光客、特に日本の大学生のモンゴルへの関心度調査（計 625 人の大学生へアンケート）の実施と分析、③ゼミで運営するモンゴル紹介インスタグラムである mongolia_chuo への写真投稿の継続、④モンゴル国立大学学生との交流、⑤モンゴル関係イベントへのボランティア活動などを行った。学生アンケート調査に関しては、モンゴル国立大学日本法センターの学生に、モンゴルでの日本のイメージについてモンゴルの学生に対してアンケート調査をしてもらった。つまり、観光という視点から日本とモンゴルでの並行調査が実現した。これはどの専門家もこれまで行っていない調査であった。

2022 年は外交関係がモンゴルと樹立されて 50 年目の節目に当たり、ゼミ生は通常の現地調査に加えて、8 月 23 日にモンゴル国外務省講堂で開催された「日本モンゴル大クリルタイ」という両国の議会関係者、政府関係者、友好諸団体、経済関係者が一堂に集った大シンポジウムで、日本の大学生のモンゴル国に対する意識調査結果を発表した。また、別途ゼミ生は調査結果を記者会見で発表した。これらはモンゴル外務省の Web での掲載やモンゴル国営放送局（MNB）はじめ多くのテレビ局でニュースとして取り上げられたほか、主要なインターネットサイトでも報道され、いずれも高い評価を得ることができた。この他、ゼミ生は 50 周年記念事業として首都ウランバートルで開催された日本フェスティバルや 11 月に行われたモンゴル国大統領の訪日においては NHK ホールでの国立馬頭琴故郷楽団の演奏会や大統領訪日歓迎レセプションにおいてゼミ活動の一環としてボランティア活動にも参加して貴重な体験を積んだ。

＜実態調査・見学調査＞
対象演習：C
実 施 日：2022 年 8 月 17 日(水)～8 月 31 日(水)
実施都市：ウランバートル・古都カラコルム（モンゴル）など
実施場所：①モンゴル外務省でのシンポジウム「日本モンゴル大クリルタイ」での発表（8 月 23 日(火)）
②Today 紙でのモンゴル国立大学学生との共同記者発表（8 月 24 日(水)）
③Blue Sky ホテルでの 50 周年記念レセプション参加（8 月 24 日(水)）
④White Rock Center での Japan Festival ボランティア活動（8 月 18 日(木)～21 日(日)）
⑤モンゴル国立大学学生と観光調査（恐竜博物館、国立民俗博物館、Nomin 百貨店、お土産店など（8 月 22 日(月)～25 日(木)）
⑥モンゴル国立古生物研究所訪問等（8 月 29 日(月)～30 日(火)）
⑦古都カラコルム周辺の観光調査（エルデネズー寺院博物館、日本が建設したカラコルム博物館、アルハンガイ博物館、ハルバルガス遺跡、ラムサール条約指定地のウギー湖）

実施内容と成果：上記実施場所の数字の順に記載
①モンゴル外務省で外務大臣出席の下開催した日モンゴル外交樹立 50 周年記念シンポジウムで、日本からの観光客が増えない原因を学生のアンケート分析をもとに発表、モンゴル外務省の HP に掲載されたほか、主要メディアで大きく取り上げられた。

2022 年 8 月 23 日(火)　モンゴル国外務省で開催の「大クリルタイ」で発表するゼミ生

②共同記者発表は主要テレビ局、ソーシャルネットワークの ikon.mn や gogo.mn などで詳細にかつ好意的に紹介された。
③レセプションにはモンゴル教育大臣など 400 名が出席、大人のモンゴル関係者と交流する機会となった。
④フェスティバル実行委員会へのボランティアとしてモンゴルの若者や日本の他大学学生とともに、準備や開催中の顧客案内等様々な業務を行い、国際交流の観点から貴重な体験を積んだ。
⑤ゼミの現地活動の中で、モンゴル国立大学学生との共同調査は、対象についての理解を深めるというだけでなく、同行するモンゴル人学生に日本語を使用して実際に会話する貴重な機会を与える観点から若者の相互理解に大きく資するものである。一緒に活動した学生同士がその後も交流しているなど、国際プログラムに相応しいものとなった。
⑥所長のツォグトバータル博士は恐竜の世界的権威者であるが、モンゴルにおける恐竜化石の保護と観光資源への活用（恐竜博物館の建設）について貴重な意見を聞けた。
⑦カラコルム博物館は日本の ODA で建設された施設であり、エルデネズー寺院と合わせカ

ラコルム観光の起点になっている。同地域における観光の現状と課題、今後の観光の在り方を考える上で多くの体験ができた。ウギー湖のツーリストキャンプでは西側からの旅行者を快適に迎える施設が完成しており、今後のモンゴル観光の発展の可能性を探れた。

エルデネズー寺院

観光資源としての遊牧民

（４）平澤　敦（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

＜授業の概要＞

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターしながら、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていき、適宜グループによる報告をし、それに対するコメントおよびディスカッションを行った。

今年度はCSRを共通テーマとして選択した。

＜活動内容＞

FLP演習　平澤敦ゼミAは、コロナ禍の影響もだいぶ緩和されたものの、日程的に海外実態調査を行うことができなかったが、ヒアリングおよびアンケート調査等はgoogle form等を活用して実施した。

本年度は、CSR という共通テーマを設定したため、議論が例年に比べて活発で、グループ研究においてグループ間での質疑応答が質的に向上した。

研究に際しては、国内外のCSR関連の文献を渉猟し、毎週の活発な議論を通じて、相応の成果を年度末報告会において公表することができた。

研究テーマは以下のとおりである。

●企業のCSR活動の社会的信頼構築への影響について

●CSRの効果測定指標についての一考察～航空業界のCSRを基軸として

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実 施 日：2022年11月7日（月）5・6時限

講 演 者：フィリップス　千咲 氏（FLPのOB（平澤ゼミA・中迫ゼミBC所属））

演　　題：JAL客室乗務員の活動と取り組み～広島県のPRの試み

実施施設：中央大学　多摩キャンパスF502教室

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

＜授業の概要＞

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていった。

今年度は、ベトナム（ハノイ）にて海外実態調査を行う前提で、キーワードをベトナムとして、ベトナムの企業・社会が抱える内在的課題につき分析を進めることとした。

＜活動内容＞

FLP 演習　平澤敦ゼミ B は、コロナ禍の影響もだいぶ緩和されたため、海外実態調査を行うことを前提に、ベトナムの概要およびベトナムにおける諸課題について全員で俯瞰した。そこから、問題を抽出して、それぞれグループ別研究を行った。

最終的な成果報告は、年度末成果報告会において公表した。

研究テーマは以下のとおりである。

●ベトナムにおける食意識と健康の相関性

●ベトナムにおける国内企業と海外企業のブランド認識差について

●ベトナムにおけるサプライチェーンの食品ロスの発生メカニズムと
発展途上国支援
～フードシェアリングサービスを利用して

●ベトナムにおける肥満問題と健康志向の並立関係について
～栄養知識の現状に着目して

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 11 月 7 日(月)
講 演 者：フィリップス　千咲 氏（FLP の OB（平澤ゼミ A・中迫ゼミ BC 所属））
演　　題：JAL 客室乗務員の活動と取り組み～広島県の PR の試み
実施施設：中央大学　多摩キャンパス F502 教室

【実態調査】

対象演習：B
実 施 日：2022 年 11 月 23 日(水)～11 月 27 日(日)
実施都市：ハノイ（ベトナム）
実施場所：ハノイ国際学校、ハノイ JETRO 事務所・他

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

＜授業の概要＞

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていった。

今年度は、当初シンガポールにて海外実態調査を行う前提で、シンガポールにおける企業や諸問題につき研究・分析を進めることとした。

＜活動内容＞

FLP 演習　平澤敦ゼミ C は、コロナ禍の影響もだいぶ緩和されたため、シンガポールにて海外実態調査を行うことを前提としていたが、日程調整の関係から実施することができなかった。

しかし、2 グループとも国内外の文献を渉猟し、研究上の一定の成果を得ることができた。

最終的な成果報告は、年度末成果報告会において公表した。

研究テーマは以下のとおりである。

●シンガポールにおけるサステイナブルな新エネルギーの普及戦略について
～新エネルギーについての各国の政策との比較に着目して

●シンガポール型ウェルネスツーリズムの提案

(5)新原　道信（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

＜授業の概要＞

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？―いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手―〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のこころに寄り添った鶴見良行さんなど―の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、″フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）″を蓄えていきます。

(1)社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。

(2)それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、″たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち″、異質で多様なひとたちと″ともに創ることを始める″ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えします。

(3)国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきます。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。

＜活動内容＞

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。発展途上国が抱く問題を先進国が解決しようと手を差し伸べる際、どうしても「支援する側」と「支援される側」という上下関係が生まれてしまいます。新原ゼミでは、両者が対等な立ち位置で接することを目指しています。

そのため、ゼミでの学びも水平的関係を意識し、ゼミは学年をこえたチームを編成し、フィールドワークでは実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していきます。

新型コロナウイルスの緩和により、今年度は２年ぶりに対面でのゼミ活動を行うことが可能になり、前期と後期、合計２か所でのフィールドワークを実施することができました。前期のはじめには、『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』（新原道信編、ミネルヴァ書房 2022）を読み、フィールドワークの本質や根本的理解を深め、そこでの気づきや学びを生かし５月には班を３つに分けフィールドの決定、事前学習を行いました。６月に新大久保と西川口でそれぞれフィールドワークを実施し、その後事後学習やゼミ内での報告

会を行いました。
　後期は、前期とは形式を変え、「全ての班が同じ場所に複数回訪れる」というフィールドワークを実施する方針としました。横浜を調査地に定め、9 月から 10 月の間に 2 回のフィールドワークを実施しました。その後、テーマごとに班を編成し、事後学習や個人研究、期末成果報告会に向けた準備を進め、ＦＬＰ期末成果報告会で個人研究の発表を行い、その後、期末成果報告書をとりまとめました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞
　ゼミ生は、新大久保、西川口、横浜でのフィールドワーク（実態調査）を ABC 混成の各チームで行いました。

(6)中迫　俊逸（国際経営学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

＜授業の概要＞

本演習においては、(1) 異文化コミュニケーションの理論と実践の研究、(2) 海外研修及び (3) ビジネス英語のトレーニングを行います。ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表を行ってもらいます。海外研修では、実際に外国に行き、日系企業や現地企業等でインタビューを行います。インタビュー項目は各種文献等を通じて作成し、インタビュー相手に事前に送付するのでかなり早い段階から準備を行うことになります。また、研修後は報告書の作成と期末成果報告会において発表を行ってもらいます。

＜活動内容＞

FLP C演習中迫ゼミは、イスラム教、ハラルビジネスを中心とした研究を行った。特にハラルジャパン協会が公開している情報（文書、動画）を参考とし、日本におけるハラルビジネスのさらなる可能性とイスラム圏の文化と日本の共存共栄について研究を行った。

ゼミの履修生にとっては、イスラム教はあまりなじみのない宗教であり、イスラム圏の文化やビジネスはほぼ未知のものであった。そのため、履修生は大変興味を持って調査・研究を行った。イスラム圏への海外引率を計画していたが、コロナ禍がなかなか収まらなかった。感染リスクのことを考え履修生と共に、海外実態調査は中止した。

海外実態調査を中止した関係で、履修生とは、プライベートな活動として日本最大のモスクがある「東京ジャーミイ・トルコ文化センター」を訪問し、イスラム教に関するオープン講義や施設の見学を行うとともに、資料収集や情報収集を行った。同センターでは、モスクに入って礼拝を見学することもできたので、大変興味深かった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C

実 施 日：2022年10月23日(日)

実施都市：東京都渋谷区

実施内容：オープン講義への出席、施設の見学、情報収集

成　　果：海外実態調査を中止したので、日本最大のモスクを有する「東京ジャーミイ・トルコ文化センター」への訪問は、履修生のモチベーションをキープするのに大いに役立った。また、ハラルジャパン協会からの情報を基にした事前学習は、同センター訪問時においても、訪問後の研究においても有効であった。受講生の視野がかなり広がったことを確信している。

(7)山田　恭稔（国際経営学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

開発社会学を通して東南アジアを捉える

＜授業の概要＞

開発社会学の視点から、東南アジア地域での貧困や格差に関連する多岐にわたる開発課題あるいは社会問題に対する政策や国際協力について、地域社会を軸に研究する。また、東南アジア諸国が抱える開発課題や社会問題に対する政策および試み、ならびにそれらが地域社会にもたらした影響について学びを深めながら、開発社会学の視点や考え方の基礎を批判的思考を通して習得する。

なお、本演習 A では、輪読を行ないつつ、関心テーマに基づくグループ研究を進め、論文を作成する。本演習 B では、輪読を行ないつつ、東南アジアでの現地調査と合わせて、関心テーマに基づくグループ研究を進め、論文を作成する。

本演習 ABC は、ゼミ生が専門知識だけではなく、発表や討議をも含んだチームワークの経験を積み、協調性、自己管理力を修得し、また、フィールドワークに基づいたレポートや演習論文の作成などを通じ、総合的な学習体験と知的複眼思考力を修得することに関わる。

＜活動内容＞

山田ゼミでは、輪読とグループ研究という相互補完的に作用する 2 つの活動の両輪を並行させながら、ゼミ生たちが主体となった研究活動を進めました。コロナ禍にも関わらず、全回とも教室での対面形式で授業を進めることができました。特に、演習 B では、ほぼ毎回、全員が出席できました。このことは、ゼミ生たちの間で親睦が一層深まることにつながったと同時に、積極的な討議や活発な意見交換、チームワークに基づく多岐にわたった有意義なゼミ活動を生み出す礎にもなりました。

輪読では、国際協力や国際開発に関してのみならず、東南アジアの社会や政治に関する文献から学びました。これらは、学術論文、あるいはテキストや専門書の章であり、合計で 18 編を活用しました。国際協力・国際開発に関しては、主に開発社会学、参加型開発、社会開発の分野について様々な事例を交えつつ扱い、東南アジアに関しては、主に開発政策、国民統合、エスニシティ、住民組織、コミュニティについて理解を深めました。

グループ研究では、5 月から試行錯誤を重ねながら研究の枠組み作りに取り組み、その精度を夏休み前までに徐々に上げていきました。演習 A ではフェアトレードをテーマとしました。演習 B では 2 つのグループに分かれて研究を進め、8 月以降はオンライン形式で日本人の元 JICA 技術協力専門家の方々からのインタビューを実施し、12 月には現地人協力者たちからのアンケートの結果も回収しました。インタビューやアンケート調査からは、開発の現場に実際に携わったり、現地の様子を実際に知る人々からの話や言葉に触れる貴重な機会を得ました。

さらに、11 月上旬にはタイ国チェンマイにて当ゼミとして初めて国外実態調査を実施しました。同調査では、チェンマイ大学での講演会や同大学研究所の RCSD に集う専門家との意見交換、Diakonia、IMPECT、PASD など５つの NGO からの聞き取りのみならず、カレン族のフアイ・イーカン村を訪問して村の女性リーダーたちの語りを聞くことができました。これらを通して、東南アジアを地域として捉える一方でその国々を比較する機会、ならびに、地域社会の側から捉えた開発の実態を垣間見る機会に恵まれました。

オンライン形式でのインタビュー、アンケート調査、国外実態調査から得られた学びによって、ゼミ生たちは、文献からでは得難い情報の量や厚み、さらに、経験に基づいていたり、あるいは固有の意味を持つ民族文化に裏打ちされた人々の言葉の重みを実感することができました。また、国際協力活動がジレンマを抱えつつも「根本的な問題に向き合う」や「真の信頼関係を構築する」という本質的なテーマにも目を背けずに取り組み続けるという姿勢の重要性についても、ゼミ生たちは深く理解しました。

これらの活動を通して、演習 B では「ラオスの農村における農家自身の気づきと決定の重要性～収入向上の視点から～」、「マレーシアとタイにおける人種・民族の教育による同化政策」という 2 編のグループ論文を執筆しました。FLP の期末成果報告会では内容のある報告ができましたし、論文もいいものが出来上がりました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2022年7月17日(日)
講 演 者：新田　直人 氏（公益財団法人 国際農林業協働協会（JAICAF）技術参与）
演　　題：ラオスにおける市場志向型農業の現状と課題
実施施設：オンライン
実施内容：講演会
成　　果：講師が営農分野の技術協力専門家として関わった JICA南部メコン川沿岸地域参加型灌漑農業振興プロジェクト（PIAD）での体験を基にして、ラオス南部での農業生産の実際について説明がされた。これを受けて、ゼミ生たちはラオスで市場志向型農業が達成されるにはさまざまな課題があると同時に、農民たち自らの「気づき」と取り組みの継続性が重要であることに理解を深めた。この理解はグループ研究の礎の１つになった。

対象演習：B
実 施 日：2022年11月1日(火)～11月6日(日)
実施都市：チェンマイ（タイ王国）
実施場所：チェンマイ大学・他
実施内容：実態調査
成　　果：本調査中には、大学での講師や専門家との意見交換、NGOからの聞き取り、村のリーダーたちの語り聞きが行なわれた。これらは一方的な情報収集に留まらず、双方向での対話にも重きが置かれて進められた。このアプローチにより、ゼミ生たちは、聞き手のことを理解しつつ、自らの理解を確認しながら、開発の現場、ならびに地域や民族の固有な文化を軸とする開発のあり方についての情報収集を行なうことができた。

対象演習：B
実 施 日：2022年11月2日(水)
講 演 者：Dr.Putthida Kijdumnern 氏
(Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University)
演　　題：Disparity between Urban and Rural in Thailand
実施都市：チェンマイ（タイ王国）
実施施設：チェンマイ大学社会科学部
実施内容：講演会
成　　果：タイの都市と地方の格差に関して、経済的側面からのみならず、教育、資源管理、政治参加といった多方面からの機会の格差についても説明がなされた。タイを一つの国として捉えてのさまざまな機会の格差に関する概要説明は、地域社会、地域住民、固有な民族を主体とする開発について、ゼミ生たちがタイでの実態調査中に考察を深める上での良き導入となった。

対象演習：B
実 施 日：2022年11月2日(水)
講 演 者：Dr.Prasert Trakansuphakon 氏
(The Pgakenyaw Association for Sustainable Development)

演　　題：Indigenous People / Ethnic Minorities in Thailand
実施都市：チェンマイ（タイ王国）
実施施設：チェンマイ大学社会科学部
実施内容：講演会
成　　果：持続的な開発のためのカレン族協会（PASD）の観点から、さまざまな先住民族のタイにおける政策、権利、差別をめぐる現状がまず紹介された。さらに、PASDや他の先住民によるさまざまな団体が、循環農業、固有文化、資源管理といった先住民が持つローカルな知識を伝承し活用する取り組み（学校教育カリキュラムへの導入、地域組織やネットワークの強化、社会的企業など）が紹介された。先住民族の現状と課題について、講師が先住民族自らの立場からその尊厳とともに語った言葉は情報としても貴重であり、地域社会、地域住民、固有な民族を主体とする開発をめぐって、ゼミ生たちの理解を大いに深めた。

オンラインでの新田氏（元JICA技術協力専門家）による講演会と参加学生たち（7月17日）

チェンマイ大学での講演会の全景（11月2日）

実態調査の間に：朝の寺にてタイの文化に触れる学生たち（11月2日）

訪問先NGO（Diakonia)にてCountry Director
たちとの質疑応答の様子（11月2日）

訪問先NGO（IMPECT)にてDirectorから活動に
関する説明を受ける学生たち（11月3日）

訪問先NGO（CPCR)にて意思疎通に苦慮しながら
も聞き取り調査を行なう学生たちの様子
（11月3日）

実態調査の間に：チェンマイ市を全貌できる
山寺にて（11月3日）

訪問先の村で村長たちの森林利用に関する
ローカルな知識について村の地図を見ながら
説明を聞く学生たち（11月4日）

訪問先の村で昼食にあずかる学生たち（11月4日）

ラップアップ・セッションでチェンマイ大学
RCSD所長に対して発表を行なう学生たち
（11月5日）

(8)伊藤　晋（全学連携教育機構・兼任講師）

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

国外実態調査を通じた開発問題と国際協力の研究

＜授業の概要＞

前期では、国外実態調査対象国の政治、経済、主要開発課題、実施されている国際協力等について､様々な角度から考察するとともに､履修生により設定される調査テーマに基づき、先行研究レビューを含めた調査の準備を進めます。後期は、国外実態調査を踏まえ、より明確になった問題意識に基づき、実態調査対象国の主要開発課題及び調査テーマについて、①歴史的な変遷、②域内近隣諸国や他地域等との比較分析、③国際協力が果たした／果たしている役割等の観点も織り交ぜつつ分析を行い、グループ論文を作成します。開発理論・戦略・潮流等関連事項については、各開発課題の分析過程で随時紹介・議論します。

演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

＜活動内容＞

2022 年度の伊藤 B ゼミでは、フィリピンでの実態調査として、A ゼミの最後にゼミ生による議論で決めた以下の 2 テーマについて、１年間かけ取り組みました。

・フィリピン大統領選挙

・フィリピンにおける貧困削減と観光

B ゼミが開始する前の春季休暇中において、各グループで主要関連文献についての文献メモと研究計画書を作成しました。前期では、先行研究を進めるとともに、文献メモに基づく議論をゼミ内で実施し、研究計画書については、グループ間で検証することで、改善を図りました。夏季休暇中には、国内及びフィリピンにおける NGO、研究者等との対面、オンラインによる面談、メールによる照会等を学生のみで実施しました。

後期には、グループ論文の構成を固め、追加的な文献研究と国内及びフィリピンの関連団体とのオンライン面談等を継続し、12 月には国際協力プログラムの成果報告会で発表するとともに、論文を作成しました。また、後期には、次の文献の輪読も合わせて行いました：下村恭民・辻一人・稲田十一・深川由紀子、2016 年『国際協力―その新しい潮流　第 3 版』、有斐閣選書。

新型コロナ関連では、大学の方針を踏まえ、演習については対面形式にて実施しました。また、授業時間外において、オンラインによる懇親会等も節目節目に実施しました。毎年夏季休暇中に実施しているフィリピンでの実態調査については、新型コロナ感染に関する大学の方針を踏まえ、残念ながら実施を見送りましたが、オンラインにより、フィリピンの機関、団体等を含め、学生主導でインタビューを数多く実施し、論文を纏めることが出来ました。

最終的なグループ論文のタイトルは以下のとおりです。

「近年のフィリピン大統領と国民の政治に対する考え」

「フィリピンで貧困削減をするためにできる持続可能な観光とは」

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B

実 施 日：2022 年 8 月 3 日(水)

実施都市：東京都府中市

実施場所：東京外国語大学

実施内容：フィリピン政治を専門とする大学院総合国際学研究院の日下渉教授に、フィリピン政治の変遷、特徴等をお聞きするとともに、2022 年 5 月に実施されたフィリピン大統領選挙の結果に関する評価、考察等についてご見解を伺いました。
成　　果：フィリピン政府の特徴、中間層を中心とするフィリピンの有権者の政治への期待等について、文献では得られない情報、分析に接することが出来ました。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 11 月 7 日(月)
講 演 者：小林　幸恵 氏（NPO 法人 LOOB JAPAN フィリピン事務局）
演　　題：フィリピンの国民が政治に求めるもの
実施方法：オンライン
実施内容：フィリピンで活動する NGO の立場から、貧困層を中心とするフィリピンの市民が政治に何を期待しているのか、2022 年の大統領選に何を求めたのか、等についてお話しを伺いました。また、本 NGO に関係するフィリピンの市民にも同席頂き、市民の声も聞くことが出来ました。
成　　果：貧困層を中心とするフィリピン市民が政治に何を求めているのか、一定の理解をすることが出来ました。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

国際協力の現実、成果、課題の検証

＜授業の概要＞

本演習では、国際協力の新たな潮流等を中心に研究しつつ、各自の問題意識に基づき、修了論文を作成します。演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

＜活動内容＞

2022 年度の伊藤 C ゼミでは、A ゼミ、B ゼミでの成果を踏まえ、個人の修了論文について１年間かけ取り組みました。

前期では、テーマ、リサーチクエスチョン、研究計画書について、ゼミ内で発表し、相互にコメントし合うことで、改善を図りました。また主要文献についても、ゼミで発表し、議論することで、他のテーマに関する知識や分析手法等についても理解を深めました。

夏季休暇中には、国内外における、政府機関、国際機関、NGO、研究者、民間企業等とのオンラインによる面談、メールによる照会等を学生のみで実施しました。

後期には、論文の構成を固め、追加的な文献研究と国内外の関連団体・企業等とのオンライン面談等を継続し、12 月には国際協力プログラムの成果報告会で発表するとともに、論文を作成しました。

新型コロナ関連では、大学の方針を踏まえ、演習については、対面形式にて実施しました。また、授業時間外において、オンラインによる懇親会等も節目節目に実施しました。夏季休暇中の海外実態調査については、新型コロナ感染に関する大学の方針を踏まえ、残念ながら実施を見送りましたが、オンラインにより、海外の機関、団体等を含め、学生主導でインタビューを数多く実施し、論文を纏めることが出来ました。

最終的な論文のタイトルは、以下のとおりです。

「日本における難民 ～難民受け入れ課題とその改善に向けて～」

「生理の貧困を考える―社会は生理の貧困をどう捉えているのか―」

「外国人児童生徒の教育問題 教育の充実と多文化共生社会に向けて必要な支援策とは」

「インドにおける子どもの権利の現状と児童労働撤廃への取り組み」

「日本が紛争復興支援で果たすべきあり方」

「地域社会の多文化共生のあり方 ～やさしい日本語の普及に向けて～」

「モビリティ面からのインドの大気汚染問題の改善方法の考察」

（９）小澤　勝彦（全学連携教育機構・客員教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

国際協力から見える現代の世界・日本の課題

＜授業の概要＞

国際協力論は経済、政治、社会等をカバーする総合的・学際的分野であることは勿論、環境問題、貧困問題等極めて広い範囲を扱う点で、日本にいる我々にも身近な問題と密接な関係があります。

本ゼミでは、国際協力の概要に続き SDGs の各課題を開発途上国に限るものではなく、現在の日本社会が対応を迫られている問題群として学習します。従って、はじめに JICA の業務を始めとした ODA の役割などを講義形式で学習した後、国際協力、SDGs を背景とした世界の課題・社会問題等の開発関連トピックスを題材として議論、解決策等を検討します。ゼミ生には主体的に課題の設定、分析、発表を課します。

なお、本ゼミでは教員から事前学習の資料の送付及びゼミ生からゼミ内プレゼンテーション資料の共有をおこなうなど Webex、manaba、e-mail、LINE による双方向のコミュニケーションを積極的に活用しました。

＜活動内容＞

当ゼミは ODA（Official Development Assistance）と SDGs（Sustainable Development Goals)を二本の柱としています。ODA に関しては、講義を中心に基礎事項を学習し、SDGs に関しては、新聞・雑誌等の最新の記事を活用しゼミ内プレゼンテーション、議論をおこない、参加型でゼミを運営しました。ゼミ生はゼミ生間で活発な議論をした結果、日本では取組が遅れているが子供の貧困などの観点で重要な「養子縁組制度の課題」を FLP 期末成果報告会のテーマとして選定しました。ゼミ生は養子縁組支援に取組む NPO のインタビューなどを行い、その成果を報告会において発表しました。

当ゼミでは過去から現在に至る開発問題とコロナ・パンデミックやウクライナ戦争などの現代の世界の諸問題及び国内の身近で起こっている課題を一体として理解することを目標にしています。この趣旨に従い、ゼミ生は多くの課題に取り組みました。例えば、多国籍企業の役割が良くも悪くも拡大しているボーダレスな世界での貧富格差拡大、人種差別、地球環境問題そして、そうした状況下改めて考え直す必要性が高まっている社会福祉、教育問題などに取り組みました。

① 講義

ゼミ生が国際協力を初めて学ぶ学生であることに配慮し、開発が人類の歴史の中でなぜ 20 世紀半ばになって重要なテーマとして登場してきたのか、そして南北問題が国連等の場で主要な課題になってきたのか、更にそもそも人類の歴史の中で貧困、格差、ジェンダーといった問題がどのようにして生まれてきたのかなどを理解するために、日本の国際協力の総合実施機関である JICA の活動を通し学習してもらいました。

こうした国際協力の理論、歴史、様々な取組が現在の SDGs の底流にあることをベースに現在の世界、日本社会で起きている貧富の格差、地球環境問題、ジェンダー、人種差別などの課題を題材としてゼミの中での議論につなげることで、参加型の運営を行いました。

② レポート作成・ゼミ内プレゼンテーション

講義と並行して、国際協力や社会問題に関する新聞や雑誌の記事、ビデオ教材を提供又はゼミ生自身が提示し、それらに関する分析、解釈及び解決に向けた提案等をゼミ内でプレゼンテーションし、様々な角度から議論をおこないました。

（ゼミ内議論等の主なテーマ）

開発という概念に関する基本的認識/食品汚染/技術研修生の待遇問題/日本の同性婚問題/英国における子供の貧困/ウクライナ戦争を背景としたドイツのヘイトクライム/新しい貧困への取組―オトナ食堂/ヨルダンにおけるシリア難民/ファストファッションの課題/不登校の実態・支援/リプロダクティブ・ヘルス

プレゼン/議論指導のポイント：

・SDGs や環境などに関する包括的な認識を深めるとともに、ゼミ生の関心の高い教育、人権、環境などについてその背景を学習しました。

・様々な国際問題、社会問題について自らの問題として考える習慣をつけてもらいました。

③ 論文作成（FLP 期末成果報告会発表）

「養子縁組制度の課題」についてゼミ生は共同で期末成果報告会の準備・実施に取り組みました。ゼミ生は、養子縁組について、その歴史、日本国内での最近の取組、ヨーロッパ等他先進国での実情などを共同して、また一部分担して調査しました。

（論文の構成）

日本の現状/里親制度と養子縁組/養子斡旋の仕組みと課題/欧米との相違（歴史・考え方）/未来への展望

論文指導のポイント：

テーマ設定、調査の手法等ゼミ生の自主性に任せつつ、報告の論理性、プレゼン資料作成、分析手法などについて重要なステージで指導を行いました。

④ 海外調査の準備

FLP の恒例に従い、2023 年夏に海外調査を予定しているため、2022 年度末にはタイを調査対象国としてその下準備を開始した。来年度、演習 B 開始と同時にテーマの確定、下調べ、海外調査準備を本格的に行う。

海外調査準備のポイント：

今夏の内外におけるコロナ禍等による旅行制限等の事態に備え、海外調査が不可能になった時のため、WEB 等リモートメディアを使った調査の計画準備を合わせて行うこととする。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

国際協力から見える現代の世界・日本の課題

＜授業の概要＞

国際協力論は経済、政治、社会等をカバーする総合的・学際的分野であることは勿論、環境問題、貧困問題等極めて広い範囲を扱う点で、日本にいる我々にも身近な問題と密接な関係があります。

本ゼミでは、演習 A で実施した国際協力の歴史・課題、人類にとって開発が何を意味するかを哲学や開発思潮にまで遡って学習した内容を受け、開発経済学、特に経済成長論の理論的なバックグラウンドをテキスト（開発経済学入門）を使って学びます。また、国際協力や SDGs に関連する時事トピックスなどを題材として議論、解決策等を検討します。ゼミ生は主体的に課題の設定、分析、発表を求められます。

＜活動内容＞

当ゼミは ODA（Official Development Assistance）と SDGs（Sustainable Development Goals)を二本の柱としています。ODA に関しては、講義を中心に基礎事項を学習し、SDGs に関しては、新聞・雑誌等の最新の記事を活用しゼミ内プレゼンテーション、議論をおこない、参加型でゼミを運営しました。ゼミ生はゼミを通じて最も高い問題意識を持ったテーマ、「沖縄の貧困問題」について、夏期休暇期間を利用して現地調査を実施、その成果を FLP 期末成果報告会において発表しました。また、発表を論文の形で取りまとめ演習 B での集大成としました（一連の沖縄関係の調査・発表活動は演習 C と合同で実施した)。

当ゼミでは過去から現在に至る開発問題とコロナ・パンデミックを含む現代の世界の諸問題及び国内の身近で起こっている課題を一体として理解することを目標にしています。この趣旨に従い、ゼミ生は多くの課題に取り組みました。例えば、多国籍企業の役割が良くも悪しくも拡大しているボーダレスな世界での格差拡大、人権問題、地球環境問題、そしてそうした状況下改めて考え直す必要性が高まっている社会福祉、教育問題などに取り組みました。

① 講義

ゼミ生は、演習 A において開発が人類の歴史の中でなぜ 20 世紀半ばになって重要なテーマとして登場してきたのか、そして南北問題が国連等の場で主要な課題になってきたのか、更にそもそも人類の歴史の中で貧困、格差、ジェンダーといった問題がどのようにして生まれてきたのかを産業革命から植民地支配に至る歴史を振り返ることによって学習しました。演習 B ではこれらの開発論の議論を深め途上国の開発・経済成長に内在する経済停滞問題（貧困国・中進国の成長の罠）などを開発経済学の理論をもとに学習しました。

こうした国際協力の理論、歴史、様々な取組が現在の SDGs の底流にあることをベースに現在の世界、日本社会で起きている貧富の格差、地球環境問題、ジェンダー、人種差別などの課題を題材としてゼミの中での議論につなげることで、参加型の運営を行いました。

② レポート作成・ゼミ内プレゼンテーション

講義と並行して、国際協力や社会問題に関する新聞や雑誌の記事、ビデオ教材を提供又はゼミ生自身が提示し、それらに関する分析、解釈及び解決に向けた提案等をゼミ内でプレゼンテーションし、様々な角度から議論をおこないました。

(ゼミ内議論等のテーマ)

環境問題、犯人は？/教師の労働環境と子供の貧困/子供の貧困と雇用労働問題/沖縄県の学歴社会/子供の貧困と法整備/サステイナブル・ファッション/日本では何故起業家が少ないのか？/トルコとクルド問題

プレゼン/議論指導のポイント：

・SDGs や環境などに関する包括的な認識を深めるとともに、ゼミ生の関心の高い教育、人権、環境などについてその背景を学習しました。

・様々な国際問題、社会問題について自らの問題として考える習慣をつけてもらいました。

③ 論文作成（FLP 期末成果報告会発表）

「沖縄の貧困問題」についてゼミ生は共同で論文を執筆しました（演習 C と合同）。

ゼミ生は、沖縄の貧困問題について、沖縄の特殊な歴史を踏まえて子供の貧困問題を中心に多角的に共同して、また一部分担して調査しました。この調査の結果、経済的な後進性、親の貧困、社会制度の不備などの課題が確認されました。マクロ面での抜本的な解決はにわかには困難ですが、貧困家庭を対象にきめ細かく支援することを目的としたコミュニティをベースとした仕組み作りを提言しました。

論文指導のポイント：

テーマ設定、調査の手法等ゼミ生の自主性に任せつつ、論文の論理性、文章作成、分析手法などについて重要なステージで論文の方向性について指導を行った。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

国際協力から見える現代の世界・日本の課題

＜授業の概要＞

国際協力論は経済、政治、社会等をカバーする総合的・学際的分野であることは勿論、環境問題、貧困問題等極めて広い範囲を扱う点で、日本にいる我々にも身近な問題と密接な関係があります。

本ゼミでは、演習 A、B で実施した国際協力の歴史・課題、人類にとって開発が何を意味するかを哲学や開発思潮にまで遡って学習した内容を受け、開発経済学のテキスト（開発経済学入門）を使い、特に経済成長論の理論的なバックグラウンドを学びます。また、国際協力や SDGs に関連する時事トピックスなどを題材として議論、解決策等を検討します。ゼミ生は主体的に課題の設定、分析、発表を求められます。

＜活動内容＞

当ゼミは ODA（Official Development Assistance）と SDGs（Sustainable Development Goals)を二本の柱としています。ODA に関しては、講義を中心に基礎事項を学習し、SDGs に関しては、新聞・雑誌等の最新の記事を活用しゼミ内プレゼンテーション、議論をおこない、参加型でゼミを運営しました。ゼミ生はゼミを通じて最も高い問題意識を持ったテーマ、「沖縄の貧困問題」について、夏期休暇期間を利用して現地調査を実施、その成果を FLP 期末成果報告会において発表しました。また、発表を論文の形で取りまとめ演習 C での集大成としました（一連の沖縄関係の調査・発表活動は演習 B と合同で実施した)。

当ゼミでは過去から現在に至る開発問題とウクライナ戦争やコロナ・パンデミックなど現代の世界の諸問題及び国内の身近で起こっている課題を一体として理解することを目標にしています。この趣旨に従い、ゼミ生は多くの課題に取り組みました。例えば、多国籍企業の役割が良くも悪くも拡大しているボーダレスの世界での格差拡大、人権問題、地球環境問題、そしてそうした状況下改めて考え直す必要性が高まっている社会福祉、教育問題などに取り組みました。

① 講義

ゼミ生は、演習 A、B において開発が人類の歴史の中でなぜ 20 世紀半ばになって重要なテーマとして登場してきたのか、そして南北問題が国連等の場で主要な課題になってきたのか、更にそもそも人類の歴史の中で貧困、格差、ジェンダーといった問題がどのようにして生まれてきたのかを産業革命から植民地支配に至る歴史を振り返ることによって学習しました。演習 C ではこれらの開発論の議論を深め途上国の開発・経済成長に内在する経済停滞問題（貧困国・中進国の成長の罠）などを開発経済学の理論をテキスト（開発経済学入門）を使って議論することで理解を深めました。

こうした国際協力の理論、歴史、様々な取組が現在の SDGs の底流にあることをベースに現在の世界、日本社会で起きている貧富の格差、地球環境問題、ジェンダー、人種差別などの課題を題材としてゼミの中での議論につなげることで、参加型の運営を行いました。

② レポート作成・ゼミ内プレゼンテーション

講義と並行して、国際協力や社会問題に関する新聞や雑誌の記事、ビデオ教材を提供又はゼミ生自身が提示し、それらに関する分析、解釈及び解決に向けた提案等をゼミ内でプレゼンテーションし、様々な角度から議論をおこないました。

（ゼミ内議論等の主なテーマ）

シングルマザーの貧困/教育格差の歴史/インクルーシブ教育/少年少女の非行問題/ヤングケアラー/子供シェルター/貧困の世代間連鎖/イランの女性蹂躙問題/環境保護活

動の過激化/小中学生の不登校問題/日本の安全保障

プレゼン/議論指導のポイント：

・SDGs や環境などに関する包括的な認識を深めるとともに、ゼミ生の関心の高い教育、人権、環境、沖縄問題などについてその背景を学習しました。

・様々な国際問題、社会問題について自らの問題として考える習慣をつけてもらいました。

③ 論文作成（FLP 期末成果報告会発表）

「沖縄の貧困問題」についてゼミ生は共同で論文を執筆しました（演習 B と合同）。

ゼミ生は、沖縄の貧困問題について、沖縄の特殊な歴史を踏まえて子供の貧困問題を中心に多角的に共同して、また一部分担して調査しました。この調査の結果、経済的な後進性、親の貧困、社会制度の不備などの課題が確認されました。マクロ面での抜本的な解決はにわかには困難ですが、貧困家庭を対象にきめ細かく支援することを目的としたコミュニティをベースとした仕組み作りを提言しました。

論文指導のポイント：

テーマ設定、調査の手法等ゼミ生の自主性に任せつつ、現地でのインタヴューのサポート、論文の論理性、文章作成、分析手法などについて重要なステージで論文の方向性について指導を行った。

（10）花谷　厚（全学連携教育機構・客員教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

国際協力における開発と社会―人々の暮らしと開発介入

＜授業の概要＞

国際協力は、開発途上国社会を対象として、一人当たりの所得向上や識字率向上、保健・衛生状態の改善等、特定の効果・目的を意図して実施されますが（開発介入）、その過程で必ずと言っていいほど、受入社会にさまざまな社会的影響を生みます。

開発介入の持続性を確保するためには、社会的影響をそこに住む住民の視点から理解し、住民に受け入れられる形・方法で協力するとともに、導入された活動・施設・制度が、当該地域住民と社会による自助・互助・共助や公助（公的支援・規制）により支えられている必要があります。しかし、実際にはこれらの社会的影響を理解・把握し、社会のシステムとして様々な「助」を定着させることは容易ではありません。

本演習では、国際協力および国内の社会開発（コミュニティ開発）の場を事例として、外部からの開発介入をそれを受け入れる人々の視点から捉え直し、社会的に持続可能な開発のあり方とはどのようなものかについて一緒に考えていきます。

＜活動内容＞

当ゼミは、前期 11 名、後期は途中から 10 名で実施した（開講日時：水曜日 6 時限）。

なお、後期途中から不参加の１名は休学によるもの。

前期においては、国際協力に関する概論講義から始め、開発協力プロジェクトの計画・評価手法を学習した上で、前期最後には開発介入に伴う外部者と受入れ社会との間にどのような関係が生まれるのかに関する書籍、論文の輪読を行った。

さらに国内におけるコミュニティ開発の事例として、埼玉県秩父郡横瀬町役場職員石嶋忠行氏をオンラインで招き、同町における開発課題である人口減少抑制に向けた様々な取り組みについて学んだ。

前期各回における具体的な演習内容は以下のとおり。

1. オリエンテーション
2. 国際協力の今日的意義（国際協力を巡る基礎用語解説）
3. 開発と貧困 1（開発と貧困を巡る様々な概念の定義と測定方法）
4. 開発と貧困 2（貧困に加えて格差の問題、国際開発論概念について詳説）
5. 国際協力の実施体制（日本を中心に国際機関、他二国間援助実施体制について講義）
6. プロジェクトの計画・評価手法 1（プロジェクト・サイクル・マネジメント手法概論）
7. プロジェクトの計画・評価手法 2（上記に基づく議論）
8. 開発介入と社会にかかる事例研究 1（『続入門社会開発』ケーススタディ 1 輪読と議論）
9. 開発介入と社会にかかる事例研究 2（『続入門社会開発』ケーススタディ 2 輪読と議論）
10. 開発介入と社会にかかる事例研究 3（佐藤寛「ドナーの戦略と村人の戦略」輪読と議論）
11. 開発介入と社会にかかる事例研究 4（佐藤寛「開発援助と社会学」輪読と議論）
12. 日本の ODA の発展史（日本の戦後史における ODA について講義）
13. 外部講師による講義
14. 上記振り返り

夏季休暇中課題図書：「ストーリーで学ぶ開発経済学」

後期においては、課題図書の要旨発表・議論から始め、その後、前期に外部講師を招いた横瀬町への現地見学調査を実施した。前述を踏まえて、期末成果発表会に向けて準備を行う

とともに期末成果報告書を提出した。
　後期各回における具体的演習内容は以下のとおり。

1.　後期オリエンテーション
2.　課題図書輪読 1（第 1 章、第 2 章）
3.　課題図書輪読 2（第 3 章、第 4 章）
4.　課題図書輪読 3（第 5 章、第 6 章）
5.　課題図書輪読 4（第 7 章、第 8 章、第 9 章）
6.　現地見学調査準備（調査行程、質問内容検討）
　　（現地見学調査実施）
7.　現地見学調査振り返り
8.　期末成果報告会準備 1（発表内容検討 1）
9.　期末成果報告会準備 2（発表内容検討 2）
10. 期末成果報告会準備 3（スライド案発表と議論）
11. 期末成果報告会準備 4（発表内容最終化）
12. 期末成果報告書作成 1（執筆担当分け、執筆内容議論）
13. B・C ゼミ生による海外実態調査の経験共有
14. 期末成果報告書作成 2（初稿に対するコメント、とりまとめに向けたスケジュール確認）

＜実態調査・見学調査・講演会＞
　対象演習：A（B ゼミからも 1 名参加）計 12 名＋引率 1 名
　実 施 日：2022 年 11 月 4 日(金)
　実施都市：埼玉県秩父郡
　実施場所：横瀬町役場
　実施内容：横瀬町まち経営課、エリア 898 等町内施設を訪問し、インタビューを実施
　成　　果：見学調査結果を踏まえ期末成果報告会発表・期末成果報告書作成につなげることができた。

＜成果＞
　最終的に、期末成果報告会・報告書は以下のテーマで作成・提出することができた。

「事前学習及び横瀬町現地調査から考えるコミュニティ開発」
執筆者：椙杜英太、小林多治生、南方将喜、山下怜夏、立野莉子、小石川隼、足立優海、冨士原早紀、寺田純菜、小俣俊平（計 10 名）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

国際協力における開発と社会―人々の暮らしと開発介入

＜授業の概要＞

国際協力は、開発途上国社会を対象として、一人当たりの所得向上や識字率向上、保健・衛生状態の改善等、特定の効果・目的を意図して実施されますが（開発介入）、その過程で必ずと言っていいほど、受入社会にさまざまな社会的影響を生みます。

開発介入の持続性を確保するためには、社会的影響をそこに住む住民の視点から理解し、住民に受け入れられる形・方法で協力するとともに、導入された活動・施設・制度が、当該地域住民と社会による自助・互助・共助や公助（公的支援・規制）により支えられている必要があります。しかし、実際にはこれらの社会的影響を理解・把握し、社会のシステムとして様々な「助」を定着させることは容易ではありません。

本演習では、国際協力および国内の社会開発（コミュニティ開発）の場を事例として、外部からの開発介入をそれを受け入れる人々の視点から捉え直し、社会的に持続可能な開発のあり方とはどのようなものかについて一緒に考えていきます。

＜活動内容＞

当ゼミは、前後期を通してＢゼミ５名、Ｃゼミ５名、計 10 名で実施した（開講日時：水曜日５時限）。

前期においては、社会科学的な研究手法を学ぶためのテキストとして『新・社会調査へのアプローチ』（大谷信介他編著、ミネルヴァ書房、2013 年）を輪読し、各自レポートにまとめた。引き続き、海外実態調査が行われることを前提に、カンボジアを対象とした事前学習、調査行程作成、質問票作成等を行った。

前期各回における具体的な演習内容は以下のとおり。

1. オリエンテーション
2. 「新・社会調査へのアプローチ」の読後感想発表・議論
3. 海外実態調査対象国選定、準備スケジュール作成
4. 海外実態調査準備１（事前学習１：カンボジアの地理・歴史）
5. 海外実態調査準備２（事前学習２：カンボジアの紛争）
6. 海外実態調査準備３（事前学習３：カンボジアの経済）
7. 海外実態調査準備４（事前学習４：カンボジアの教育、保健、水供給）
8. 各自研究テーマ発表と議論１
9. 同上２
10. 同上３
11. 同上４
12. 同上５
13. JICA 地域部担当職員によるオンライン講義
14. 前期振り返り

夏季休暇期間においては、引き続き海外実態調査に向けた準備を行った。実際の調査は 9 月 3 日から 11 日の８泊９日で行った。なお、参加ゼミ生は７名、引率１名である。参加しなかった学生も各自の研究テーマに沿って学習、研究を進めた。

後期は、夏季休暇期間中の海外実態調査、学習を踏まえ、期末成果発表会に向けて準備を行うとともに期末成果報告書を提出した。

後期各回における具体的演習内容は以下のとおり。

1. 後期オリエンテーション、海外実態調査振り返り
2. 期末成果報告会準備 1（報告内容構想発表 1）
3. 期末成果報告会準備 2（報告内容構想発表 2）
4. 期末成果報告会準備 3（報告内容構想発表 3）
5. 期末成果報告会準備 4（報告内容構想発表 4）
6. 期末成果報告会準備 5（報告内容構想発表 5）
7. 期末成果報告会準備 6（報告内容構想発表 6）
8. 期末成果報告会準備 7（報告内容構想発表 7）
9. 期末成果報告会準備 8（発表内容最終調整 1）
10. 期末成果報告会準備 9（発表内容最終調整 2）
11. 期末成果報告会振り返り
12. 期末成果報告書作成 1
13. A ゼミ生に対する海外実態調査結果の共有
14. 期末成果報告書作成 2

＜実態調査・見学調査・講演会＞
対象演習：B・C ゼミ（うち 7 名参加）
実 施 日：2022 年 9 月 3 日(土)～9 月 11 日（日）
実施都市：プノンペン市、シェムリアップ市（カンボジア王国）
実施場所：JICA 事務所、JICA プロジェクト、カンボジア縫製業協会、特定非営利活動法人学校を作る会・他
実施内容：JICA 関係者、各団体関係者
成　　果：調査結果を踏まえ期末成果報告会発表・期末成果報告書作成につなげることができた。

＜成果＞
最終的に、期末成果報告書は以下の 9 つの報告書の形で作成・提出することができた。

(1) ポル・ポト政権崩壊後のカンボジアにおける初等教育の復興過程
文学部東洋史学専攻　安齋 渚
(2) 『21 世紀の冷戦―ウクライナ危機が世界に与える影響―』
経済学部国際経済学科　近藤 大貴
(3) 地域社会における芸術の役割と問題
―現代アートはカンボジアに対して「エンパワメント」が可能か？
文学部人文社会学科心理学専攻　内藤 桃
(4) インクルーシブな社会の実現に向けた課題の考察
―カンボジアの女性障害者を例として―
総合政策学部国際政策文化学科　野崎 琴菜
(5) 途上国における循環型産業人材育成モデル実現上の課題について
―自動車整備士分野を例として―
法学部国際企業関係法学科　前中 翔太
(6) カンボジアにおける取り残さない支援の実現に向けて
総合政策学部国際政策文化学科　井上 美雨
(7) カンボジアにおける教員養成―10 日間のカンボジア滞在から―
法学部国際企業関係法学科　久保田 優果
(8) カンボジアの教育－農村地域における前期中等教育の男子の就学率－
文学部人文社会学科社会学専攻　清水 萌果
(9) 「カンボジアにおけるディーセント・ワーク推進に向けた現状分析」

総合政策学部国際政策文化学科　中尾 伶奈
法学部政治学科　野本 穣

Ⅳ．スポーツ・健康科学プログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

少子高齢化社会の到来のみならず、高度テクノロジー化と IT 化にともない、心身の健康の維持増進がこれまで以上に重要になっています。そして、スポーツ・健康科学の発展と普及は、21 世紀の日本社会にとって不可欠なものとなっています。今日我が国の健康問題の多くは、運動不足や情報横溢と密接にかかわるライフスタイルの変化や生活文化に起因しています。そのような中で、特にスポーツや運動活動に求められる期待値は大きく、それらを取り入れた日常生活の質的向上の取り組みが随所で見られるようになっています。近年、地域コミュニティにおけるスポーツ基盤の整備や生涯スポーツの機会の提供が進んでいます。他方、ボーダーレス化や商業化が急速に進み、レジャー・イベント・プロスポーツ・メディア等のスポーツ関連領域は巨大な市場を形成しています。

このことは同時に、スポーツを媒介とした国際交流や国際貢献の可能性がさらに大きくなっていることを意味します。

このような状況を背景に、「スポーツ・健康科学プログラム」は学際的な性格を持つスポーツ科学と健康科学を基盤とし、スポーツや健康にまつわる問題を健康・医療・文化・ビジネス・サービス・行政等との関連の中で多面的かつ総合的に考察し、この分野に寄与できる人材の育成を目的としています。

本プログラムでは、従来の体育ないしはスポーツ講義・実技という枠組みではない多様なアプローチが可能になり、総合的かつ体系的な能力が養成されます。つまり、各学部におけるそれぞれの専門科目を履修しながら、当プログラムのスポーツ・健康科学の領域の中で各人が興味をもつ分野を深めていくことができます。そこでは、本プログラム独自に開講する演習科目を通じて専門的な研究を行います。

スポーツや健康に関わる社会的ニーズの増大と多様化によって、それに対応できる資質を備えた人材が今後さらに求められます。これまで教員の養成を主眼としてきたいわゆる教育・体育系学部とは異なり、本プログラムが社会の幅広い領域にマルチスペシャリストを送り出すことの意義は大きいのです。

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A	FLP演習B	FLP演習C	総計	実施形態
1	宮崎　伸一	法	2	2	－	4	単独(A･B)
2	村井　剛	法	2	6	9	17	単独(A)合併(B･C)
3	青木　清隆	経済	－	2	3	5	合併(B･C)
4	中谷　康司	経済	－	－	1	1	単独(C)
5	市場　俊之	商	－	－	6	6	単独(C)
6	潮　清孝	商	2	－	－	2	単独(A)
7	阿部　太輔	理工	3	1	－	4	合併(A･B)
8	小峯　力	理工	－	－	4	4	単独(C)
9	小林　勉	総合政策	9	7	8	24	単独(A･B･C)
合　計			18	18	31	67	

３．プログラムスケジュール

5 月　　第 1 回部門授業担当者委員会

7 月　　第 2 回部門授業担当者委員会

11 月　　2023 年度募集に伴う選考試験
　　第 3 回部門授業担当者委員会

12 月　　学内活動（期末成果報告会）

3 月　　FLP 修了発表
　　FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

期末成果報告会

実 施 日：　2022 年 12 月 10 日(土) 11:00～

実施場所：　中央大学　多摩キャンパス 3353 教室

実施内容：　各ゼミによる年度活動報告

５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績

電通、読売広告社、読売新聞社、TBS テレビ、J リーグフォト、日刊スポーツ新聞西日本、ゴールドウィン、ランナーズ、琉球スポーツキングダム、川崎フロンターレ、楽天野球団、山

形新聞社、三菱東京UFJ銀行、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、静岡銀行、山梨中央銀行、足利銀行、きらぼし銀行、横浜銀行、清水銀行、りそなホールディングス、川崎信用金庫、大和証券、商工組合中央金庫、住友生命、三井住友海上火災保険、損害保険ジャパン、AIG損害保険、明治安田生命保険相互会社、丸紅、双日、日立製作所、富士重工、小松製作所、神戸製鋼所、大林組、奥村組、大和ハウス工業、キリンビール、サッポロビール、ヤクルト本社、ロッテ、日本アイ・ビー・エム、富士通、富士ゼロックス、SUBARU、ヤマト運輸、佐川急便、日本通運、東日本旅客鉄道、京王電鉄、東海旅客鉄道、ジェイアール東海パッセンジャーズ、近畿日本ツーリスト、JTB コーポレートセールス、星野リゾート、東京テアトル、KDDI、NTTコミュニケーションズ、東日本電信電話、リクルートコミュニケーションズ、コクヨ、テルモ、セブン‐イレブン・ジャパン、日本公文教育研究会、全国農業（協組連）、休暇村協会、東北電力、警視庁、皇宮警察本部、国家・地方公務員（厚生労働省、農林水産省、東京都庁、静岡県庁、多摩市役所など）、中央大学（法科大学院）、東京学芸大学大学院、法政大学、一橋大学、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻など

６．演習教育活動

(1)宮崎　伸一（法学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

学習及びスポーツパフォーマンスに対する自分に合った能力開発法を見つける。

＜授業の概要＞

自分に合った睡眠・栄養・運動・瞑想を毎日の生活にどのように取り込めるかを試みる。

＜活動内容＞

本年度のゼミ生は 2 名であったが、1 名は球技種目のアスリートであり、もう 1 名は身体表現に関する部活動を行っている。2 名とも運動でのパフォーマンスを向上させたい気持ちは強い。本年度は、まず、パフォーマンスを評価する方法について検討をおこなった。例えば走る、跳ぶ、泳ぐなどの競技は、計測値がそのままパフォーマンスと連動していると考えてよく、数値化がしやすい。しかし、ゼミ生たちが行っている競技は団体競技であり、勝ち負けなどの試合結果がそのまま個人のパフォーマンスを反映したものではないことが容易に想像できる。そのため、その日の練習状況を多角的に解析できるスーパーバイザーなどがいれば、そのスーパーバイザーの評価を点数化できるかもしれない。しかし、大学生・社会人チーム（1 人のゼミ生は社会人チームのなかで活動している）の日々の練習で、そのような評価をしてくれる人を見つけることは現実的ではない。そこで、ゼミ生各自が自身のパフォーマンスやそれに関連しそうな事項を指導教官とのブレーンストーミングにより決定し、それについて毎日評価を記録することとした。測定期間は 5 月下旬～10 月下旬であった。

評価項目は以下の 6 項目として、起床時に評価した。

1. 朝の目覚めは？　　1（とてもさわやか）～4（すごく眠い）
2. 朝の食欲は？　　1（とてもある）～4（全くない）
3. 身体疲労度は？　　1（最も軽い）～10（最も重い）
4. 精神疲労度は？　　1（最も軽い）～10（最も重い）
5. パフォーマンス期待度は？　　1（最も小さい）～10（最も大きい）
6. 前日のパフォーマンスは？　　1（最も悪い）～10（最も良い）

これらのうち､｢前日のパフォーマンス｣はデータ数が少ないので解析から外した｡そして、「パフォーマンス期待度」に対して、他の変数がどの程度関係しているかを回帰分析した。その結果、「パフォーマンス期待度」はこれら 4 項目でよく説明でき（有意確率 <.001)、各変数の関係の度合いは、以下のようであった。

	標準化係数	t 値	有意確率
朝の目覚め	-.342	-3.032	.003
朝の食欲	.024	.264	.793
身体疲労度	.071	.435	.665
精神疲労度	-.318	-2.05	.043

すなわち、「朝の目覚め」と「精神疲労度」が有意に「パフォーマンス期待度」に影響することが明らかとなり､｢朝の食欲｣や｢身体疲労度｣はほとんど影響しなかった｡したがって、良い睡眠をとって、気持ちの良い目覚めと精神が疲れていないことが「パフォーマンス期待度」を高めるのに重要であることが示唆された。

食事とパフォーマンスとの関係は今回はあきらかとならなかったが、4 月～6 月の毎食の内容を栄養管理アプリ「あすけん」に入力し、栄養素の過不足を調べた。その結果、鉄分、カルシウムが不足しており、飽和脂肪酸、塩分が過剰であった。これらの栄養素の働きを web

にて調査した。公益財団法人長寿科学振興財団「ミネラル成分の鉄分の働きと１日の摂取量」、2016 年（https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/eiyouso/mineral-tetsu.html）（最終閲覧：2022 年 11 月 22 日）・農林水産省「脂質による健康影響」、2020 年、(https://www.maff.go.jp/j/syouan/seisaku/trans_fat/t_eikyou/fat_eikyou.html)（最終閲覧：2022 年 11 月 29 日)その結果、不足分の鉄、カルシウムは、普段の食事にほうれん草のおひたしやヨーグルトを加えることで補えることがわかった。また、過剰分の飽和脂肪酸、塩分は外食に多く含まれていることが明らかになり、外食を控えて食事を手作りすることが必要であることがわかった。

以上、パフォーマンスの向上に関して本年度の演習では、睡眠をしっかりとることと、手作りの食事を増やす必要があることが示唆された。次年度では、自己パフォーマンス項目を改良して、よりパフォーマンスの高い競技能力が得られるような生活習慣を探索していくことも可能であろう。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

学習及びスポーツパフォーマンスを向上させるために、自分に合った、持続可能な能力開発法を見つける。

＜授業の概要＞

1 日を最高のパフォーマンスの中で過ごすために、睡眠・栄養・運動・瞑想をどのように活用していけばよいのかを、科学的なエビデンスをもとに各自が試行錯誤をしながら見つけ出していく。

＜活動内容＞

本年度は、身体の健康状態の指標の一つである、AGE s（Advanced Glycation End Products: 終末糖化産物）に着目し、睡眠・栄養が及ぼす影響を調べた。

AGE s は学生にとってはなじみのない概念であるので、AGE s の本体、生成のメカニズム、体に及ぼす影響、それの低減方法を文献や web にて検索した。その結果、以下のようにまとめられた（主に、AGE 測定推進協会（age-sokutei.jp）、2023 年 2 月 28 日閲覧、による）。

・AGE s はタンパク質と糖が非酵素反応で結合した物質である。
・血中の過剰なブドウ糖と組織にあるタンパク質が結合してできる。生成後は分解されてもとのタンパク質に戻る場合もあるが、特に糖の濃度が高い状態では不可逆的となる。
・食べ物・飲み物として外から取り込む。一部は分解・消化されるが、約 7%は排出されずに体内に蓄積される。
・体に及ぼす影響としては、①メタボリックシンドロームの悪循環②肌の弾力が失われ、シワたるみができる③血管が硬くなり、動脈硬化を起こす④骨をもろくし、骨粗鬆症を起こす⑤目の水晶体をにごらせ、白内障を起こす⑥脳内のタンパク質を変質させ、アルツハイマーを引き起こす⑦糖尿病では全身に合併症を起こす可能性が高まる。
・AGE s の低減方法は、①よく噛み、会話などを楽しみながらゆっくり食事する②野菜、肉・魚、ご飯やパンの順に食べる③腹八分目を心がける④甘いものは食後に食べる⑤食後に軽く体を動かす⑥紫外線を浴びない⑦ストレスをため込まない。

最後に挙げた 7 項目の AGE s の低減方法はいずれも常識的であり、これらの「心がけ」を行うことを前提として、本ゼミでは食事内容・活動量・睡眠時間に注目し、これらとの関係を調べた。

被験者はゼミ生 C、D の 2 人。指先の AGE 量は、FAF リーダー（シャープライフサイエンス株式会社 、日本）を用いて評価した。これは、AGE s の中には、特定の光を照射すると蛍光を放つ性質を持っているものがあり、この性質を利用して測定する方法である。まず、利き手ではない方の手の指先をアルコール綿で洗浄した後、センサーに装着して測定した。FAF は、励起波長 340nm、発光波長 440nm で測定した。FAF の測定は 2 回行ったが、2 回目と 1 回目の差が 10%を超えた場合には、もう 1 回の測定を追加し、2 回の平均を測定値とした。以下に結果を示す。

測定日	9 月 28 日*	4 月 19 日	5 月 10 日	6 月 28 日	7 月 12 日	9 月 27 日
被験者 C	0.47	0.55	0.57	0.39	0.49	0.52
被験者 D	0.45	0.55	0.46	0.39	0.46	0.55

＊2021 年、他は 2022 年

この結果は、6 月 28 日の測定値が他の測定日と比べて低くなっていると考えられる。その原因について以下の 3 点から考察した。

①食事バランスを意識したこと

毎食の内容を栄養管理アプリ「あすけん」に入力し、4 月、5 月、6 月の 11 日～12 日間の栄養素の過不足を調べた。

栄養状態測定期間	過剰	不足
4 月 19 日～4 月 30 日	飽和脂肪酸、塩分	ビタミン C、B_2、A、鉄、カルシウム
5 月 1 日～5 月 11 日	飽和脂肪酸	ビタミン C、A、鉄、カルシウム
6 月 19 日～6 月 30 日	塩分	ビタミン C、鉄

被験者 C、D とも同様の結果であった。6 月には栄養の過不足が改善しており、これが AGE s 低下につながった可能性がある。

②生活様式の移行による活動量の変化

2021 年 6 月下旬および 2022 年 6 月下旬の各 1 週間の歩数および消費カロリーを、アクチグラフ（アコーズ社）
(https://www.kicnet.co.jp/wp-content/uploads/2014/09/20220621_SS_Act_Ver2_leaflet.pdf)
(最終閲覧：2022 年 11 月 30 日)を用いて測定した。

2021 年	day1	day2	day3	day4	day5	day6	day7	平均	σ	
歩数	1509	11592	1721	3990	2618	10486	4233	5164	4154	
消費カロリー	1543	1883	1562	1657	1585	1867	1094	1599	263	
2022 年	day1	day2	day3	day4	day5	day6	day7	平均	σ	p 値**
歩数	3141	4107	3678	3407	10169	23585	12911	8714	7601	0.217
消費カロリー	1638	1795	1738	1678	1845	2437	1877	1858	269	0.069

**p 値は対応のある両年間で有意差はないものの、2022 年度の運動量は増加している傾向があり、この時期の AGE s の違いに影響している可能性がある。

③睡眠量の変化

2021 年 6 月および 2022 年 6 月の睡眠時間をアクチグラフ（アコーズ社）を用いて測定した。それぞれ、5 時間 18 分および 5 時間 32 分であり、差は認められなかった。

以上より、ゼミ生の自験に基づくと、AGE s の値を減少させるには、「食べる種類、順番、時間」「適量活動をすること」を意識することが大事である、といえよう。

来年度は、この知見に基づき、健康と、日常生活に取り入れやすい活動との関係についてさらに精査を進めていく予定である。

(2)村井　剛（法学部・准教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

＜授業の概要＞

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。

中央大学のスポーツ振興の一環と競技支援の役割を担うことも狙って、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討と、モチベーションビデオの作成を行った。

＜活動内容＞

メインの活動として、春学期はスポーツに関する心理、認知的な側面に関する文献の情報収集や実態の把握を中心に展開した。

秋学期に入り、B･C 生がメインに活動している調査、研究対象の見学、手伝い、データ収集、データ分析を担う形で作業も一部担った。

B・C 生と共に、箱根駅伝予選会、箱根駅伝本戦も観戦し、身近に体育連盟を感じつつ、ゼミを通して部へどのように貢献していくかを考えるきっかけを得た。

特にモチベーションビデオ作製過程においては、アンケート調査によってニーズをヒアリングしたり、競技スポーツ現場との密なつながりも形作ることができたため、B 生以降の活動への動機付けとして、またゼミ活動を自分ごととして取り組むための責任感も生むきっかけづくりのできた1年間であったと感じている。

見学調査･実態調査においては上級生との合同合宿も実現し、学年を超えた交流と、強固な連携体制の構築ができた。

活動や成果の詳細は FLP 演習論文として別途まとめた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 9 月 2 日(金)～9 月 3 日(土)
実施都市：山形県上山市
実施場所：蔵王坊平アスリートヴィレッジ
実施内容：駅伝モチベーションビデオ作製素材の収集
成　　果：三大駅伝に向けた駅伝モチベーションビデオ作製のため、合宿時の映像素材収集のため、合宿地にて撮影を実施した。後のビデオ提供時に素材を盛り込むことができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 9 月 6 日(火)～9 月 8 日(木)
実施都市：沖縄県石垣市
実施場所：石垣島
実施内容：マリンスポーツ体験が心身に及ぼす影響について
成　　果：台風の影響で調査予定が変更となり、一定の効果測定のみに限定されたが、コロナで実施できていなかった合宿の実現によって、ゼミの連帯感や、調査の実際手順についてシミュレーションを行うことができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2023 年 2 月 20 日(月)～2 月 22 日(水)
実施都市：新潟県南魚沼市
実施場所：石打丸山スキー場
実施内容：スノースポーツ活動時の感情分析と視線・視野に関する調査

成　　果：雨混じりの降雪が続き、機器を使用した調査に故障リスクの不安を抱える状況であったが、最終日は特に天候にも恵まれ、データ採取も順調に行うことができた。

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

＜授業の概要＞

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ(モチベーション)、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。スポーツ愛好者、競技者、指導者、それぞれの立場からスポーツ心理を学んでいけるよう授業展開は配慮した。また、中央大学のスポーツ振興を目的として、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討と、箱根駅伝支援の一環でモチベーションビデオを作製した。

＜活動内容＞

メイン活動として、硬式野球部の観客動員に関する振興事業の試みと、体育連盟の陸上駅伝ブロックのモチベーションビデオ作製支援事業を実施した。

活動や成果の詳細は FLP 演習論文として別途まとめた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 9 月 2 日(金)～9 月 3 日(土)
実施都市：山形県上山市
実施場所：蔵王坊平アスリートヴィレッジ
実施内容：駅伝モチベーションビデオ作製素材の収集
成　　果：三大駅伝に向けた駅伝モチベーションビデオ作製のため、合宿時の映像素材収集のため、合宿地にて撮影を実施した。後のビデオ提供時に素材を盛り込むことができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 9 月 6 日(火)～9 月 8 日(木)
実施都市：沖縄県石垣市
実施場所：石垣島
実施内容：マリンスポーツ体験が心身に及ぼす影響について
成　　果：台風の影響で調査予定が変更となり、一定の効果測定のみに限定されたが、コロナで実施できていなかった合宿の実現によって、ゼミの連帯感や、調査の実際手順についてシミュレーションを行うことができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2023 年 2 月 20 日(月)～2 月 22 日(水)
実施都市：新潟県南魚沼市
実施場所：石打丸山スキー場
実施内容：スノースポーツ活動時の感情分析と視線・視野に関する調査
成　　果：雨混じりの降雪が続き、機器を使用した調査に故障リスクの不安を抱える状況であったが、最終日は特に天候にも恵まれ、データ採取も順調に行うことができた。

(3)青木　清隆（経済学部・准教授）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

日本における競技スポーツ文化を考える

＜授業の概要＞

【B 生】

演習 A からの学習テーマを継続し、「日本における競技スポーツ文化を考える」ことを内容とした授業を展開する。演習 A ではスポーツ文化に対する共通の基礎学習を中心に行ってきたが、演習 B ではゼミ生一人ひとりに競技スポーツ文化に関する学習課題を設定し、それぞれが文献調査やフィールドワークを通して学習を深めていくことが中心となる。調査した果実はプレゼンテーションにて報告することとし、ディスカッションを通してゼミ生全員が日本における競技スポーツ文化を広く学習することを目指していきたい。

なお授業の実施においては、演習 B と演習 C の合同形式で展開する。

【C 生】

演習 A から継続して学習を重ねてきた、「日本における競技スポーツ文化を考える」ということをテーマとして発展的な授業を展開する。演習 B では受講生一人ひとりが競技スポーツ文化に関する学習課題を設定し、それに対する文献調査やフィールドワークを通して学習を深めながら現状把握に努めてきたが、演習 C では問題点や課題あるいは今後の取り組みについての考察を深く行い、それぞれが設定したテーマに対する私論を確立できることを目指して展開していきたい。

なお授業は、演習 B と演習 C の合同形式で実施する。

＜活動内容＞

2022 年度の青木ゼミは演習 B と演習 C を開講したが、ともにゼミ生の数が少ないことや（演習 B は 2 名、演習 C は 3 名）、質の違いはあるもののどちらも演習 C での最終的な学習成果報告としている個別の「提言書」の調査・作成に関わる学習がメインであることなどから、演習 B と C の単独授業ではなく合同形式で授業を実施した。学年を越えてゼミ生のコミュニケーションが深まったこと、ゼミ生同士の情報交換や情報共有が活発に行われたこと、ゼミ生の学習意欲の向上や学習内容の質的向上が見られ、合同形式授業の成果が充分に確認された。2022 年度の授業は全て面接で実施した。しかし、コロナウィルス感染対策の観点から、前期・後期ともにゼミ単位での学外実態調査・見学調査・講演会を含めたイベントへの参加などは全て実施を見送り、ゼミ生の個別対応とした。具体的な「演習 B・C」の活動（学習）内容は、以下のとおりである。

［前期］

演習 B のゼミ生は、「提言書」作成に向けた個別テーマを幅広い視点から模索すること、演習 C のゼミ生は、3 年生の時点で見据えていた「提言書」の方向性や骨格・内容の見直しと、作成に向けた具体的な調査が個別の学習の中心であった。一方で、「提言書」の作成にあたって、ゼミ生達が幅広い文化的視点から分析・考察ができるようになるために、ゼミ生達の研究ジャンルにあわせて以下のような内容についての全体学習も実施した。

①B リーグの飛躍のために取り組むべき新たな課題

②NPB の飛躍のために取り組むべき新たな課題

③NPB の球団経営と球団運営の問題点と課題

④女子野球の飛躍のために取り組むべき課題

⑤プロスポーツアスリートの生活保障に関する問題点と課題

⑥プロスポーツにおけるファン獲得に関する課題

⑦日本独自のスポーツ受容文化の現状と問題点

［後期］

演習Bのゼミ生は、「提言書」の方向性の確立と具体的な調査・分析を行うこと、演習Cのゼミ生は、調査・分析・考察を深めながら「提言書」を作成することが学習の中心であった。それぞれ途中経過をプレゼンテーションし、全員でディスカッションをしながら質の向上を目指した。

その結果、演習Bのゼミ生の「提言書」作成に向けた研究テーマは、最終的に以下のような方向性で終了した。

ゼミ生Ⓐ➪ NPBのファン拡大のための新たな方策 ～千葉ロッテマリーンズの球団変革を中心として～

ゼミ生Ⓑ➪ メディアや地域格差から見た日本の競技スポーツにおけるジェンダーギャップの現状や原因および改善策

演習Cのゼミ生は、以下のテーマと内容で「提言書」を作成した。

ゼミ生Ⓒ➪ Bリーグのメジャー化
（メディアの現状と改善の提言、ファン拡大への提言、チーム分布・地区編成・チーム数への提言、アリーナへの提言、チーム経営への提言、選手の環境改善への提言、バスケットボールの競技人口や競技力などの人材育成に対する提言）

ゼミ生Ⓓ➪ NPB に求められる変革
（日本の競技スポーツ文化の発展においてNPBが果たすべき役割、女子を含めた野球人口の拡大など日本の野球振興活動に対する提言、プロ野球選手の身分保障への提言、NPBのスポーツトレーナー・審判員の身分保障への提言、ファンや観客動員数の拡大に対する提言）

ゼミ生Ⓔ➪ 日本サッカー発展の可能性は、「SNS発信」にあり
（SNS分析による海外アスリートと日本人アスリートの比較・現状分析、日本人選手のInstagram利用状況とそこから見える特性、海外選手の特性と日本人選手との比較、フォロワーランキングからみる日本と世界、日本サッカーの進化を目指した「観光大使タイプ」・「自己開示タイプ」・「アーティストタイプ」よるSNS発信に対する提言）

(4)中谷　康司（経済学部・准教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

身体感（観）と身体論

＜授業の概要＞

運動を成立させるためには、体を動かすための身体能力が重要です。しかし、一方で同じくらい外界や身体の状況を捉えるための感覚能力も重要になってきます。そのような身体感覚、身体感（観）といったものは自分たちの受けた教育・社会の考え方に知らず知らずのうちに左右されており、その影響は軽視できません。本演習では、運動について感覚を重視した視点から検討していきます。実技を通して身体感覚を再検討するとともに、運動に必要なシステムについて医学的な知識を学び、また身体についての捉え方（考え方）の基礎になっている思想的背景も検討していきます。担当教員の専門分野が東洋的な実技に立脚しているため、皆さんの地盤である東洋（日本を含む）を中心に検討を進めますが、西洋と東洋との異同を探ることを通して、各自の身体感（観）を浮き彫りにできると良いと思います。

本年度は、測定、調査を通して、興味ある事象を客観的なデータで立証することを通して、自分たちの心身についての理解を深めます。

＜活動内容＞

昨年度までの実験実習をベースに以下の視点で実際の競技場面への適用・選手の感覚について分析・検討・考察を実施した。

前期：実際の競技場面におけるメンタル状況とパフォーマンスおよび介入方法

後期：競技者へのヒアリングで浮上した選手の「バネ」という感覚と年齢・種目特性・競技限界（選手寿命）との関連性

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C

実 施 日：2022 年 5 月 31 日(火)

講 演 者：伴　元裕 氏（OWN PEAK）

演　　題：スポーツにおけるメンタルトレーニングの実際

実施施設：中央大学　多摩キャンパス 7611 教室

実施内容：OWN PEAK 代表・メンタルコーチ/コンサルタントによる特別レクチャー（講演）

成　　果：米国デンバー大学でスポーツ&パフォーマンス心理学の研究に携わり、以降、プロ選手のメンタルサポートやチーム運営のコンサルティングなどの現場で活躍されてきた講演者から、現場におけるメンタルトレーニングの実際をお話しいただいたことで、教科書からは得られない実際の場面での適用方法などを学ぶことが出来た。

(5)市場　俊之（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

スポーツを「みる」

＜授業の概要＞

スポーツを「みる」の「みる」には、「見・観・鑑・診・看」などを当てはめることができます。スポーツを多彩に、多角的に、かつ階層的に取り扱います。2 つのテーマを想定しています。ひとつは、「オリンピックとパラリンピック」、「ワールドカップ（サッカー)」などの大きなスポーツ・イヴェントを「みる」です。歴史的な背景を把握し、眼前のイヴェントの様態を考察します。中央大学とオリ・パラほかとの関りも調査・検討します。もうひとつは、スポーツ活動に不可欠な「人間の運動」を「みる」です。人間とはどんな存在なのかから始めます。人間の運動とは何か、動きを教える・学ぶ・伝承することを俎上に乗せます。例えば、我々がスポーツや身体活動を行い、その体験・経験がどんな機能ないしは意味を有するのかなどについて考えます。

ゼミ活動は、おもに文献・資料の渉猟と講読から始めます。適期に見学調査ないしは実態調査などのフィールドワークを行います。最終的に報告書を作成します。

＜活動内容＞

新型コロナ感染拡大が継続する中でも、「リアル対面」によるゼミ活動が可能となった。個別テーマ、文献購読（『子どもを壊す部活トレ』および『東京オリンピック始末記』)、共同テーマ（3 つのスポーツミュージアム見学、トランポリンを通じて「カンとコツ」を考える、「3 度の東京オリンピックを基軸に考える競技・種目の変遷」、オリンピックにおけるパラアスリートー義足ジムナスト George Eyserー）をとり挙げた。

上記の活動を通じ、人間と運動・スポーツ関係性ならびにスポーツや身体活動の体験・経験の持つ機能ないしは意味などについての認識が深まった。

＜見学調査＞

実 施 日：2022 年 4 月 28 日(木)
実施都市：東京都新宿区
実施場所：早稲田スポーツミュージアム

実 施 日：2022 年 7 月 23 日(土)
実施都市：愛知県名古屋市
実施場所：中京大学スポーツミュージアム・中京大学アイスアリーナオーロラリンク

実 施 日：2022 年 10 月 15 日(土)
実施都市：東京都新宿区
実施場所：日本オリンピックミュージアム

成　　果：歴史性を基盤とする文化としてのスポーツにアプローチするために、上記 3 館を訪問した。3 館それぞれの趣旨・意図が展示に反映されていることが理解できた。我々の今現在のスポーツは当事者にとって独自に存在するものであるように映る。しかしながら、社会そのものが歴史性を伴うようにスポーツも個人の枠を超越する。濃淡・強弱ありながらも先達と我々の関連が存在し、スポーツも我々個人も今日に至る歴史的経緯の中にあることを認識・共感する契機となった。

(6)潮　清孝（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

剣道を通じたビジネス及び海外文化の理解

＜授業の概要＞

剣道を通じて日本文化の海外普及や海外でのビジネスの最前線において活躍されている個人や組織の方をオンラインで定期的にゲストにお招きし、お話を伺う。

マイナー競技ならではの仲間意識を入り口とすることで、他者と異なるコミュニケーションを図ることが期待される。また、当該競技の中で得られる知識や経験を、どのようにビジネスなどの分野で生かすことができるか、といった点などについても、ゲストなどの体験談を通じて学習する。

なお、商学部課題演習「マイナー競技（主に剣道）を通じたビジネス及び海外文化の理解」と連携して授業を実施します。

＜活動内容＞

商学部課題演習とも協力しながら、剣道を通じた事業活動や文化普及を行っている方々をお呼びし、お話を伺った。今年度は、パルマ大学の学生らを学内に迎え、剣道体験会を実施するなど、受講者自ら文化交流も行った。今年度はコロナの影響で行えなかったが、次年度以降は、実際に海外に足を運んで、剣道を通じた文化交流や海外文化の理解に関する活動も行う予定である。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A
実 施 日：2022 年 7 月 11 日(月)
講 演 者：秋田　利通 氏（スリー・エム・ジャパン株式会社）
演　　題：剣道を通じた文化交流とビジネス
実施施設：中央大学　多摩キャンパス 5610 教室
実施内容：剣道を通じて、学生時代から様々な国を訪問し、現地の方々と交流を進めてきた秋田様をお呼びし、主に講義形式でお話を伺った。
また、質疑応答も活発に行われた。
成　　果：大学卒業後から、複数の外資系企業において長年の経験を持つ秋田様から、日本の伝統文化でもある剣道の魅力を伝えて頂いた。特に、仕事以外の側面から、現地の方々と交流を進める手段として、剣道が非常に有効であること、また、学生時代においても、自分の将来のキャリアを描くうえで、海外を含めた様々な価値観に接することが重要であることなど、学生にとって非常に有意義なアドバイスを頂くことができた。

対象演習：A
実 施 日：2022 年 11 月 14 日(月)
講 演 者：園田　高志 氏（プロダクション HIT）
演　　題：剣道の普及と職業化
実施施設：中央大学　多摩キャンパス 5610 教室
実施内容：剣道を題材として、お笑い芸人活動や YouTuber として活躍されている園田様をお招きし、主に講義形式で、実体験などをもとに、「剣道の普及と職業化」をテーマにお話を伺った。学生との質疑応答も活発に行われた。
成　　果：剣道は、文化や伝統が重んじられる競技である分、それをお笑いの対象として扱う事の難しさに加え、その意義などについても理解することができた。文化・伝統を重視するあまり、剣道人口の減少が進んでいる現状に対して、それを活か

しながら、現代の若者たちにも受け入れられるような形で、剣道の魅力を伝えていくことの重要性を理解することができた。

(7)阿部　太輔（理工学部・助教）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

パフォーマンスの測定・分析

＜授業の概要＞

【A 生】

前期はスポーツ科学の基礎習得を目的とし、健康と運動の関係や、生涯スポーツ、競技スポーツなどそれぞれの観点からの課題について、討論を行う。

後期は履修学生が各々興味を持つスポーツを中心に、文献をもちいてどのような研究が行われているのかを理解し、実験や分析についての基礎を学ぶとともに、実際に実験研究を体験できるように進めていく。

【B 生】

履修学生が各々興味を持つスポーツを中心に、文献をもちいてどのような研究が行われているのかを理解し、実験や分析の方法について知識を深める。

実際に研究計画を作成し、被験者に依頼する際の倫理的側面の理解とともに、正しい実験方法や分析方法を用いてデータを収集し、プレゼンテーションおよび報告書としてまとめることができるようになる。

＜活動内容＞

阿部ゼミは、ゼミ学生それぞれの興味をもったスポーツ種目について、そのパフォーマンスを上げるためのアプローチや、スポーツ種目において発生する問題点に対して調査することで、競技スポーツの競技力向上に繋げる実験研究に取り組んだ。

A 生では、スポーツにおけるエネルギー回路等の基礎的な知識の獲得やこれまでに取り組まれているバイオメカニクスや運動生理学における論文を題材に、研究の基礎から学んだ。

個別に取り組んだ内容

「アスリートにおけるサプリメントの摂取に対する意識調査」

アスリートがサプリメントをどのように活用しているのか、摂取状況、摂取しているサプリメントへの理解度、ドーピングに対する意識等、複数項目に渡ってデータをとり、傾向などの調査を継続している。

「チアリーディングにおける無理な減量が及ぼす危険性の調査」

チアリーディングのポジションによっては、無理な減量を強いられることが見受けられる現状がある。まずは、体組成で各ポジションの傾向を出し、体重等の適正な指標をつくることに取り組んでいる。

「競泳選手におけるターンアウトの泳速と跳躍力の関係について」

競泳におけるターンアウトの泳速は競技結果に大きく影響を与えることから、跳躍力とターンアウト時の泳速を計測し、その関連を明らかにすることで競技力向上への 1 要因として提供できるデータをとることを目的として進めている。

B 生では、昨年からの研究を継続し、より深い内容までテーマを考え、研究方法、分析方法等、研究計画書の作成から実験、分析まで自身で取り組んだ。

個別に取り組んだ内容

「競泳選手における身体能力の高さは競技力に影響しているのか」

水中競技である競泳において、陸上での運動能力の高さは競技力にどれほど影響を与えているのかについて、スポーツテストでおこなわれる種目を中心に運動能力を分析し、競技力との相関関係について分析した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞
対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 6 月 18 日(土)
実施都市：神奈川県横浜市都筑区
実施内容：パラ水泳日本選手権の観戦
成　　果：パラスポーツを実際に観戦することで、一つの物事に対する向き合い方、多様性のあり方、障がいを持つアスリートの身体の使い方や身体能力の高さなど、それぞれの人生観に対しても多くを感じ取ってもらうことができた。

(8)小峯　力（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

1）大学スポーツ振興（Sport for All）

2）スポーツと生命教育（Lifesaving）

＜授業の概要＞

大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。 また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

＜活動内容＞

小峯ゼミは、昨年度に実施した「“おもいやり”プロジェクト」をもとに、「おもいやりのある社会をいかに創生するか」について議論を行うことを大きな目標として設定し、活動を行った。前期には、グループディスカッションにおいて救急対応における課題を抽出した。疫学的研究において心停止の傷病者の性別の違いにより、バイスタンダーの心肺蘇生法の実施率が異なることが分かった。後期では下記の 2 点について調査を実施することとなった。①心肺蘇生法の男女格差について、②男女格差を是正する対策の検討。

後期には、本学学生を中心に 264 名を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は、「異性に対して心肺蘇生法を実施することを躊躇するか？」についてであった。調査の結果、男性が傷病者の場合、女性のバイスタンダーが心肺蘇生法の実施を躊躇する割合は、23%であったのに対し、女性の傷病者に対して、男性のバイスタンダーが躊躇する割合は、54%であった(図 1,2)。以上のことから男性から女性に対して心肺蘇生法を実施することはその反対と比べて高く、この理由として救急処置の際に女性の肌を露出させ、直接触れることによる周囲からの視線やセクハラ問題を危惧していることが考えられる。

上記の問題を解決するための対策について検討を行った。文献調査によって公益財団法人日本 AED 財団学生チームが「まもるまる」（図 3）を開発していることを発見した。これは、体を簡単に覆うことができるシートであり、倒れた人の体が露出されるのを防いだまま、迅速に AED の使用・胸骨圧迫を行うことができるものであり、AED ボックス内に収納することができる。そこで、「まもるまる」の認知度について質問紙調査を行った。その結果、「まもるまる」を知っていると答えた割合は 12%であった(図 4)。また「まもるまる」の利用によって救命処置の抵抗感が軽減されるかという質問に対して、88%が「はい」と回答した(図 5)。以上の結果から、心肺蘇生法の実施に関わる男女格差を軽減するための対策の考案および認知度向上のための方策が必要であると考えられる。

来年度には、心肺蘇生法実施に対する男女格差を軽減する方策の検討および、より多くの人に広めていくにはどうしていくべきかの検討を通じ、救急救命（生命尊厳）とスポーツ振興を普及・啓発していく所存である。

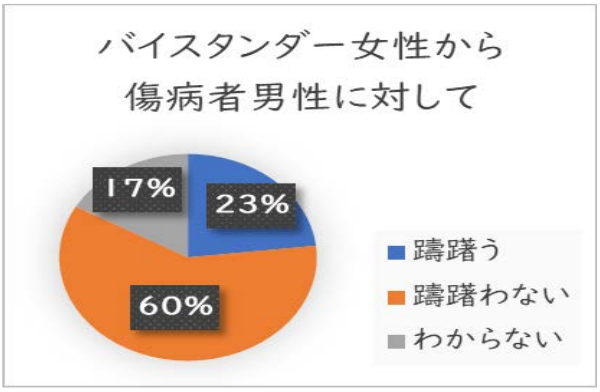


図１．男性傷病者に対して女性が救命処置を行う際の躊躇

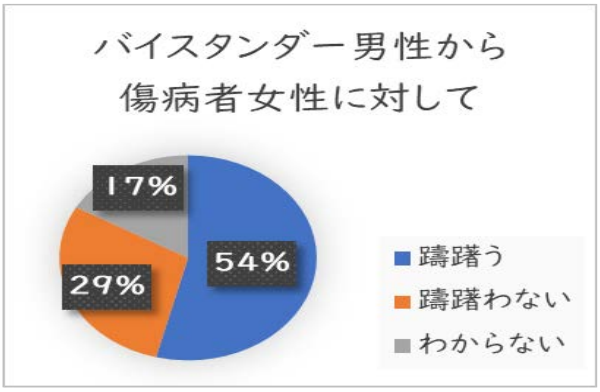


図２．女性傷病者に対して男性が救命処置を行う際の躊躇

図３．まもるまるの使用例
（女性への AED 使用率を上げる「まもるまる」プロジェクトホームページより
https://readyfor.jp/projects/mamorumaru-aed）

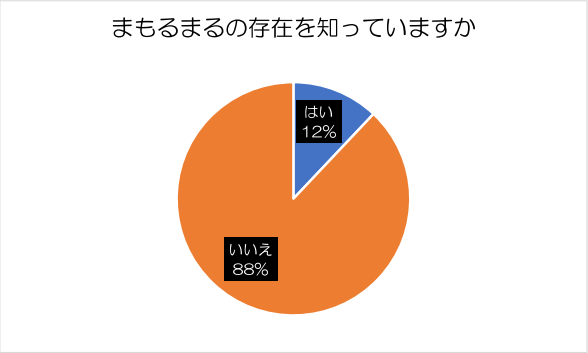


図４．まもるまるの認知度

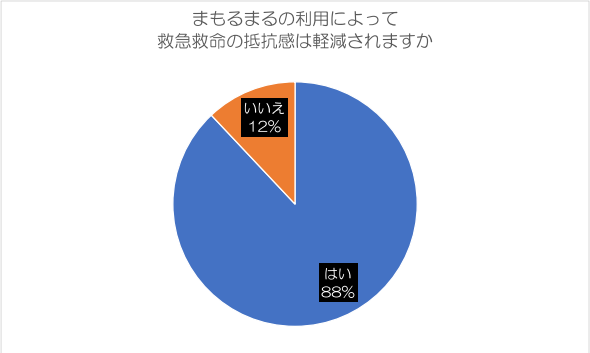


図５．まもるまるの使用による救命処置実施への抵抗感の軽減

(9)小林　勉（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

FLP 小林ゼミ演習 A では、主に①八王子市へ向けた政策提言、②J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポート、③静岡県河津町にて開催した「防災運動会」のイベントのマネジメントを行った。

まず「①八王子市へ向けた政策提言」では、9 月に行った八王子市役所へのヒアリング調査から得た情報をもとに、「外国人留学生の交流機会への参加促進」をテーマとして、スポーツを活用した外国人とのソーシャルインクルージョンを推進する政策提言を行なった。八王子市の留学生人口は近年増加傾向にある一方で、「情報弱者」の存在や「差別・偏見」に悩まされている留学生が多くいる実態を明らかにした上で、接触仮説に基づいたスポーツを用いた交流イベントの活用可能性について政策提言を行った。

また「②J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポート」では、Ｊリーグクラブのブラウブリッツ秋田と本ゼミ 9 が年間にわたり実施してきた共同プロジェクトであり、3 年ぶりに現地に赴いてホームゲームのプロデュースを行なった（一昨年と昨年はオンラインによる開催）。プロジェクトの内容は、ウォーキングサッカー大会開催、解説シートの実施、「SDGs アクティブラーニング」をテーマとした授業企画、VR 企画、マッチデープログラムの作成、福たす T シャツの制作等である。演習 A では、それらコンテンツの運営サポートを行った。

そして「③静岡県河津町にて開催した「防災運動会」のイベントのマネジメント」では、静岡県河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指す NPO 法人の「あおぞらビレッジ」と連携しながら、防災運動会を運営した。初対面でもコミュニケーションを促進できる「じゃんけん列車」、火災時の煙を回避するために低姿勢での移動の重要性を啓発する「キャタピラリレー」、ボールを負傷者に見立て、迅速に運搬する意識を醸成する「担架リレー」、防災知識を高める「○×クイズ」などを企画立案した。一連のマネジメントを通じて、河津町の小学生や幼稚園生、保護者、シニアクラブの方々と 70 名を超える参加者らと、身体を動かしながら火災や地震発生時の対応力を高める活動を行なった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2022 年 9 月 21 日(水)～9 月 27 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Ｊリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行なった。具体的には、老若男女を問わず参加できる「ウォーキングサッカー大会」の運営支援、ビギナーズを対象とした「元Ｊリーガーによる解説シート」

の実施、現役Ｊリーガーの選手目線を疑似体験できる「VR 体験」の企画補助、マッチデープログラムの作成等の活動を行った。

成　　果：Ｊリーグクラブと連携し、プロリーグの公式戦をプロデュースすることで、一つの公式戦が運営されるのに、いかに多くのアクターが連携協力しているのかを「実際に体験」することができ、そうしたマネジメントの難しさを体感することができた。また、多様なアクターの力が結集されることで構築されるプロスポーツの空間だからこそ可能となる、スポーツをひとつの「ツール」とした地域貢献の活用可能性について検討することができた。

対象演習：A・C
実 施 日：2023 年 2 月 18 日(土)～2 月 19 日(日)
実施都市：静岡県賀茂郡河津町
実施場所：NPO 法人あおぞらビレッジ
実施内容：河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指す NPO 法人の「あおぞらビレッジ」と連携しながら防災運動会を企画し、身体を動かしながら火災や地震発生時の対応力を高める活動を行なった。
成　　果：河津町の小学生や幼稚園生、保護者、シニアクラブの方々と 70 名を超える参加者らと「防災運動会」を実施することで、防災知識を学ぶことや多世代交流のきっかけとして、新たなスポーツの活用可能性を実体験することができ、「地域とスポーツ」の関係について多角的な視点から検討できるようになった。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、Ｊリーグクラブとの共同プロジェクトである「福+プロジェクト」の企画運営を中心に以下のような活動を行った。

① ブラウブリッツ秋田の選手と連携したスポーツ VR 体験会の実施

内　容：スタジアムに訪れる観客を対象に、あたかも自分が別空間にいるかのような感覚を創出できる VR 技術を活用したイベントを実施した。最新の VR 技術を駆使しながらプロサッカー選手の技術や動作を体験できる仮想現実を作り出し、プロサッカー選手が見ているフィールド上の光景を一般のサポーター達に体感してもらうことで、新しいプロスポーツの楽しみ方を創出した。

② ウォーキングサッカー大会の運営

内　容：高齢化率が全国で最も高い秋田での健康増進、コミュニティ形成の場の構築を目的とし、ブラウブリッツ秋田のトレーナーの協力のもと、ウォーキングサッカー大会をブラウブリッツ秋田のスタジアムにて実施した。また大会前には、参加者の安全確保のため、株式会社 e-MOTIONs・佐藤星亜氏を招いてウォーキング教室を開講し、参加者の不慮の事故に対する防止策も講じた。

③ 元Ｊリーガーによる解説シートの設置

内　容：前山恭平氏(ブラウブリッツ秋田)・佐藤義則氏（秋田コミュニティー放送）を招いて、サッカーのルールや基礎知識など、観戦初心者でも楽しめるようなコンテンツを解説形式で提供した。

④ SDGs アクティブラーニング（「スポーツ×SDGs」という新たな切り口を中学生に提供）

内　容：秋田市立山王中学校の 2 年生 170 名を対象に、SDGs をはじめとした社会課題に対して「私には何ができるか？」をテーマとして SDGs アクティブラーニングを開講した（8 月 31 日実施）。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B

実 施 日：2022 年 4 月 2 日(土)～4 月 5 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ブラウブリッツ秋田のスタッフと顔合わせを行った。また、試合運営ボラン

ティアとして、試合準備、運営に携わった。
成　　果: 現地に赴くことで、社員の方との円滑なコミュニケーションを図ることができ、企画立案に際して、スタジアムの立地や規模感等を把握することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 6 月 13 日(月)
講 演 者：岸　卓巨 氏（一般社団法人 A-GOAL）
演　　題：SDGｓ×スポーツの観点から見た福たすプロジェクト
実施施設：中央大学　多摩キャンパス 11504 教室
実施内容：「一般社団法人 A-GOAL」の代表である岸卓巨氏を講師として招き、アフリカの地域スポーツクラブの実情や現地で行っている社会課題解決プロジェクトに関する情報を共有してもらった。
成　　果：アフリカの社会課題や地域スポーツクラブでの取り組みを共有できたことで、秋田での社会貢献を目指す福たすプロジェクトの企画を検討する上での重要な論点や貴重な視点について習得することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 6 月 30 日(木)～7 月 2 日(土)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム
実施内容：4 月 2 日～4 月 5 日に実施した見学調査をもとに、今年度のプロジェクト企画について意見交換をし、ブラウブリッツ秋田の社員らと議論を行った。また、実際の公式戦に試合運営ボランティアとして参加し、試合準備、運営に協力した。
成　　果：現地に赴いてプロクラブを運営しているスタッフらと直接的に議論できたことで、企画の詳細部分まで意見交換することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 7 月 16 日(土)～7 月 17 日(日)
実施都市：静岡県沼津市
実施場所：中央公園
実施内容：沼津市にて開催された「一般社団法人 A-GOAL」の実践活動の場において、VR 体験会トライアルを行った。
成　　果：VR 視聴における安全性の確保の方法や VR コンテンツとして必要な編集上の工夫など多くの問題点を浮き彫りにできたことで、今年度に実施予定の新たなコンテンツに対して多くの課題を整理することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 8 月 1 日(月)～8 月 5 日(金)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ブラウブリッツ秋田事務所・他
実施内容：撮影に向けた準備と撮影場所の見学、イベント当日の運営準備を行うため、会場となるスタジアム周辺の視察を行った。
成　　果：撮影およびイベントを行う場所に実際に足を運び視察することで、円滑にプロジェクトを運営するための準備をする上で必要な情報を得ることができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 8 月 28 日(日)～8 月 29 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム

実施内容：8 月 31 日に実施する SDGs アクティブラーニングの準備およびプロジェクト資金を獲得するため、関係機関に対してスポンサーシップ広報活動を行った。
成　　果：SDGs アクティブラーニングで登壇したブラウブリッツ秋田の安田選手と詳細な打ち合わせやリハーサルを実施できたため、円滑に SDGs アクティブラーニングを実施するのに結びつけることができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 9 月 8 日(木)～9 月 11 日(日)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム
実施内容：ウォーキングサッカー大会運営にあたり、運営に必要な備品の準備および運営サポート依頼のためブラウブリッツ秋田スクールコーチのもとを表敬訪問を行なった。また、大会の PR 活動のため、スタジアムに来訪者を対象に、広報チラシを配布した。
成　　果：イベント当日に必要となる備品の確保と大会運営をサポートをしてもらう協力者らと十分な事前打ち合わせをすることができた。また、チラシ配布による集客活動を行えたことで、大会当日には目標参加者数を上回ることに繋げることができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 9 月 21 日(水)～9 月 27 日(火)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム
実施内容：9 月 25 日の福たすプロジェクト当日に向けて、ブラウブリッツ秋田の社員の方と最終打ち合わせや当日準備を行った。当日は、A 生、C 生と連携し、試合運営やイベントを実施した。
成　　果：試合当日の多数の来場者に対して、各企画を円滑に運営することができた。今年の一連のプロジェクト活動を通して、スポーツによる地域活性化の可能性について、多角的に検討することにつなげることができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 9 月 25 日(日)
講 演 者：佐藤　星亜 氏（株式会社 e-MOTIONs）
演　　題：中高年に配慮した運動教室のマネジメント方法
実施都市：秋田県秋田市
実施施設：八橋運動公園
実施内容：大会参加者の安全確保のため、株式会社 e-MOTIONs・佐藤星亜氏を招いて中高年に配慮した運動教室のマネジメント方法について助言してもらい、不慮の事故に対する防止策について検討した。
成　　果：高齢化率が全国で最も高い秋田での健康増進、コミュニティ形成の場の構築を目的としたウォーキングサッカー大会の開催に向けて、大会当日における緊急対応に関する十分な事前準備をすることができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 10 月 22 日(土)～10 月 24 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：社会福祉法人北杜・障がい者支援施設ほくと
実施内容：VR が障害の有無に関わらず、多様な主体がスポーツを享受できる方法を探り同時にリハビリとしての活用を模索するため、障がい者支援施設にて VR 体験会を

実施した。

成　　果：VR の効用を十分に機能させることはできなかったものの、障がい者らとの交流体験を通し、障がい者に対するスポーツの活用可能性や運営上の課題を整理することができた。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきている。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのだろうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していく。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証する。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標である。

＜活動内容＞

小林ゼミ演習Ｃでは、演習Ａ・Ｂで展開される①秋田Ｊリーグクラブとの連携プロジェクト、②静岡県河津町にて開催した「防災運動会」のイベントの研究および現地での運営サポートを行った。

①は、Ｊリーグクラブのブラウブリッツ秋田と本ゼミが９年間にわたり実施してきた共同プロジェクトである。3年ぶりに秋田県現地にての開催が実現し、演習Ｂや演習Ａにおいて企画立案された６つのコンテンツに対して、その準備段階から当日の運営に至るまで、これまでのプロジェクトの実践経験をふまえつつ（事業立案から実施までのプロジェクト管理の方法や実際のスタジアムにおける人員誘導の方法など）、後輩ゼミ生らに対して協力支援活動を行った。

②は、静岡県河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指すNPO法人「あおぞらビレッジ」と共同で行った防災運動会である。演習Ａの活動で企画立案された４つのイベントコンテンツに対して、運営サポートスタッフとして参加をすることで当日のイベント運営を円滑にし、加えてイベントに集まった河津町内外の小学生・幼稚園生・シニアクラブの方々計 70 名の人々と交流しながら、防災意識を高める実践的活動を行なった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：Ａ・Ｂ・Ｃ

実 施 日：2022年９月21日(水)～９月27日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Ｊリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行った。具体的には、老若男女を問わず参加できる「ウォーキングサッカー大会」の運営支援、ビギナーズを対象とした「元Ｊリーガーによる解説シート」の実施、現役Ｊリーガーの選手目線を疑似体験できる「VR体験」の企画補助、マッチデープログラムの作成等の活動である。

成　　果：Ｊリーグクラブと連携し、プロリーグの公式戦をプロデュースすることで、一つの公式戦が運営されるのに、いかに多くのアクターが連携協力しているのかを「実際に体験」することができ、そうしたマネジメントの難しさを体感することができた。また、多様なアクターの力が結集されることで構築されるプロスポーツの空間だからこそ可能となる、スポーツをひとつの「ツール」とした地域貢献の活用可能性について検討することができた。

対象演習：A・C
実 施 日：2023 年 2 月 18 日(土)～2 月 19 日(日)
実施都市：静岡県賀茂郡河津町
実施場所：NPO 法人あおぞらビレッジ
実施内容：静岡県河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指す NPO 法人の「あおぞらビレッジ」と連携しながら防災運動会を企画し、身体を動かしながら火災や地震発生時の対応力を高める活動を行った。
成　　果：河津町の小学生や幼稚園生、保護者、シニアクラブの方々と 70 名を超える参加者らと「防災運動会」を実施することで、防災知識を学ぶことや多世代交流のきっかけとして、新たなスポーツの活用可能性を実体験することができ、「地域とスポーツ」の関係について多角的な視点から検討できるようになった。

Ⅴ．地域・公共マネジメントプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

2000 年 4 月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、2014 年には、「まち・ひと・しごと創生法」が成立し、少子高齢化への対応や東京圏への人口集中の是正を推進することが明示され、2018 年の「改正地域再生法」では、企業の東京からの移転や市町村の商店街活性化、空き店舗活用の支援などが盛り込まれました。

しかし、それでもなお、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々に複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっているのです。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2022 年度は、プログラム全体イベントとして、東京都八王子市をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施のうえ、行政や地元の関係者との間で実地見聞と調査を行い、2022 年 12 月 10 日には多摩キャンパスに関係者をお招きして最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界や NPO での活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

２．2022 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A	FLP演習B	FLP演習C	総計	実施形態
1	工藤　裕子	法	7	9	10	26	合併(A･B･C)
2	鳴子　博子	経済	2	5	4	11	合併(A･B･C)
3	山﨑　朗	経済	3	2	－	5	合併(A･B)
4	根本　忠宣	商	4	9	2	15	合併(A･B･C)
5	天田　城介	文	4	8	14	26	単独(A･B･C)
6	新原　道信	文	3	7	7	17	合併(A･B･C)
7	川崎　一泰	総合政策	2	1	－	3	合併(A･B)
8	小林　勉	総合政策	3	5	3	11	単独(A･B･C)
9	堤　和通	総合政策	－	－	4	4	単独(C)
合　計			28	46	44	118	

３．プログラムスケジュール

5 月　　第 1 回部門授業担当者委員会
　　学内活動（八王子市出前授業）

7 月　　第 2 回部門授業担当者委員会

9 月　　学外活動（サマースクール・八王子市）

11 月　　2023 年度募集に伴う選考試験
　　第 3 回部門授業担当者委員会

12 月　　学内活動（期末成果報告会）

3 月　　FLP 修了発表
　　FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

①八王子市出前授業

実 施 日：　2022 年 5 月 12 日(木)17:00～

実施場所：　中央大学　多摩キャンパス FG HALL

実施内容：　サマースクール事前学習

②サマースクール

実 施 日： 2022 年 9 月 5 日(月)～9 月 15 日(木)

実施都市： 東京都八王子市

実施場所： 八王子市役所・他

実施内容： 現地調査と政策提言（八王子市役所ならびに関連施設）

③サマースクール成果報告会・期末成果報告会

実 施 日： 2022 年 12 月 10 日(土) 13:00～

実施場所： 中央大学　多摩キャンパス 8304 教室

実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告

各ゼミによる年度活動報告

５．これまでの履修生の主な就職・進学先実績

法務省、総務省、財務省、農林水産省、厚生労働省、国土交通省、文部科学省、特許庁、参議院事務局、国税庁、環境省、気象庁、原子力規制委員会、人事院、防衛省、東京国税局、地方裁判所、裁判所事務官、家庭裁判所、高等裁判所、警視庁、福島県警察本部、東京都庁、北海道庁、福島県庁、京都府庁、千葉県庁、埼玉県庁、神奈川県庁、岐阜県庁、長野県庁、新潟県庁、山梨県庁、岩手県庁、静岡県庁、三重県庁、逗子市役所、八王子市役所、港区役所、日立市役所、葛飾区役所、君津市役所、国立市役所、板橋区役所、江東区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋川市役所、さいたま市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、宇都宮市役所、韮崎市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、神戸市役所、大分市役所、大村市役所、荒川区役所、杉並区役所、品川区役所、墨田区役所、都市再生機構、日本電気、日本原子力発電、東京電力ホールディングス、四国電力、沖縄電力、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、ゆうちょ銀行、日本政策金融公庫、りそなホールディングス、三井住友銀行、清水銀行、大垣共立銀行、組合中央金庫、多摩信用金庫、横浜信用金庫、明治安田生命、SMBC 日興証券、かんぽ生命保険、明治安田生命保険相互会社、全国市町村職員共済組合連合会、日本総合研究所、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、大日本住友製薬、ヤンマー、ダイキン工業、NEC ソリューションイノベータ、インテリジェンス、電通九州、東急コミュニティー、京成電鉄、西日本鉄道、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン‐イレブン・ジャパン、日本マクドナルド、大日本印刷、KOA、富士ソフト、三菱電機、山九、デロイトトーマツコンサルティング、積水ハウス、東京建物、三井不動産レジデンシャル、エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ、エヌ・ティ・ティ都市開発、東日本電信電話、東京都国民健康保険団体連合会、日本放送協会、東京都福祉保健財団、東北大学公共政策大学院、慶應義塾大学法学研究科、学校法人和光学園、

東京大学新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（法学研究科、文学研究科、公共政策研究科）

６．演習教育活動

(1)工藤　裕子（法学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

＜授業の概要＞

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で 整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

＜活動内容＞

演習Ａは、春学期前半に社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ。社会科学の調査方法としては、国内実態調査（静岡県掛川市）を５月末に現地において実施するのに合わせ、事前学習、事後の質疑のやり取りなどを経て、春学期末に政策提言のグループ・プレゼンテーションを実施し、掛川市および関係機関にフィードバックを行った。調査および政策提言のプレゼンに基づく個人レポートは、夏季課題とした。また並行して、サマースクールに向けての事前調査、情報収集と課題の特定、仮説の構築などを実施し、サマースクールの準備を進めた。

秋学期は、サマースクールのヒアリングに基づく調査研究および期末報告会でのプレゼンテーションの準備を行った。秋学期後半はまた、文献調査と座学により海外実態調査の準備を行った。そして春休み（2 月 24 日～3 月 7 日）に海外実態調査（イタリア、エミリア＝ロマーニャ州）を現地にて実施した。

演習Ｂについては、春学期は前年度末春休み中にオンラインにて実施したイタリア研修の報告書作成の作業および各人の関心テーマを踏まえた卒論テーマの選定を中心に個人研究発表と討論を進めた。また、通常はＡ生時に現地で実施するところ、前年度はコロナの影響でオンライン実施となった掛川市の実態調査を対面にて実施した。春学期の後半はまた、夏季休業中から秋学期はじめにかけて実施する演習Ｂによる国内実態調査の準備を行った。演習Ａ 時に実施した海外実態調査（オンライン）を踏まえ、それぞれが関心を持つテーマを持ち寄り、演習Ｂ全体として調査するテーマの決定、訪問先（愛媛班、福岡・熊本班、福井班）の選定、訪問先機関との調整などを進め、夏季休業中から秋学期前半にかけて国内実態調査を実施した。

秋学期後半には、この研究成果をゼミで発表したうえ、卒論のテーマを選定し、個人による研究発表を行った。そのうえで、Ａ生時の海外実態調査（オンライン）の報告、国内実態調査の報告、各人の研究テーマについてのレポートを含むＢ生の一年間の活動記録をまとめた報告書を作成した。

演習Ｃについては、春学期にそれぞれの卒論のテーマを最終決定したうえ、執筆計画を作成、夏休みから秋学期にかけて論文を執筆、完成させたうえ、卒業論文集を編集した。今年度は、グリーン・ツーリズム、持続可能な観光、移住起業による地域活性化、SDGs、シティ・プロモーション、DMO、ウェルネス産業、公共交通、エリアマネジメント、ジビエ振興をテーマにした卒業論文・卒業制作が完成した。

また、本来であればＡ生時に現地にて実施する海外実態調査（イタリア、エミリア＝

ロマーニャ州）がコロナの影響でA生時はオンライン実施となったため、本年度はC生も海外実態調査に参加した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞
対象演習：A・B
実 施 日：2022年5月28日(土)～5月29日(日)
実施都市：静岡県掛川市
実施場所：掛川市役所・他
実施内容：掛川市のシティ・プロモーション、移住促進政策、農業振興、互産互消、公私協働、公共交通についてのヒアリングおよび調査
成　　果：掛川市のシティ・プロモーション政策、移住促成政策、農業振興、互産互消の活動、行政と市民との協働のあり方、企業の役割などを学んだ他、市役所の関係者、コミュニティ活動に従事している人々、企業等へのヒアリングを通して、調査とヒアリングを中心とする社会調査の方法を学んだ。また、事前調査、事後のフォローアップの方法、そしてそれらを政策提言としてまとめ、プレゼンテーションおよびレポートにまとめる、という一連の作業の進め方についてマスターした。プレゼンテーションはテーマ別グループで実施し、レポートは夏季休業中の課題として個人で作成した。

対象演習：A・B
実 施 日：2022年5月28日(土)
講 演 者：山崎　善久 氏（ローカルライフスタイル研究会）
演　　題：掛川市のスローライフ活動とローカルライフスタイル研究会の役割
実施都市：静岡県掛川市
実施施設：掛川市中心市街地
実施内容：掛川市のこれまでのスローライフ活動の経緯および歴史、行政との関係、ローカルライフスタイル研究会が果たしてきた役割などについて、市内の関係箇所を巡りながら解説していただいた。
成　　果：掛川市のスローライフ活動について、特に市民の視点を学ぶことが出来たほか、公私協働の具体的な活動やプロジェクトの内容を学ぶことで、行政と市民との協力関係の可能性を知ることが出来た。

対象演習：A・B
実 施 日：2022年5月28日(土)
講 演 者：山本　和子 氏（掛川おかみさん会）
演　　題：商店街の活性化とおかみさん会の活動
実施都市：静岡県掛川市
実施施設：掛川市中心市街地
実施内容：商店街の活性化における市民の活動について、掛川おかみさん会の会長として長年さまざまなプロジェクトに関わってこられた山本氏より、おかみさん会の活動、行政との協働、アートを中心としたさまざまな活動などについて、市内の関係箇所を巡りながら解説していただいた。
成　　果：掛川市内の商店街の活性化について、行政の政策のみならず、市民の参画によるさまざまなプロジェクトとその成果を学ぶことが出来たほか、行政とおかみさん会の協力関係によって実現したイベントや施設などを紹介していただくことで、公私協働の課題や可能性について知ることが出来た。

対象演習：A・B
実 施 日：2022年5月28日(土)・5月29日(日)

講 演 者：佐藤　雄一 氏（コンセプト株式会社）
演　　題：六次産業と互産互消機構
実施都市：静岡県掛川市
実施施設：掛川市役所
実施内容：コンセプト株式会社代表の佐藤氏からは、氏が提唱して掛川市とともに取り組んでいる互産互消活動について、まずは市の特産物直売店であるこれっしか処にて、互産互消活動を通して開発された商品等の紹介を含めて解説していただいた。そのうえで、特産物の付加価値を高めるために市と協働して取り組んでいる六次産業化の発想および具体的なプロジェクト等についてお話しいただいた。
成　　果：地域の特産物の付加価値を高める六次産業化のさまざまな試みの中で掛川地域に固有の互産互消を知ることで、地産地消の限界をどのように克服しようとしているのか、また具体的にどのような協力関係を築いてきたのか、商品の交換を超えた経験やノウハウの交換などについても学ぶことが出来た。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 7 月 30 日(土)～8 月 3 日(水)
実施都市：福岡県宮若市・他
実施場所：宮若市役所・他
実施内容：当該調査を実施した各人のテーマに基づいたヒアリング
成　　果：各人が卒業論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 8 月 14 日(日)～8 月 16 日(火)
実施都市：愛媛県今治市
実施場所：しまなみジャパン
実施内容：当該調査を実施した各人のテーマに基づいたヒアリング
成　　果：各人が卒業論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 9 月 1 日(木)～9 月 3 日(土)
実施都市：福井県鯖江市・他
実施場所：鯖江市役所・他
実施内容：当該調査を実施した各人のテーマに基づいたヒアリング
成　　果：各人が卒業論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。

対象演習：A・C
実 施 日：2023 年 2 月 24 日(金)～3 月 7 日(火)
実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市・他（イタリア）
実施場所：ファッジョーリ農場・他
実施内容：EU のプロジェクト等でもよく知られるアグリツーリズム農場であるファッジョーリ農場を拠点とし、小規模自治体および私企業、大学、組合等の活動が活発なエミリア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体（首長および担当評議員）、地域振興に関係する組合や公社、および企業家へのヒアリングを通じて、調査した。
成　　果：海外の地方自治体の首長や評議員、企業家にヒアリング、インタビューを行い、

本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。地域振興政策に関連し、イタリアの商業活動および観光政策について複数の市役所に対してヒアリングを行ったほか、諸政策による地域振興およびコミュニティの活性化についても、複数の市役所等に対してヒアリングを行った。地元企業、組合組織、団体などを訪れヒアリングを行ったほか、伝統産業や農業のブランド化などを実施している企業や個人に対してもヒアリングを行うことが出来、それぞれのアクターの熱量を実際に肌で感じることが出来た。

A 生は、各自の卒論テーマに向けてさまざまなインプットを得ることが出来、またそれぞれ、いろいろな感慨や学びがあった。

C 生は、A 生時にオンラインで実施したヒアリング先と一部は同じヒアリング先に行くことで、オンラインでは得られなかった現場感覚を得ることが出来たのみならず、当時とは異なるヒアリング先やテーマが加わったことで新たな学びにもなった。

対象演習：A・C
実 施 日：2023 年 2 月 27 日(月)
講 演 者：Fausto Faggioli 氏（Fattorie Faggioli 創始者/副会長･EU プロジェクトマネージャ･大学講師）
演　　題：イタリアにおけるアグリツーリズモの歴史・現在・未来
実施方法：農場研修室でのイタリア語による講演（工藤による日本語への逐語訳）
実施内容：EU のモデル・ケースとされるファッジョーリ農場を 1982 年に創業、イタリアのアグリツーリズモ法の制定にも大きく貢献、以来、EU のさまざまな農業振興・農村活性化等のプロジェクト・マネージャとして活躍する一方、近年ではボローニャ大学、ヴェネツィア大学、ボッコーニ商科大学などで後進の指導を中心に活動されている講演者より、イタリアのアグリツーリズモについて、歴史やこれまでの主要プロジェクトを振り返りつつ、コロナ禍で多くの産業が疲弊する中、むしろ活気を呈しているアグリツーリズモおよび農業・農村の可能性に関してお話しいただいた。また、ケース・ヒストリーとしてファッジョーリ農場の成り立ちや現状についても詳しく解説していただいた。
成　　果：A 生については、農場を拠点にした一週間の調査活動を開始するにあたり、調査対象の一つを今一度確認することで、問題意識を深めることに役立った。C 生については、A 生時にはオンランにて実施した海外実態調査地の現況を理解する貴重な機会となった。

対象演習：A・C
実 施 日：2023 年 3 月 3 日(金)
講 演 者：Evan Welkin 氏（Borgo Basino 共同経営者･起業家･コンサルタント･大学講師）
演　　題：アグリツーリズモの現状と課題-エコ・ヴィレッジと持続可能性について
実施方法：農場内の太陽光発電・風力発電・水耕栽培施設などの説明をしながらのウォーキング・ツアー、その後、農場研修室での英語による講演（必要に応じて工藤による日本語での解説を含む）
実施内容：野菜や果物などはもちろん、エネルギーについても自給自足を実現しているファッジョーリ農場内の太陽光発電・風力発電・水耕栽培施設・耕作地などについて、現地で経緯や現状、課題などを解説しながら紹介するウォーキング・ツアーを実施した後、研修室にて、現在、Borgo Basino として実施している新たなプロジェクト、特にエコ・ヴィレッジについて解説をしていただいた。また、持続可能性についてのワークショップを行っていただいた。

成　　果：A 生については、海外実態調査の一部を構成する講義という意味を持ち、調査対象をより理解し、問題意識を深めることに役立った。C 生については、A 生時にはオンラインにて実施した海外実態調査地の現況を実際に目の当たりにしつつ、より深く理解する機会となった。

(2)鳴子　博子（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

ジェンダー関係(横軸)と世代間関係(縦軸)から社会の中で人はいかに働き、暮らし、生きるかを考える

＜授業の概要＞

私たちは本当に自分らしく働き、暮らし、生きてゆくことができるのだろうか。個人・家族・社会(職場・地域)の関係を問題の根源に遡って考え、現代の日本社会に生きる一人一人のこれからの働き方、暮らし方、生き方を具体的に模索するのが本ゼミの目的である。働き方改革、少子化対策、介護・医療問題への対応、それらのどれもが現代日本の喫緊の課題であることを多くの人は認識しているが、男女やそれ以外の多様な性の在り方を縛る見えない力が作用しており、さまざまな問題の根は、実は一つに繋がっているのではなかろうか。セクシュアル・マイノリティへの差別解消が叫ばれる一方、女性の社会進出がそれなりに進んでいるにもかかわらず、数十年間も選択的夫婦別姓の導入が実現しないのが現代日本の現実である。

欧米の思想・理論・政策に学ぶことの多かったこれまでの知は、人間と社会の横軸(水平・平等関係)に重点を置き、縦軸(垂直・世代間関係)を思考することが少なかった。それゆえ、本ゼミでは時間配分を考えながら、フランスの歴史人口学、家族・社会政策、世話労働論など縦横両軸に関わる知見を仏日比較の視点から、欧米の理論・政策を参照点として相対化しつつ学ぶことを心掛ける。そうした学びの中から各自が具体的な研究テーマ、フィールドを選んで、実態調査を準備、実行する。

また、C 生は最終学年として共同研究の総まとめとなる卒業論文を完成させる。

＜活動内容＞

【A 生】

鳴子ゼミ A 生の高岡菫さん、山口真緒さんは、性的マイノリティの若者が自殺を選択する社会への疑問を出発点に、「性的マイノリティを含むすべての若者が過ごしやすい街づくり」を研究テーマに選んで、「サマースクール in 八王子市」に向けて準備を進めた。

サマースクールでは 2022 年 9 月 6 日、13 日に、八王子市役所の男女共同参画課、総務課、広報プロモーション課、学園都市文化課の皆さんのご協力を得て対面ヒアリングを行うことができた。

そこから明らかになったのは、八王子市には LGBT に対する理解が充分とは言えない市民も存在していること、他市と比較すると LGBT に関する政策が少ないことであった。

そうした状況を踏まえて、A 生は、「大学生が主体となって、八王子市の後援のもと LGBT の啓発イベントを行う」という政策提言に到達した。映画観賞会、講演会、ディスカッションを三本柱とする具体的な実践を、来年度以降実施する予定である。

今年度の成果は、2022 年 12 月 10 日の期末成果報告会での報告を経て、2023 年 1 月に執筆した期末成果報告書にまとめられた。

【B 生】

鳴子ゼミ B 生は、昨年度はシングルファーザーの子育て支援をテーマに共同研究を行ったが、今年度のスタート地点で改めて今後のスケジュール、テーマ、グループ分けなどについて話し合った。その結果、今後の研究を 1 年計画ではなく 2 年計画とし、時間をかけて研究を進め、その研究成果を C 生時に報告書にまとめる方針を決定した。

また、2 年間で追究する研究テーマについては、「ライフコースとジェンダー」を選んだ 2 人(中村亜依香さん・和田彩果さん)と個々に研究テーマを選んで個別研究を行う 3 人(赤沢泰生さん・阿部瑞貴さん・松下舞羽さん)に分かれて活動することに決まった。

以下、5 人の中で動きの速い「ライフコースとジェンダー」班の進捗状況を報告する。

中村さんと和田さんの疑問は、性別によってライフコース選択の幅が狭められているのではないか、大学生は卒業後の進路選択をする際に結婚や子育てまで見越しているのか、であった。2 人は、ジェンダー意識が大学生のキャリア観やライフコース選択に与える影響を調査するべくアンケートを準備した。アンケートは Google フォームを用いて中央大学多摩キャンパスの学生を対象として、2022 年 12 月 15 日～2023 年 1 月 31 日の期間に実施され、137 人の回答を得た。アンケートの分析はこれから行う予定である。

【C 生】

鳴子ゼミ C 生は、昨年度、それまで 2 年間の共同研究を「2021 年度 FLP 鳴子ゼミ B 生期末成果報告書」「男女と労働―日本の企業におけるワークライフバランスを整えるためには何が重要(必要)なのか?」としてまとめたが、今年度の初めに、今後、研究をどのように進めるべきか話し合った。その結果、今年度は、これまでの共同研究(イクボス研究)の成果を踏まえつつ、各自が一番追究したいテーマを選んで個別研究を行うことに決まった。

五十嵐壮太さんは、内定先企業の現状と課題を洗い出し、加えてイクボスアワードを受賞した企業の施策などを分析して「勤務予定の企業に向けたイクボス提言」を執筆した。

青木美奈さんは、育児と仕事の両立を容易にする社会への転換を求めて「育児休業の取得とその後のキャリアパスから考える育児と仕事の両立支援―管理職の意識改革に着目して―」と題する報告をまとめた。

ウ　ヘミンさんは、子育て期を過ぎたシニアのワークライフバランスに軸足を移して研究を進め、「健康寿命と平均寿命の差から考える日本のワークライフバランスの課題」を執筆した。

C 生は 3 人の個別研究を 1 冊にまとめ、鳴子ゼミ C 生卒業報告書を作成、完成させて 3 年間の調査研究を締めくくった。本報告書は FLP 演習教育活動補助費を得て印刷・製本された。3 人はそれぞれ企業や大学に就職予定だが、彼らの研究は内定先企業の今後にも役立つ実践的な側面を持っており、内定先企業の一部からは「報告」を期待されている。言うまでもなく、働き方改革、子ども支援は日本の喫緊の課題なのである。

(3)山﨑　朗（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

地域創生のデザイン

＜授業の概要＞

2008 年から日本の人口は減少しています。2008 年以前から人口減少している地域も少なくありません。東京都もまもなく人口減少に転じると予想されているなかで、地域をいかにデザインしていくのかが問われています。本ゼミでは、地域のグローバル化、地域のプレミアム化およびイノベーション促進による地域の活性化策について学習します。とくに、逆 6 次産業化、新しい公共、地域資源の活用、土地利用の転換、国土の末端地域の先端化、バイオマス・太陽光発電、地域イノベーション政策、産業クラスター、地域のグローバル化、地域のプレミアム化を取り上げます。

テキスト、参考文献をてがかりにしながら、地域のグローバル化について各自、関心のあるテーマを設定し、自主的な研究を行います。また、全員でゼミ合宿に行きます。これまでに、北海道札幌市、京都市、福岡市、長崎県の五島列島の宇久島、佐賀県武雄市、宮崎市、鹿児島県の奄美大島、沖縄県の那覇・石垣島・宮古島で調査を行っています。ゼミ生の研究内容や関心と希望をもとに決定します。

ゼミ内における研究成果は、懸賞論文やプレゼン大会ビジネスコンテストなどへの応募という形で社会に公開していきます。

これまでに「創立 130 周年中央大学の未来～私の提言～　最優秀学生賞」、「第 59 回みずほ学術振興財団懸賞論文佳作」、「第 1 回地球の歩き方総合研究所懸賞論文佳作」、「第 61 回みずほ学術振興財団懸賞論文三等＜一等・二等は該当作なし＞」などの成果が出ています。

＜活動内容＞

山﨑ゼミは、先進的な地域創生を促進している自治体を調査対象として、調査研究活動を行っています。コロナ禍の影響でなかなか現地調査ができませんでしたが、今年度は北海道東川町で調査を実施することができました。ゼミ生も東川町の町長、副町長から直接お話を聞く機会を得て、また東川町の廃校利用の方法は、サマースクールの政策提言の参考事例となりました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 5 月 28 日(土)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：ガーデンズマルシェ八王子・他
実施内容：廃校の現状を直接視察することを目的として日帰りの現地調査を行いました。
成　　果：サマースクールの政策提言の参考になると同時に、廃校の写真撮影を行い、それらの写真を政策提言のなかに盛り込みました。

対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 6 月 3 日(金)
講 演 者：根岸 裕孝 氏（宮崎大学地域資源創成学部教授）
演　　題：廃校活用の動向と課題
実施施設：中央大学　多摩キャンパス F502 教室・オンライン
実施内容：九州廃校学会の会長を務めている根岸教授にオンラインでお話を伺いました。
成　　果：廃校活用の先進事例を知ることができ、政策提言の参考になりました。

対象演習：A・B
実 施 日：2022年9月2日(金)～9月4日(日)
実施都市：北海道上川郡東川町
実施場所：東川町役場・他
実施内容：人口増加している東川町における政策は東川スタイルと呼ばれており、全国的に注目を集めており、町長、副町長から政策の特徴を伺うと同時に、廃校跡地の活用事例である日本語学校やセントピュア(多目的な図書館)、大規模な小学校、テレワークセンター、住宅開発地の視察を行いました。
成　　果：廃校活用の先進事例として、八王子市のサマースクールの政策提言のヒントを得ることができました。

(4)根本　忠宣（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

【A 生】地域活性化の源泉を探る

【B 生】地域振興の意義と効果について考える

【C 生】地域に関する研究論文の作成

＜授業の概要＞

【A 生】

地域活性化という言葉が一人歩きしているが、そもそも地域が活性化するとは何か曖昧であり、立場によって想定する内容は異なっている。この点を明確にしたうえで、地域をどう活性化すべきなのかを徹底的に考える。その際、都市と地方、中心と周辺、グローバルな地域間競争という視点を考慮して地域の地理性や特性を踏まえた分析を念頭に置く。

具体的な分析に当たっては定住地としての地域、働く場としての地域、商業地としての地域、学びの場としての地域、観光地としての地域など評価すべき軸を明確にしたうえで、地域活性化の源泉が何かを特定する。

（授業の内容）

①文献解読

古典の輪読：ジェイコブズ『都市の原理』SD 選書、『発展する地域、衰退する地域』ちくま学芸文庫

関連論文の解読：必要に応じて適宜紹介

その他参考文献：ウェストルンド・ハース編『ポストアーバン都市・地域論』ウェッジ

②サマースクールへの参加と報告書の作成

③地域活動への参加

静岡県伊東市における地域活性化のためのビジョン作成

静岡県宇佐美市における観光地活性化活動

相模原市橋本における商店街活性化活動

④合宿を通じた地域視察

【B 生】

B 生の大きな目標はゼミ交流会での報告です。ゼミ交流会は中央大学商学部本庄ゼミ、上智大学経営学部山田ゼミ、北海道大学経営学部相原ゼミ、大阪市立大学商学部山田ゼミ、西南学院大学経済学部西田ゼミが参加しており、学生に本格的な学術論文を作成してもらい、報告・討論してもらう場です。6 月に中間報告会、12 月に最終報告会が予定されており、他大学との交流も含めた密度の濃い大会です。10 本以上の報告がなされ、なかには大学院レベルの報告も含まれています。計量経済学、組織論、地場産業、経営学、金融論など専門の異なる教員（ゼミ）が交流することで様々な視点や分析手法があることを学ぶことができるのも大きな利点です。（各大学の教員は研究水準の高いメンバーばかりなので論文に対する評価はかなり厳しいです）また、教員と学生が採点することで論文の順位も決めますので適度な競争意識が働くことで参加者全員が真剣に取り組むような雰囲気が定着しています。ちなみに根本ゼミはコロナ前の大会では 2 年連続で優秀論文に選ばれています。（コロナ禍はオンライン開催で、順位づけは行わなかった）

また、A 生との合同ゼミとなりますので B 生はチューターとしての役割を果たしてもらいます。報告や議論の仕方、サマースクールでの調査の進め方など適宜サポートをしてもらうことで、自分自身の不足も同時に補って下さい。

【C 生】

卒業論文の作成。卒業論文の作成指導を行います。

＜実態調査・見学調査・講演会＞
対象演習：A・B
実 施 日：2022 年 6 月 11 日(土)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：宇佐美周辺
実施内容：住民・法人有志によるまちづくりプロジェクトの会議に学生目線でのアイデアを共有するために参加する。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 6 月 17 日(金)～6 月 19 日(日)
実施都市：北海道札幌市
実施場所：北海道大学
実施内容：他大学とのゼミ交流会に参加し、中間報告を行う。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 9 月 8 日(木)～9 月 10 日(土)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：宇佐美
実施内容：宇佐美での地域活性化案作成を長年担当しているので、住民の方々との意見交換や追加インタビュー調査や街歩きを実施し、立案につなげる。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 12 月 8 日(木)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：宇佐美
実施内容：NPO 法人宇佐美・城山街づくりプロジェクトの定例会議に参加し、来年度実施のイベントの企画案をいくつか提示する。また、住民からのヒアリングも行う。

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 12 月 16 日(金)～12 月 18 日(日)
実施都市：福岡県福岡市
実施場所：西南学院大学
実施内容：他大学とのゼミ交流会の最終報告会に参加する。

（５）天田　城介（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

＜授業の概要＞

現代日本社会において人びとが生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においていかなる社会的仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能になったり、困難になっているのかを、インテンシヴなフィールドワークを通じて明らかにする。

演習 A では、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつ、前期にサマースクールでの調査設計とフィールドワークの準備を行い、サマースクールではフィールドワークの実施・分析・考察・プレゼンテーションを遂行する。後期では、サマースクールのフィールドワークの追加調査を実施すると同時に、データ分析・データ解釈作業を行ったのち、期末成果報告会でのプレゼンテーション、最終報告書の作成を行う。また、可能であれば、八王子市・多摩市・日野市等々へのインテンシヴなフィールドワークを実施する予定である。これらの調査を通じて徹底的に分析・考究していくことになる。

演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

＜活動内容＞

前期には、9 月中旬に実施予定の「中央大学 FLP 地域・公共マネジメントプログラム 2022 年度サマースクール in 八王子市」の準備のため、八王子市に関する先行研究をレビューしつつ、八王子市がまとめた各種報告書等を渉猟した。こうした文献レビューと同時に、研究計画書の作成、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などを行い、リサーチデザインを確定していった。そのための準備作業として、2022 年 6 月 14 日(火)18:50～の居馬大祐氏（こどもぴあ副代表）の講演会を開催し、ヤングケアラーの抱えるリアリティを検討した。

その後、サマースクール調査の「問い」を「ヤングケアラー支援の困難はいかにして生じているのか」とし、当該テーマを「支援制度のはざま問題」「ヤングケアラー自身が SOS を出さない問題」「家族のハードル問題」の視点から解読するという形で調査を設計した。こうした調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。新型コロナウィルス感染拡大により様々な制約があったものの、2022 年 9 月 12 日(木)14:00～と 9 月 14 日(水)13:00～にわたって子ども家庭支援センター、子どものしあわせ課、若者総合相談センターを訪問し、インタビュー調査を実施することができた。それらのデータを緻密に分析したのち、丁寧に考察を深め、具体的案政策提言をまとめた。

上記調査の結果として、【1】ヤングケアラーとは、自らを「ヤングケアラー」であると認識していることは稀であり、「SOS を出せない」ことからも、不登校や児童虐待などの「強制的介入」の場合に関わるか、「ヤングケアラー」本人が「SOS を出しやすい仕組み」を作っていくことが重要であること、【2】制度のはざまに立たされているがゆえにできる限りセクションを超えたシステムを構築することが望まれること、【3】そのためにも、①ヤングケアラーの啓発運動、②居場所の活用、③ヤングケアラー専門のチャット相談窓口の設置、④ヤングケアラーコーディネーターの設置などが求められていることを提示した。

上記の結果を 12 月 10 日(土)の期末成果報告会で報告したところ、幸いにも参加してくださった方々からも高い評価を得ることができ、大変実りある報告会となった。

年度末は FLP 報告書の作成を行うと同時に、2023 年度より本格的に実施する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市など）のフィールドワークを検討した。具体的に

は、東京郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

全体としては、コロナ禍3年目のため様々な制約はあったものの、学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2023年度に本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

2022年度は、A生のテーマである「ヤングケアラー」について、元ヤングケアラーでありながら、現在は「こどもぴあ」の副代表としてヤングケアラーを支援している居馬大祐氏を講師にお招きし、以下の講演会を開催した。

対象演習：A
実 施 日：2022年6月14日(火)18:50〜20:30
講 演 者：居馬　大祐 氏（こどもぴあ副代表）
演　　題：ヤングケアラーとして生きた日々／ヤングケアラーを支援する日々
実施方法：オンライン
実施内容：居馬大祐氏（こどもぴあ副代表）は、元ヤングケアラーでありながら、現在は精神障害のある親に育てられた当事者団体である「こどもぴあ」の副代表を務める。ヤングケアラーと呼ばれる人びとがなにゆえ周囲にSOSを出すことが困難であるのか、なにゆえヤングケアラーは制度のはざまに立たされてしまうのか、なにゆえ当事者たちは自らを「ヤングケアラー」と名乗ることが難しいのか等について講演していただいた。サマースクール前のきわめて貴重な機会となった。
成　　果：本ゼミでは、地域において困難を抱えながら生きる人びとがどのように周囲に助けを求めることが困難であるのか、周囲はいかに彼／女らにアプローチすることが可能であるのかを、先進自治体ではいかなる支援が展開されているのか等のフィールドワークを実施しているため、ヤングケアラーのリアリティを知る意味でも居馬氏の講演は貴重なものであり、その後の理解を大いに深める機会になった。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

＜授業の概要＞

現代日本社会においてどのように人びとは生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においてどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことを可能にしたり、困難にしたりしているのかを探求する。

演習 B、演習 C では、一年間を通じて東京郊外（具体的には八王子・多摩・日野地域など）をフィールドにインテンシヴなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏・冬の 3 回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

＜活動内容＞

2022 年度はコロナ禍 3 年目で様々な制約がありながらも、定期的な関東圏でのインタビュー調査やフィールドワークが「対面」で可能となり、また 2022 年 8 月 29 日(月)～8 月 31 日(水)において福岡県（北九州市ならびに福岡市）での夏期フィールドワークも実施することができた。そのため、コロナ禍であっても、ゼミ生はインタビューを中心に大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した 1 年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「子ども班」「地域班」「犯罪班」「高齢者班」「多文化班」の 5 グループに分けて、それぞれのグループごとで研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は 2022 年 6 月～11 月下旬にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野において支援活動を行っている NPO 法人等に対して実施した。各グループは概ね 2～3 の NPO 法人等に 1 回 60 分～90 分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

今年度の夏期フィールドワークは、2022 年 8 月 29 日(月)～8 月 31 日(水)において福岡県（北九州市ならびに福岡市）にて実施した。初日 8 月 29 日(月)には NPO 法人抱樸のフィールドワークを実施した。NPO 法人抱樸は、「伴走支援」と呼ばれる先進的な支援実践を展開してきたが、近年では「街」それ自体を変えていこうとする「希望のまちプロジェクト」を展開してきており、誰もが「居場所」を感受できる街自体を作り出そうと行政と協働しながら活動している。こうした支援実践の現状と課題について、法人常務である山田耕司氏と江田初穂氏にお話を伺った。また、NPO 法人抱樸の実践を 20 年以上にわたり支援しながら研究を重ねてきた稲月正氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）にその学術的含意について講演していただいた。

2 日目 8 月 30 日(火)には、社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡と特別養護老人ホームよりあいの森のフィールドワークを実施した。社会福祉法人グリーンコープは、それまでの地域支援の経験を活かしながら、NPO 法人抱樸との協働事業である抱樸館福岡を立ち上げ、福岡市において先進的な生活困窮者支援を展開してきた。そのため、抱樸館における支援上の課題等について、社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡・館長である早野誠氏に講演していただいた。午後は、日本の認知症ケアを大きく変えた宅老所よりあい代表の村瀬孝生氏に、現在のよりあいの実践の課題についてお話していただいた。このように NPO 法人抱樸、社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡、特別養護老人ホームよりあいの森の実践の歴史は、地域にて困難を抱える人びとへ支援実践の歴史であり、これらを見学し、実践者にお話をお聞きすることは学生たちにとって大いなる学びとなった。このようなフィールドワークならびに講演から学生たちは現場にて何がどのように生じており、どのような困難や課題をもたらすかについて考えることはこれ以上のない学びになったと確信するものである。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は彼／女らをどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。こうしたインタビューやフィールドワークで収集したデータを分析し、後期にはその分析と考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。後期後半からはFLP報告書の作成を行うと同時に、2023年度にさらに本格的に展開する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市ほか）のフィールドワークについて検討した。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2023年度には更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

夏期フィールドワークは、2022年8月29日(月)～8月31日(水)において福岡県（北九州市ならびに福岡市）にて実施した。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年8月29日(月)～8月31日(水)
実施都市：福岡県北九州市・他
実施場所：NPO法人抱樸・他

2022年度は、B・C生のテーマである「地域における当事者の声と支援実践」について、山田耕司氏（NPO 法人抱樸常務）と稲月正氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）、早野誠氏（社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡館長）、村瀬孝生氏（宅老所よりあい代表）を講師にお招きし、以下の講演会を開催した。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年8月29日(月)14:30～16:00
講 演 者：山田　耕司 氏（NPO法人抱樸常務）
演　　題：NPO法人抱樸の事業展開と組織運営について
実施施設：北九州市立生涯学習総合センター
実施内容：山田耕司氏は、NPO法人抱樸常務であり、今日のNPO法人抱樸の支援実践を中心的に展開している人物である。そのため、山田氏からNPO法人抱樸の事業展開と組織運営について、そしてそこでの事業展開と組織運営における課題について報告していただいた。
成　　果：NPO法人抱樸は、「伴走支援」と呼ばれる先進的な支援実践を展開すると同時に、近年では「街」それ自体を変えていこうとする「希望のまちプロジェクト」を展開してきており、誰もが「居場所」を感受できる街自体を作り出そうと行政と協働しながら活動している。こうしたNPO法人抱樸の支援の現状と課題について、法人常務である山田耕司氏に講演していただいたことで、複数の支援の課題があり、スポット的解決ではなく、「地域」それ自体を変えていくことが求められていることを学んだことで、現実への理解を大いに深めることができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年8月29日(月)13:00～14:30
講 演 者：稲月　正 氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）
演　　題：生活困窮者への伴走支援システムについて
実施施設：北九州市立生涯学習総合センター

実施内容：北九州市で先駆的な生活困窮者支援を行ってきた NPO 法人抱樸を 20 年以上にわたって研究し続けている稲月正氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）を講師として、当該団体の理念である伴走型支援と組織運営の間でどのような折り合いをつけているのか、どのように組織間のコンフリクトに対応しているのか等について講演していただいた。

成　　果：NPO 法人抱樸は、「伴走支援」と呼ばれる先進的な支援実践を展開すると同時に、近年では「街」それ自体を変えていこうとする「希望のまちプロジェクト」を展開してきており、誰もが「居場所」を感受できる街自体を作り出そうと行政と協働しながら活動している。こうした NPO 法人抱樸の支援の現状と課題について、社会学者である稲月正氏に講演していただいたことで、地域支援の課題を社会学的に考察することが可能となった。大変実りのある講演となった。

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 8 月 30 日（火）9:30～11:30
講 演 者：早野　誠 氏（社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡・館長）
演　　題：社会福祉法人グリーンコープの歴史と抱樸館福岡の組織運営
実施施設：社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡
実施内容：NPO 抱樸と社会福祉法人グリーンコープとの協働事業である「抱樸館福岡」を訪問し、早野誠氏（社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡・館長）に当該団体がいかなる歴史的背景のもとで当該事業を展開してきているのか、現在、どのような運営上の困難があるのか、生活困窮者支援の難しさはいかなるものであるのか等について講演していただいた。

成　　果：社会福祉法人グリーンコープが安全安心な食を提供する活動のみならず、保育園や障害者支援や高齢者支援や生活困窮者支援などを積極的に担ってきた歴史と今日の課題について学んだうえで、現在における運営上の課題や生活困窮者支援の困難などについて理解することを通じて、地域社会の市民事業の歴史と実績を深く理解することができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 8 月 30 日（火）14:00～17:00
講 演 者：村瀬　孝生 氏（宅老所よりあい代表）
演　　題：宅老所よりあいの歴史／宅老所よりあいの理念と組織運営
実施施設：特別養護老人ホームよりあいの森
実施内容：日本の認知症ケアを大きく変えた宅老所よりあいの代表である村瀬孝生氏に、これまでのよりあいの歴史と実践の積み重ねについて講演していただいた上で、よりあいの実践が日本の高齢者福祉制度との格闘の歴史でもあり、また日本の高齢者福祉制度を形作ってきた歴史であることを講演していただいた。

成　　果：特別養護老人ホームよりあいの森を訪問し、宅老所よりあいの代表を務める村瀬孝生氏から 1990 年代以降における宅老所・民間デイサービス運動などの歴史を説明していただき、よりあいが一人一人の認知症高齢者と寄り添いながら事業展開してきたことを学んだ。今日では、2000 年に開始した介護保険などの「制度」によって認知症高齢者のサービスは形作られてきたと思われているが、実はそうではなく、むしろ 1990 年代以降において全国様々な地域において主に女性たちによって担われてきた宅老所・民間デイサービスなどの実践こそが今日の認知症ケアのあり方を形作ってきたことを理解し、学ぶことができた。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

＜授業の概要＞

現代日本社会においてどのように人びとは生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においてどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことを可能にしたり、困難にしたりしているのかを探求する。

演習 B、演習 C では、一年間を通じて東京郊外（具体的には八王子・多摩・日野地域など）をフィールドにインテンシヴなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏・冬の 3 回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

＜活動内容＞

2022 年度はコロナ禍 3 年目で様々な制約がありながらも、定期的な関東圏でのインタビュー調査やフィールドワークが「対面」で可能となり、また 2022 年 8 月 29 日(月)～8 月 31 日(水)において福岡県（北九州市ならびに福岡市）での夏期フィールドワークも実施することができた。そのため、コロナ禍であっても、ゼミ生はインタビューを中心に大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した 1 年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「子ども班」「地域班」「犯罪班」「高齢者班」「多文化班」の 5 グループに分けて、それぞれのグループごとで研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は 2022 年 6 月～11 月下旬にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野において支援活動を行っている NPO 法人等に対して実施した。各グループは概ね 2～3 の NPO 法人等に 1 回 60 分～90 分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

今年度の夏期フィールドワークは、2022 年 8 月 29 日(月)～8 月 31 日(水)において福岡県（北九州市ならびに福岡市）にて実施した。初日 8 月 29 日(月)には NPO 法人抱樸のフィールドワークを実施した。NPO 法人抱樸は、「伴走支援」と呼ばれる先進的な支援実践を展開してきたが、近年では「街」それ自体を変えていこうとする「希望のまちプロジェクト」を展開してきており、誰もが「居場所」を感受できる街自体を作り出そうと行政と協働しながら活動している。こうした支援実践の現状と課題について、法人常務である山田耕司氏と江田初穂氏にお話を伺った。また、NPO 法人抱樸の実践を 20 年以上にわたり支援しながら研究を重ねてきた稲月正氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）にその学術的含意について講演していただいた。

2 日目 8 月 30 日(火)には、社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡と特別養護老人ホームよりあいの森のフィールドワークを実施した。社会福祉法人グリーンコープは、それまでの地域支援の経験を活かしながら、NPO 法人抱樸との協働事業である抱樸館福岡を立ち上げ、福岡市において先進的な生活困窮者支援を展開してきた。そのため、抱樸館における支援上の課題等について、社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡・館長である早野誠氏に講演していただいた。午後は、日本の認知症ケアを大きく変えた宅老所よりあい代表の村瀬孝生氏に、現在のよりあいの実践の課題についてお話していただいた。このように NPO 法人抱樸、社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡、特別養護老人ホームよりあいの森の実践の歴史は、地域にて困難を抱える人びとへ支援実践の歴史であり、これらを見学し、実践者にお話をお聞きすることは学生たちにとって大いなる学びとなった。このようなフィールドワークならびに講演から学生たちは現場にて何がどのように生じており、どのような困難や課題をもたらすかについて考えることはこれ以上のない学びになったと確信するものである。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は彼／女らをどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。こうしたインタビューやフィールドワークで収集したデータを分析し、後期にはその分析と考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。後期後半からはFLP報告書の作成を行うと同時に、2023年度にさらに本格的に展開する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市ほか）のフィールドワークについて検討した。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2023年度には更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

夏期フィールドワークは、2022年8月29日(月)～8月31日(水)において福岡県（北九州市ならびに福岡市）にて実施した。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年8月29日(月)～8月31日(水)
実施都市：福岡県北九州市・他
実施場所：NPO法人抱樸・他

2022年度は、B・C生のテーマである「地域における当事者の声と支援実践」について、山田耕司氏（NPO法人抱樸常務）と稲月正氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）早野誠氏（社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡・館長）、村瀬孝生氏（宅老所よりあい代表）を講師にお招きし、以下の講演会を開催した。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年8月29日(月)14:30～16:00
講 演 者：山田　耕司 氏（NPO法人抱樸常務）
演　　題：NPO法人抱樸の事業展開と組織運営について
実施施設：北九州市立生涯学習総合センター
実施内容：山田耕司氏は、NPO法人抱樸常務であり、今日のNPO法人抱樸の支援実践を中心的に展開している人物である。そのため、山田氏からNPO法人抱樸の事業展開と組織運営について、そしてそこでの事業展開と組織運営における課題について報告していただいた。
成　　果：NPO法人抱樸は、「伴走支援」と呼ばれる先進的な支援実践を展開すると同時に、近年では「街」それ自体を変えていこうとする「希望のまちプロジェクト」を展開してきており、誰もが「居場所」を感受できる街自体を作り出そうと行政と協働しながら活動している。こうしたNPO法人抱樸の支援の現状と課題について、法人常務である山田耕司氏に講演していただいたことで、複数の支援の課題があり、スポット的解決ではなく、「地域」それ自体を変えていくことが求められていることを学んだことで、現実への理解を大いに深めることができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022年8月29日(月)13:00～14:30
講 演 者：稲月　正 氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）
演　　題：生活困窮者への伴走支援システムについて
実施施設：北九州市立生涯学習総合センター

実施内容：北九州市で先駆的な生活困窮者支援を行ってきた NPO 法人抱樸を 20 年以上にわたって研究し続けている稲月正氏（北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授）を講師として、当該団体の理念である伴走型支援と組織運営の間でどのような折り合いをつけているのか、どのように組織間のコンフリクトに対応しているのか等について講演していただいた。

成　　果：NPO 法人抱樸は、「伴走支援」と呼ばれる先進的な支援実践を展開すると同時に、近年では「街」それ自体を変えていこうとする「希望のまちプロジェクト」を展開してきており、誰もが「居場所」を感受できる街自体を作り出そうと行政と協働しながら活動している。こうした NPO 法人抱樸の支援の現状と課題について、社会学者である稲月正氏に講演していただいたことで、地域支援の課題を社会学的に考察することが可能となった。大変実りのある講演となった。

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 8 月 30 日(火)9:30～11:30
講 演 者：早野　誠 氏（社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡館長）
演　　題：社会福祉法人グリーンコープの歴史と抱樸館福岡の組織運営
実施施設：グリーンコープ抱樸館福岡
実施内容：NPO 抱樸と社会福祉法人グリーンコープとの協働事業である「抱樸館福岡」を訪問し、早野誠氏（社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡・館長）に当該団体がいかなる歴史的背景のもとで当該事業を展開してきているのか、現在、どのような運営上の困難があるのか、生活困窮者支援の難しさはいかなるものであるのか等について講演していただいた。

成　　果：社会福祉法人グリーンコープが安全安心な食を提供する活動のみならず、保育園や障害者支援や高齢者支援や生活困窮者支援などを積極的に担ってきた歴史と今日の課題について学んだうえで、現在における運営上の課題や生活困窮者支援の困難などについて理解することを通じて、地域社会の市民事業の歴史と実績を深く理解することができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2022 年 8 月 30 日(火)14:00～17:00
講 演 者：村瀬　孝生 氏（宅老所よりあい代表）
演　　題：宅老所よりあいの歴史／宅老所よりあいの理念と組織運営
実施施設：特別養護老人ホームよりあいの森
実施内容：日本の認知症ケアを大きく変えた宅老所よりあいの代表である村瀬孝生氏に、これまでのよりあいの歴史と実践の積み重ねについて講演していただいた上で、よりあいの実践が日本の高齢者福祉制度との格闘の歴史でもあり、また日本の高齢者福祉制度を形作ってきた歴史であることを講演していただいた。

成　　果：特別養護老人ホームよりあいの森を訪問し、宅老所よりあいの代表を務める村瀬孝生氏から 1990 年代以降における宅老所・民間デイサービス運動などの歴史を説明していただき、よりあいが一人一人の認知症高齢者と寄り添いながら事業展開してきたことを学んだ。今日では、2000 年に開始した介護保険などの「制度」によって認知症高齢者のサービスは形作られてきたと思われているが、実はそうではなく、むしろ 1990 年代以降において全国様々な地域において主に女性たちによって担われてきた宅老所・民間デイサービスなどの実践こそが今日の認知症ケアのあり方を形作ってきたことを理解し、学ぶことができた。

(6)新原　道信（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

＜授業の概要＞

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？―いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる″社会のオペレーター″―生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと―の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、″フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）″を蓄えていきます。

(1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。

(2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいます。2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」―生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど―を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域・公共マネジメント）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。

(3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきます。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた″コミュニティを基盤とする参与的調査研究(Community-Based Participatory Research(CBPR))″は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジル、インドなどの大学とも知見を共有していきます。

＜活動内容＞

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4 つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法、とりわけ“コミュニティを基盤とする調査研究（Community Based Research（CBR））”と“療法的でリフレクシヴな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research(T&R) ）”を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか―〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合って方針を決めてきました。

地域・公共プログラム新原ゼミ A 生は、「子どもたちが生きやすいコミュニティづくりと地域に寄り添い、人に心を寄せるフィールドワーク」をテーマとして八王子市で調査を行い、成果をとりまとめました。B 生は、昨年にひきつづき、多摩市をフィールドとして、独自に市との関係を構築し、ランタン・フェスティバルの運営にも参加し、サマースクール後も理解を深める取り組みをしました。C 生は、杉並をフィールドとして取り組んできた地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークの成果をもとに、卒業ゼミ論文をとりまとめました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実 施 日：2022 年 9 月 5 日(月)～9 月 6 日(火)

実施都市：埼玉県秩父郡

実施場所：横瀬町歴史民俗資料館・他

実施内容：前期に学習した新原道信編『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』(ミネルヴァ書房、2022 年) にもとづき、下記の点を事前に確認しました

- 西武秩父駅に向かう車中から、関東平野の地形と土地利用の現在をよく観察しながら、フィールドワークをはじめる。そして到着してからも、“大量で詳細な記述法（methods of acumen, keeping perception/keeping memories）”によるフィールドノーツをのこすつもりで、〈あるき・みて・きいて・よみ・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉をすすめる。
- 合宿という場をつくるために、下支えをしてくれた人たちの労苦を考えること。作り手となることと、自分が立っている舞台の作り手の労苦への想像力を自分がもっているかをよく検証すること。こちらについては、『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』序章の補遺（33-34 ページ）の意味を理解する。
- 合宿時は、共通の調査先として、秩父の生業である銘仙に関する埼玉県繊維工業試験場秩父支場の建物を活用した銘仙の資料館と横瀬町の横瀬町歴史民俗資料館にて聴き取り調査を行いました。それ以外の時間は、5 つの班にわかれて各班の立案した計画にもとづき行動し、歴史資料館、武甲山資料館などにも訪れました。

成　　果：合宿終了後は、グループごとに“大量で詳細な記述法”によるフィールドノーツを作成し、mapping 等のメソッズを駆使したうえで、質的コーディングを行い、論文・報告書作成の土台となる都市・地域のエスノグラフィ／モノグラフを蓄積しました。

(7)川崎　一泰（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

地域計画のための分析手法

＜授業の概要＞

この科目では地域を設定し、課題解決のための政策提言を行うことを最終目標とする。そのためのデータ収集、データ処理、分析などの座学にはじまり、現地調査などのフィールドワークや行政にヒアリング調査など多角的に学習する。

＜活動内容＞

川崎ゼミは、八王子市におけるサマースクールに参加するため、テーマ設定を考えつつ、街づくりの事例を調査し、アイディアの取りまとめを行った。春学期は総合計画を参考にしつつ、地域課題の把握と政策のポイントを把握した。また、都市計画や地区計画などの手法を学びつつ、民間投資による街並み形成や商業的価値についてディスカッションした。秋学期は八王子市とのやり取りをしつつ、具体的な政策提案のための絞り込みを行った。

今年度はSNSの活用にはじまり、簡単な統計分析の手法を学習した。資料をベースにリノベーションの効果、都市計画、地区計画、再開発手法などの制度を学びつつ、それを活用することによってどのような効果があるかを座学で学習しつつ、実際に街歩きをしながら、政策効果を考える機会を設けた。

なお、学生たちの具体的な成果はサマースクール報告書に収録されているので、そちらを参照されたい。

以下、今年度実施した実態調査の概要である。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2022年7月30日(土)
実施都市：東京都八王子市・日野市
実施場所：八王子駅・日野宿本陣
実施内容：駅周辺の実地調査と歴史的景観の活用法などを見学した。
成　　果：歴史的景観を活用しつつ、人を呼び込む現場の状況を把握した。

対象演習：A・B
実 施 日：2022年8月31日(水)～9月2日(金)
実施都市：熊本県天草市
実施場所：天草市役所・他
実施内容：天草市長をはじめとする市職員と政策課題についてディスカッションした。
成　　果：地方の公共交通の課題を実感しつつ、政策課題に対する対応方法などをヒアリングした。また、いわゆるシャッター通りを通り、地方商店街の課題を把握した。

対象演習：A・B
実 施 日：2023年1月30日(月)～1月31日(火)
実施都市：神奈川県三浦市
実施場所：三浦市役所、三崎地区開発エリア
実施内容：三崎地区の再開発エリアとマグロ市場の見学をしつつ、市職員に案内してもらいながら、政策について解説してもらった。また、地域で古民家等をリノベー

ションしながら旅館等を経営している社長からお話を伺い、実際のホテルの見学と工事途中の建築現場を見学した。

成　　果：なぜリノベーションかという財務的な理由等を把握しつつ、既存のコンテンツを使いながら、プレミアム消費を呼び込む戦略について把握した。こちらは都市計画の手法を使わずに民間投資で再生をしていく事例であった。

(8)小林　勉（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

FLP 小林ゼミ演習 A では、主に①八王子市へ向けた政策提言、②J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポート、③静岡県河津町にて開催した「防災運動会」のイベントのマネジメントを行った。

まず「①八王子市へ向けた政策提言」では、9 月に行った八王子市役所へのヒアリング調査から得た情報をもとに、「外国人留学生の交流機会への参加促進」をテーマとして、スポーツを活用した外国人とのソーシャルインクルージョンを推進する政策提言を行なった。八王子市の留学生人口は近年増加傾向にある一方で、「情報弱者」の存在や「差別・偏見」に悩まされている留学生が多くいる実態を明らかにした上で、接触仮説に基づいたスポーツを用いた交流イベントの活用可能性について政策提言を行った。

また「②J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポート」では、J リーグクラブのブラウブリッツ秋田と本ゼミが 9 年間にわたり実施してきた共同プロジェクトであり、3 年ぶりに現地に赴いてホームゲームのプロデュースを行なった（一昨年と昨年はオンラインによる開催）。プロジェクトの内容は、ウォーキングサッカー大会開催、解説シートの実施、「SDGs アクティブラーニング」をテーマとした授業企画、VR 企画、マッチデープログラムの作成、福たす T シャツの制作等である。演習 A では、それらコンテンツの運営サポートを行った。

そして「③静岡県河津町にて開催した「防災運動会」のイベントのマネジメント」では、静岡県河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指す NPO 法人の「あおぞらビレッジ」と連携しながら、防災運動会を運営した。初対面でもコミュニケーションを促進できる「じゃんけん列車」、火災時の煙を回避するために低姿勢での移動の重要性を啓発する「キャタピラリレー」、ボールを負傷者に見立て、迅速に運搬する意識を醸成する「担架リレー」、防災知識を高める「○×クイズ」などを企画立案した。一連のマネジメントを通じて、河津町の小学生や幼稚園生、保護者、シニアクラブの方々と 70 名を超える参加者らと、身体を動かしながら火災や地震発生時の対応力を高める活動を行なった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2022 年 9 月 21 日(水)～9 月 27 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Ｊリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行なった。具体的には、老若男女を問わず参加できる「ウォーキングサッカー大会」の運営支援、ビギナーズを対象とした「元Ｊリーガーによる解説シート」

の実施、現役Ｊリーガーの選手目線を疑似体験できる「VR 体験」の企画補助、マッチデープログラムの作成等の活動を行った。

成　　果：Ｊリーグクラブと連携し、プロリーグの公式戦をプロデュースすることで、一つの公式戦が運営されるのに、いかに多くのアクターが連携協力しているのかを「実際に体験」することができ、そうしたマネジメントの難しさを体感することができた。また、多様なアクターの力が結集されることで構築されるプロスポーツの空間だからこそ可能となる、スポーツをひとつの「ツール」とした地域貢献の活用可能性について検討することができた。

対象演習：A・C
実 施 日：2023 年 2 月 18 日(土)～2 月 19 日(日)
実施都市：静岡県賀茂郡河津町
実施場所：NPO 法人あおぞらビレッジ
実施内容：河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指す NPO 法人の「あおぞらビレッジ」と連携しながら防災運動会を企画し、身体を動かしながら火災や地震発生時の対応力を高める活動を行なった。
成　　果：河津町の小学生や幼稚園生、保護者、シニアクラブの方々と 70 名を超える参加者らと「防災運動会」を実施することで、防災知識を学ぶことや多世代交流のきっかけとして、新たなスポーツの活用可能性を実体験することができ、「地域とスポーツ」の関係について多角的な視点から検討できるようになった。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、Ｊリーグクラブとの共同プロジェクトである「福+プロジェクト」の企画運営を中心に以下のような活動を行った。

① ブラウブリッツ秋田の選手と連携したスポーツ VR 体験会の実施

内　容：スタジアムに訪れる観客を対象に、あたかも自分が別空間にいるかのような感覚を創出できる VR 技術を活用したイベントを実施した。最新の VR 技術を駆使しながらプロサッカー選手の技術や動作を体験できる仮想現実を作り出し、プロサッカー選手が見ているフィールド上の光景を一般のサポーター達に体感してもらうことで、新しいプロスポーツの楽しみ方を創出した。

② ウォーキングサッカー大会の運営

内　容：高齢化率が全国で最も高い秋田での健康増進、コミュニティ形成の場の構築を目的とし、ブラウブリッツ秋田のトレーナーの協力のもと、ウォーキングサッカー大会をブラウブリッツ秋田のスタジアムにて実施した。また大会前には、参加者の安全確保のため、株式会社 e-MOTIONs・佐藤星亜氏を招いてウォーキング教室を開講し、参加者の不慮の事故に対する防止策も講じた。

③ 元Ｊリーガーによる解説シートの設置

内　容：前山恭平氏(ブラウブリッツ秋田)・佐藤義則氏（秋田コミュニティー放送）を招いて、サッカーのルールや基礎知識など、観戦初心者でも楽しめるようなコンテンツを解説形式で提供した。

④ SDGs アクティブラーニング（「スポーツ×SDGs」という新たな切り口を中学生に提供）

内　容：秋田市立山王中学校の 2 年生 170 名を対象に、SDGs をはじめとした社会課題に対して「私には何ができるか？」をテーマとして SDGs アクティブラーニングを開講した（8 月 31 日実施）。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B

実 施 日：2022 年 4 月 2 日(土)～4 月 5 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ブラウブリッツ秋田のスタッフと顔合わせを行った。また、試合運営ボラン

ティアとして、試合準備、運営に携わった。
成　　果: 現地に赴くことで、社員の方との円滑なコミュニケーションを図ることができ、企画立案に際して、スタジアムの立地や規模感等を把握することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 6 月 13 日(月)
講 演 者：岸　卓巨（一般社団法人 A-GOAL）
演　　題：SDGｓ×スポーツの観点から見た福たすプロジェクト
実施施設：中央大学多摩キャンパス 11504 教室
実施内容：「一般社団法人 A-GOAL」の代表である岸卓巨氏を講師として招き、アフリカの地域スポーツクラブの実情や現地で行っている社会課題解決プロジェクトに関する情報を共有してもらった。
成　　果：アフリカの社会課題や地域スポーツクラブでの取り組みを共有できたことで、秋田での社会貢献を目指す福たすプロジェクトの企画を検討する上での重要な論点や貴重な視点について習得することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 6 月 30 日(木)～7 月 2 日(土)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム
実施内容：4 月 2 日～4 月 5 日に実施した見学調査をもとに、今年度のプロジェクト企画について意見交換をし、ブラウブリッツ秋田の社員らと議論を行った。また、実際の公式戦に試合運営ボランティアとして参加し、試合準備、運営に協力した。
成　　果：現地に赴いてプロクラブを運営しているスタッフらと直接的に議論できたことで、企画の詳細部分まで意見交換することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 7 月 16 日(土)～7 月 17 日(日)
実施都市：静岡県沼津市
実施場所：中央公園
実施内容：沼津市にて開催された「一般社団法人 A-GOAL」の実践活動の場において、VR 体験会トライアルを行った。
成　　果：VR 視聴における安全性の確保の方法や VR コンテンツとして必要な編集上の工夫など多くの問題点を浮き彫りにできたことで、今年度に実施予定の新たなコンテンツに対して多くの課題を整理することができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 8 月 16 日(火)～8 月 18 日(木)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム
実施内容：スポーツ VR 体験会で使用する映像を撮影予定だったが、感染症の影響で急遽延期となったため、撮影に向けた準備と撮影場所の見学、イベント当日の運営準備を行うため、会場となるスタジアム周辺の視察を行った。
成　　果：撮影およびイベントを行う場所に実際に足を運び視察することで、円滑にプロジェクトを運営するための準備をする上で必要な情報を得ることができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 8 月 28 日(日)～9 月 1 日(木)
実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム
実施内容：8 月 31 日に実施する SDGs アクティブラーニングの準備およびプロジェクト資金を獲得するため、関係機関に対してスポンサーシップ広報活動を行った。
成　　果：SDGs アクティブラーニングで登壇したブラウブリッツ秋田の安田選手と詳細な打ち合わせやリハーサルを実施できたため、円滑に SDGs アクティブラーニングを実施するのに結びつけることができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 9 月 8 日(木)～9 月 11 日(日)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム
実施内容：ウォーキングサッカー大会運営にあたり、運営に必要な備品の準備および運営サポート依頼のためブラウブリッツ秋田スクールコーチのもとを表敬訪問を行なった。また、大会の PR 活動のため、スタジアムに来訪者を対象に、広報チラシを配布した。
成　　果：イベント当日に必要となる備品の確保と大会運営をサポートをしてもらう協力者らと十分な事前打ち合わせをすることができた。また、チラシ配布による集客活動を行えたことで、大会当日には目標参加者数を上回ることに繋げることができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2022 年 9 月 21 日(水)～9 月 27 日(火)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：ソユースタジアム
実施内容：9 月 25 日の福たすプロジェクト当日に向けて、ブラウブリッツ秋田の社員の方と最終打ち合わせや当日準備を行った。当日は、A 生、C 生と連携し、試合運営やイベントを実施した。
成　　果：試合当日の多数の来場者に対して、各企画を円滑に運営することができた。今年の一連のプロジェクト活動を通して、スポーツによる地域活性化の可能性について、多角的に検討することにつなげることができた。

対象演習：B
実 施 日：2022 年 10 月 22 日(土)～10 月 24 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：社会福祉法人北杜・障がい者支援施設ほくと
実施内容：VR が障害の有無に関わらず、多様な主体がスポーツを享受できる方法を探り同時にリハビリとしての活用を模索するため、障がい者支援施設にて VR 体験会を実施した。
成　　果：VR の効用を十分に機能させることはできなかったものの、障がい者らとの交流体験を通し、障がい者に対するスポーツの活用可能性や運営上の課題を整理することができた。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきている。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのだろうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していく。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証する。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標である。

＜活動内容＞

小林ゼミ演習Ｃでは、演習Ａ・Ｂで展開される①秋田Ｊリーグクラブとの連携プロジェクト、②静岡県河津町にて開催した「防災運動会」のイベントの研究および現地での運営サポートを行った。

①は、Ｊリーグクラブのブラウブリッツ秋田と本ゼミが９年間にわたり実施してきた共同プロジェクトである。３年ぶりに秋田県現地にての開催が実現し、演習Ｂや演習Ａにおいて企画立案された６つのコンテンツに対して、その準備段階から当日の運営に至るまで、これまでのプロジェクトの実践経験をふまえつつ（事業立案から実施までのプロジェクト管理の方法や実際のスタジアムにおける人員誘導の方法など）、後輩ゼミ生らに対して協力支援活動を行った。

②は、静岡県河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指すNPO 法人「あおぞらビレッジ」と共同で行った防災運動会である。演習Ａの活動で企画立案された４つのイベントコンテンツに対して、運営サポートスタッフとして参加をすることで当日のイベント運営を円滑にし、加えてイベントに集まった河津町内外の小学生・幼稚園生・シニアクラブの方々計 70 名の人々と交流しながら、防災意識を高める実践的活動を行なった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：Ａ・Ｂ・Ｃ

実 施 日：2022 年９月 21 日(水)～９月 27 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Ｊリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行った。具体的には、老若男女を問わず参加できる「ウォーキングサッカー大会」の運営支援、ビギナーズを対象とした「元Ｊリーガーによる解説シート」の実施、現役Ｊリーガーの選手目線を疑似体験できる「VR 体験」の企画補助、マッチデープログラムの作成等の活動である。

成　　果：Ｊリーグクラブと連携し、プロリーグの公式戦をプロデュースすることで、一つの公式戦が運営されるのに、いかに多くのアクターが連携協力しているのかを「実際に体験」することができ、そうしたマネジメントの難しさを体感することができた。また、多様なアクターの力が結集されることで構築されるプロスポーツの空間だからこそ可能となる、スポーツをひとつの「ツール」とした地域貢献の活用可能性について検討することができた。

対象演習：A・C
実 施 日：2023 年 2 月 18 日(土)～2 月 19 日(日)
実施都市：静岡県賀茂郡河津町
実施場所：NPO 法人あおぞらビレッジ
実施内容：河津町において、現地の地域資源を活かした学びや地域交流の促進を目指す NPO 法人の「あおぞらビレッジ」と連携しながら防災運動会を企画し、身体を動かしながら火災や地震発生時の対応力を高める活動を行った。
成　　果：河津町の小学生や幼稚園生、保護者、シニアクラブの方々と 70 名を超える参加者らと「防災運動会」を実施することで、防災知識を学ぶことや多世代交流のきっかけとして、新たなスポーツの活用可能性を実体験することができ、「地域とスポーツ」の関係について多角的な視点から検討できるようになった。

(9)堤　和通（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

地域社会における社会安全政策

＜授業の概要＞

卒業論文を作成する。社会安全政策論の視点を入れた考察を試みる。社会安全政策論では、法政策学のアプローチから、ひとり一人の支配領域（自由、安全、自律）の平等保障の最大化が論じられる。ひとり一人の支配領域に価値を置くのは、それが、各自の自律と、自己表現、自己実現に価値を置く法の支配の理念に適う、よい社会の姿に適合するからであり、法政策学のアプローチをとるのは、社会的背景の下で生起する諸問題を克服し理念を実現するには問題の描写手法の普段の検討が求められるからである。

法制度上は、刑事司法が社会成員の支配領域保障を核とする領域、分野として位置づけられるので、刑事司法が授業のトピックであるのはもちろんであるが、その際には、犯罪事象についての通時的並びに重層的な描写が重視され、加えて、刑事司法と領域、分野を隣接する面がありながら、個人の安全や自律に係わる社会問題である、親密圏の安全や子どもの社会発達まで関心が及ぶ。

次項で触れるように、今年度のＣ生の場合には、例年の２年次以降の学修とは異なる進め方で授業が進んだが、それでも、2 年次、3 年次の学びのうえに立った、卒業論文の完成に向け、受講生が各課題に取り組んだ。

＜活動内容＞

今年度のＣ生が卒業論文で取り組んだテーマは、少年非行に関連した社会内処遇、憲法 14 条、24 条に係わる同性婚、日本の雇用、労働市場と多文化共生に係わる技能実習制度、子どもの発達に係わるヤングケアラー、である。こうしたテーマを、法の理論と法に関する理論を問う法政策学の手法に沿って受講生が調べを進め、経過報告を受けて質疑、意見交換を重ね、卒業論文を完成させた。

ゼミでは、4 年次の年度末に当たる 2 月上旬に関連学会（警察政策学会）の部会（社会安全教育研究部会）で卒論発表を行ってきており、今年度は、「非行少年に対する保護観察の検討」を執筆した受講生が発表した。

中央大学全学連携教育機構

本報告書に関してお気づきの点等ございましたら、全学連携教育機構事務室（多摩キャンパス 5 号館ペデ下ー学生部学生相談室上）までお問い合わせください。

＜問い合わせ先＞
全学連携教育機構事務室
TEL:042-674-3663
E-mail:flp-grp@g.chuo-u.ac.jp